

松山東雲女子大学
人文科学部 心理子ども学科
卒業研究抄録
2018年度

		ゼミNo
指導教員	泉 浩徳	1
指導教員	影浦 紀子	2
指導教員	小池 美知子	3
指導教員	児嶋 雅典	4
指導教員	小西 敏雄	5
指導教員	高橋 圭三	6
指導教員	西村 浩子	7
指導教員	増本 達彦	8
指導教員	小野 紳一郎	9
指導教員	門田・リングK	10
指導教員	佐伯 三麻子	12
指導教員	坪井 良史	13
指導教員	西川 勝利	14
指導教員	政本 香	15
指導教員	宮地 克典	16
指導教員	森 日出樹	17
指導教員	善本 裕子	18

氏 名	石城 由稀	学籍番号	J015006	ゼミ No.	1
テーマ	児童養護施設の子どもたちからみる親子の愛着関係と子どもたちの性格の関係性の考察-親以外の人的要因が子どもたちに与える影響-				
この研究テーマを卒業研究として取り上げたのは、現代の子育て事情と子どもたちの性格形成について興味を持ったからである。現代の子育てをする環境(家庭)は核家族化が進み、子育ての主な担い手が母親 1 人となり、母親への育児負担が大きい。少子化の影響から乳幼児に接する機会が減少し、乳幼児との接し方等を知らないまま親になる若者の増加。ライフスタイルや意識の多様化による、家庭の問題も様々になっている。さらに、インターネットの普及による子育てに関する情報の錯そう。これらの現代の子育てをする環境により、子育てに対するストレスや不安を多く抱え、精神的に不安定になってしまったりする親が増えていると言える。また、子どもへの愛情があっても子どもとうまくかかわれないという親も少なくない。その結果、親のストレスやプレッシャー等が子育てに現れ、子どもとの愛着形成がうまくできなかったり、子どもの成長・発達に影響したりするのであろう。 今回の研究の目的は、子どもの性格形成に親子間の愛着関係が影響を与えることを基本とし、親ではない周囲の大人や子どもの人的影響が子どもたちの性格形成にどのような影響を与えるのかについて事例考察をすることであった。児童養護施設で生活をする子どもたちに焦点を置き、事例を通して親子間の愛着関係が子どもたちの性格に影響することをエインズワースのストレンジ・シチュエーション法を用いて検証することができた。また、入所後の子どもたちの様子の変化から、職員との信頼関係が愛着関係に類似したものとなり、子どもたちの性格が変わるきっかけになっていることが分かった。愛着関係は乳幼児期の短い期間で作られるものであるため親（特に母親）のかかわり方が重要で、その後の子どもたちの成長や性格形成に大きな影響を与える。しかし、親との愛着関係だけが子どもの性格を作るわけではなく、子どもたちを取り巻く人的要因の影響によっても性格は変化する。様々な要因が合わさって性格形成に影響しているのである。性格に変化が表れたとしても心の奥には乳幼児期の経験などからくる子どもたちの思いや葛藤が残っているのではないだろうか。一言に性格といっても目に見える部分だけがその子の性格ではない。今回の研究結果を今後、保育者として子どもたちと関わる中で活用できるようさらに研究を進めていきたい。					

氏 名	宇都宮 楓	学籍番号	j 015010	ゼミNo.	1
テーマ	幼児期における自閉症児への関わり				

1. 研究の動機

近年、保育現場では発達障害と診断される子どもが増加傾向にあり、今後発達障害児に対する支援は今以上に重要視される。その中でも自閉症をとりあげ幼児期における関わりが及ぼす影響、自閉症児との関わりの中でどういった関わりや支援が最善なのかを考えていく必要があると感じ、研究テーマとした。

2. 研究方法

絵カードを用いたアプローチのほかに、実習園での事例検討や施設へ見学に行った際の様子・インタビュー内容、支援方法の違いなどをまとめていく。そのほかにも、言語療育だけでなく身体面において効果的な療育はあるのか、また身体面での療育の効果がどのように影響していくのか、事例検討や専門家によるインタビューから検証を進める。

3. 結論

自閉症児と関わっていく中で、弱い部分の強化を行うよりも、強み（ストレングス）を伸ばしていくことにより、成功体験を通して子どもの自信につなげることができ、そこから良い方向に作用し、弱い部分も引っ張られて少しずつ強化されていくのであろう。できなかったことができるようになることはもちろんいいことではあるが、短所ばかりに目を向けるのではなく、強み（ストレングス）に注目し、伸ばしていけるよう支援していくのだ。

幼児期において、どのような環境で療育・支援を受けるのか、どういった関わりを行ってきたのかにより、発達には大きな差が生まれていく。研究を行っていく中で明らかになったことは、最善の方法という固定されたものはなく、絵カードを使ったアプローチなどの構造化された支援が一般的にはなっているが、様々な視点から、ひとりひとりに合った療育・支援を行い、快適な環境だけを作るのではなく、様々な刺激を受けられる非構造化による環境も必要だ。さらにそこからどれだけ質の良い療育・支援を行っていくのかを考え実践していくことが、それぞれひとりひとりに合った最善の方法なのではないだろうか。

4. 参考文献

- ・ 自閉症とは 2018/04/28
<http://useful-information.net/jiheishou/>
- ・ 発達ナビ TEACCH とは 2018/06/3
<https://h-navi.jp/column/article/650>
- ・ 野呂健二 明石書店（2016） 2018/10/12
「幼稚園・保育園児 集団生活で気になる子どもを支える」

氏 名	梅木 夏美	学籍番号	J015011	ゼミ No.	1
テーマ	笑いとコミュニケーション				

1. 研究の動機

社会に出ると、初対面の人との付き合いや上司、部下との付き合いなど、人と関わる機会が増える。そのとき、どのように自分をアピールすれば、その人との距離を縮めやすいのか、自分に興味を持ってもらえるのか疑問に思った。そこで、お笑い芸人の言葉遊びを取り上げ、人に親しみやすさや楽しさを与えたり、雑談力を上げたりするためのスキルを調べたいと考えた。

2. 研究方法

M-1 グランプリを収録している DVD を視聴し、トランスクリプトを用いて、漫才中の会話全てを文字起こしする。文字起こしをした漫才から、漫才中の特徴的な言葉遊びを抜き出す。書籍で漫才の特徴的な言葉遊びの技法を研究し、その技法に当てはまる言葉を抜き出す。

3. 結論

文字起こしを用いて漫才を分析し、2つのことがわかった。

まず、笑いが起こるときの共通点は、緊張が緩和されたときである。

緊張感のある場面での、ボケ役のボケは緊張の緩和の役割を果たしている。キャラの設定や掛け合いのテンポ、声の大きさなどで緊張感を作り出し、ボケの一言でそれを緩和することで笑いが起きる。

次に、相手に自分の伝えたいことを聞いてほしいときには、お笑い芸人がよく使っている前フリというスキルが使える。前フリをしておくことで、相手に伝えたいことが伝わりやすくなる。

カテゴライズでてきた、あいまいや言い間違い、棚上げなどはツッこんでくれる人がいて成立するものであり、残された課題として、見せるため言葉のやりとりと日常の言葉のやりとりとは違った部分も多く、見せるための口調と日常の口調は異なる。このような笑いのスキルが使えるのはある程度関係性ができてからのほうが使いやすく、関係性がまだできていない人に使えるスキルは、関係性ができている人よりも少ないということが明らかになった。

4. 参考文献

・朝日放送/吉本興業(2008)
『M-1 グランプリ 2007 完全版 敗者復活から頂上へ～波乱の完全記録～』

・朝日放送/吉本興業(2017)
『M-1 グランプリ 2016 伝説の死闘！～魂の最終決戦～』

・田中イデア(2012) 『社会人が知っておくべき笑いのマナー ビジネスでもプライベートでも使える 108 のお作法』 Rittor Music

氏 名	柏原 美里	学籍番号	J015016	ゼミNo.	1
テーマ	保育所保育指針と幼稚園教育要領の改正のポイントと、幼児期に育ってほしい 10 の姿				

平成 30 年 (2018) 4 月に 10 年ぶりに保育所保育指針と幼稚園教育要領が改正され、施行されている。新保育所保育指針と新幼稚園教育要領の改正された背景、経緯には、社会情勢の変化などが大きく関係している。社会情勢の変化は、親の共働きにより、保育所や幼稚園を利用する家庭が増加し、未満児～施設を利用すると共に、施設も多様化してきているからである。また、家庭内のトラブルや虐待により、施設を利用することや、地域の中での子育ても多様になってきていることや、グローバル化などからである。また、保育所保育指針の改正に伴い、「幼児期の終わりまでに育って欲しい 10 の姿」が明記された。本研究の目的は、この 10 の姿は、どういう方向性を示すものなのかを基本として、小 1 プロブレムをどのように改善していくのか、就学前までに保育者として、子ども達とどのような関わりが必要なのかを検証し、明らかにする。

乳児、1 歳以上 3 歳未満児の保育の充実と、保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ、子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえた健康及び安全の見直し、地域の関係機関との連携がポイントである。また、保育所保育の指導を意図的計画的に進めるものと、保育がカリキュラムになった、子どもの発達にあわせた保育は必要だが、それだけではない保育士独自の関わりが必要や、把握などが具体的な内容である。

就学前までの育ってほしい 10 の姿は、なるべき姿や、理想として実現できる物ではなく、あくまで、5 歳児の後半までの成長の目安であり、目指すべき完璧な姿ではない。普段の保育の時は、全く気にしなくてよくて、意識しすぎると、保育できなくなる。保育者が子どもの振り返りをする時や、教育課程の検討をするときなどに参考となるものである。10 の姿は 3、4 歳で意識し過ぎると、高度すぎて、普段の保育が出来なくなる。また 5 歳になったからといって、すぐに意識し始めなくても、5 歳の半ばから意識し始めても大丈夫である。保育者は、10 のすがたを意識するのではなく、一人ひとり異なる個性があり、成長のペースも様々だから、その子の得意分野を伸ばし、自信に繋がるような働きかけをすることが大事である。普段の保育で 10 の意識せず、子どもと思いつき遊んだり、子どもに寄り添い試行錯誤しながら、一人ひとりと関わっていくことが大切である

氏 名	清家ひな	学籍番号	J015033	ゼミ No.	1
テーマ	児童自立支援施設の入所児童の実態				

近年、家庭や地域における養育機能の低下など、子どもを取り巻く環境は大きく変化し、児童虐待の増加やいじめ、少年事件の発生など、子どもの問題が一層深刻化している。それに伴い、社会的支援を必要とする子どもの範囲が拡大し、かつ複雑多様化する傾向にある。児童自立支援施設とは、虞犯少年・少女が入所し、自立に向けた支援を行う場所である。今回、児童自立支援施設の入所児童の姿の実態についての研究をしようと考えたのは、保育実習Ⅲで房児童自立支援施設に行った際、接する前に思い描いていた入所児童の姿と、実際に関わってみた際のその姿に、大きな違いがあったからである。本研究では、どのようなきっかけによって児童たちの態度が変化し、自立や成長に繋げているのかについて明らかにしたい。本論文の目的は、その課題を検証するため、実習で実際に体験したエピソードを踏まえ、参考文献と照らし合わせながら研究を進める。そして、虞犯少年・少女の実態を知り、それらへの理解を深め、児童自立支援施設の支援の在り方について具体的に提言する。

子どもが触法行為をする根本的な原因は、小さい頃に形成されるべき愛着がしっかりと形成されていなかったり、ネグレクトなどの育児放棄によって精神的苦痛を与えられていたりなど、育ってきた家庭状況にあることが大半である。しかし、施設で定められた規則正しい生活を送ることで、子ども達は落ち着いた生活を取り戻し、また、社会性を身につけることができる。実習に行くまでは、虞犯少年・少女は、今まで自分がしてきた行為と向き合い、自身が変わることはそう簡単にできないと思っていたけれど、実習に行き入所児童の実態を観察し、環境次第で変わることが可能である。

筆者は今回、卒業論文を通して、子どもの生活環境について深く考えることができた。子どもにとって養育される相手や、その取り巻く環境が、成長過程に大きく影響を与えるということが分かった。そして、施設内だけに限らず、まずは地域内で子どもを育てやすい環境をつくることが大切なのではないかと感じた。最近では、地域内の人間関係の希薄化なども社会問題となっている。子育てがしにくい環境と化しているということが目に見えて分かる。地域で子どもを育てるということを、もっと意識化していくべきだと感じる。子育てのしやすい環境、地域で子どもを育てるという環境をつくっていくことで、虐待などの問題は減り、虞犯少年・少女の減少にも繋がるのではないかと思う。まずは、親子に優しい生活環境を増やしていくことが大切である。

氏 名	田窪 美歩	学籍番号	J015034	ゼミ No.	1
テーマ	社会的動向からみた保育におけるソーシャルワークの一考察				

近年、少子化や都市化、核家族化等が進むなかで、子育て家庭は様々な子育てに関する問題を抱えやすくなっている。このような社会変化を背景に、保育所およびそこで働く保育士の役割は拡張しており、保育所で働く保育士にはソーシャルワークを用いた子育て支援が求められている。しかし、子どもへの直接的な援助に加え、ソーシャルワークを活用した保護者への支援となると保育所で働く保育士にとっては負担が増える。ソーシャルワークの知識や技術の活用が有効ではあるが、果たして保育士がその全てを賄わなければならないのか、人的配置や予算、専門機関を設置することの必要性を含め、本稿で検討する。

保育士の国家資格化により、保育士の業務としてソーシャルワークが位置づけられ、さらにその専門性の確立と向上への努力が法的な面から求められるようになった。そして、基礎知識である発達の特性を理解した上で、子どもの発達状況や個性を捉えながらその子らしさを引き出し、成長を助けていくことが保育者の役割である。子どもたちの主体的なかかわりを引き出す環境を構成し、遊びの充実や生活の安定を図り、それぞれの子どもに対する適切な援助方法を導き出す力を身につけることが必要である。

このような子どもへの直接的な援助に加え、ソーシャルワークの知識や技術を活用することが求められる。保育ソーシャルワークは、1999 年、現在の厚生労働省である当時の厚生省より公表された保育所保育指針から議論され始めた。しかし、統一された定義はなく、民間資格として保育ソーシャルワーカーの資格が発行されているのみである。日本ソーシャルワーク学会の中心的な考えは、一般の保育士がソーシャルワークを行うことを想定している。このように、現在は「保育士をソーシャルワーカーに」派と「ソーシャルワーカーを保育所に」派のふたつの考えが存在している。

保育士にもソーシャルワークの知識や技術が求められる場面が露呈し、保育所保育指針の改定からも「保育士をソーシャルワーカーに」派が強いようにもみえる。しかし、このような思想の流れでは保育士の負担は増すばかりであり、保育ソーシャルワーカーを職業として確立していく必要がある。保育ソーシャルワークをきちんと保育所機能の中に位置付け、そのための財政的裏付けをつくり、保育ソーシャルワーカーという職業が位置付けられていくことが求められていると考える。

氏 名	竹内 春香	学籍番号	J015035	ゼミ No.	1
テーマ	幼児期における外国語教育について				

近年、日本ではグローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上が重要とされている。しかし、先進国の中で日本人の英語力は低いと言える。現在、小・中・高等学校を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を養うことができるよう取り組みがなされている。保育所・幼稚園・認定子ども園などでは、そのような計画はなく、明確な取り決めなども存在しない。そこで、幼児期における外国語教育の在り方について明らかにする。

本研究は、先行研究・ホームページより、幼児期から外国語を学習することのメリット・デメリット、幼児期・幼児期以降での外国語教育のスタート時期による比較、海外と日本の外国語教育の比較の調査、英語教育に係る教員へのインタビュー調査、幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説から調査より、幼稚園、保育所、認定子ども園において求められる教育内容・保育内容、幼小接続についての調査を行った。

結論、幼児期からの外国語教育には、多くのメリットがあるということが明らかになった。反対にデメリットとして、過度の教育は幼児にとって負担となるということ、ということが明らかになった。そのことから、学習を目的とした教育ではなく、外国語に親しみ、楽しめるような外国語教育を行うことが必要であると言える。さらに、文法などを重視するのではなく、コミュニケーションをとりながら、相互作用を大切にしたり関わりを持つことが必要である。これらのことが、幼児期における英語教育では重要となってくるということが明らかになった。

幼児期における外国語教育では、一方的な教育や正確さにこだわるのではなく、幼児が楽しく、積極的に参加することのできる外国語教育を行うことが必要である。幼児期から英語に慣れ親しむことで、小学校に入学した際、外国語を抵抗なく学習することができる。また、日本の英語教育で課題とされている、英語でのコミュニケーション能力を向上させることができるのではないだろうか。

これから幼稚園、保育所、認定子ども園などで働く保育者として、園で行う外国語活動についてどのように取り組むべきか考えた。子どもの外国語学習には、相互的な関わりが有効的だということが本研究で明らかになっている。そのことから、フラッシュカードなどを使用した単語の暗記などは有効的でないと言える。子どもと保育者とのコミュニケーションを伴った教育が有効的である。日常生活に外国語を交えてコミュニケーションを取ったり、歌や手遊びなど親しみのあるものに外国語を取り入れたりすることで子どもが外国語に触れることができたり、興味を持ったりすることができるよう関わるが必要になってくると考える。

氏 名	多田優子	学籍番号	J015037	ゼミNo.	1
テーマ	プリキュアと保育について				

東雲女子大学に入学し、授業や実習を通して子どもと密に関わる機会があった。様々な保育現場を見て、園によって推奨している遊びや、園の雰囲気等で子どもたちが熱を入れている遊びはそれぞれだ。遊びに観点を置いて子どもの行動を観察、考察している時にどの園でも子どもたちが熱を入れている遊びを発見した。それは、「プリキュア」のごっこ遊びである。「プリキュア」に対してどんなところが女兒に共通して興味が沸くのか疑問を抱いた。

「プリキュア」の魅力的な特徴や女兒が惹かれる理由を追求し考察することで、子どもとコミュニケーションを取るきっかけになるだろう。また、私は将来、保育関係の仕事に就きたいと思っている。保育関係の仕事に就いた時、発表会や遊びの中で「プリキュア」の特徴を捉えていれば、「プリキュア」のストーリーや登場人物を参考にし、遊びを提案できるだろう。そうすることでスムーズに子どものやる気を引き出すものを提案できるだろう。そうすることで、子どもが楽しみながら、遊びを発展させ発想力を培い、集団生活の練習ができるだろう。

私は、「プリキュア」の変身シーンに憧れを抱くことや、変身後の恰好がピンク、きらきら、自分も主人公になりきって仲間と協力して敵を倒すからではないかと仮説を立てた。3・4・5歳の女兒を対象に「プリキュア」が好きかアンケートを取り、何故魅力的なのかを調査した。そして、対象作品を視聴し、共通点を見つけ分析した。その共通点をもとに女兒に更にアンケートを取り、魅力的な部分を分析した。その結果、変身シーンに憧れを抱く女兒が多いことが分かった。また、煌びやかな衣装に憧れを抱き、自分も主人公と同じようにキラキラの衣装を着たいという願望を持った女兒もいた。実際に、おもちゃ売り場でプリキュアの衣装やパジャマを売っているのを見かけたことがある。

「プリキュア」と同じ衣装を着ることで、自分も「プリキュア」の世界観に入り、自分も「プリキュア」に成りきって、仲間と一緒に敵を倒すごっこ遊びに展開され、その発想力や物語を作る楽しさを味わうことで、他の遊びに対しても様々な提案があるだろう。その子どもたちの提案を受け止め、新しい遊びを作ったり劇や発表会で自分たちオリジナルの物語を考えたり保育現場で活用できることがたくさんあると思う。

今後の課題は、この「プリキュア」の共通点の保育現場での活用場面や方法を考え、実践することである。また、今回は3・4・5歳児の女兒を対象にしていたが、対象を広げ全園児が魅力的に感じるキャラクターを見つける。そして、共通点を分析し女兒だけではなく、男児も対象となる遊びを提案し発展させていきたい。

氏 名	濱村早生	学籍番号	J015043	ゼミNo.	1
テーマ	絵本の年齢によるストーリー性の違い				

1.研究の動機

保育実習に参加したり、授業を受けたりする中で、各年齢によつての絵本の違いとはどのようなものがあるのかと疑問に思った。そこで、各年齢の絵本の違いを調べ、ストーリーによつて子どもが面白いと思ったり、楽しいと感じたりするところはどんなところか知りたいと思った。そこで、同じ絵本でも各年齢の子どもの発達によつて絵の描き方やストーリー性など、どのように違っているのかということを疑問に思い、調べることにした。

2.研究方法

所属する松山東雲女子大学の図書館で本を借りて読んだり、ネットで購入したり友達に借りるなどし、少しでも多くの絵本を見て読んで、様々な種類の本を参考にして調査を行った。

3.結論

たくさんの種類の絵本がある中で、各年齢に合わせて絵本の選択の必要性が明らかになった。年齢ごとに絵本が分けられている絵本が多いが、子どもの成長や発達に合わせて選ぶことで、子どもが感じたり楽しんだりする気持ちが変わってくるということが分かった。各年齢でのストーリーの違いを見てきて、言葉があまり分からない0～1歳児の場合は、聞いたり見たりして楽しめる絵本を選び、少し言葉が分かってきて言葉の楽しさや会話の楽しさが分かってくる頃には2～3歳児の絵本を選ぶことが大切であろう。4～5歳児だと、難しい言葉も使うようになっていたり話の幅が広がったりしていくため、絵本に出てくる登場人物の気持ちを考えられるような濃い内容の絵本を選ぶことが大切である。絵本は、優しいストーリーから内容の濃いものまでたくさんあるため、様々な場面で季節やその時に合わせてたくさんの絵本を読めるようにしておく子どもも楽しめることができる。

各年齢に合わせた絵本を選ぶことで、言葉の発達や文字や会話の楽しさを知っていき、様々なことで子ども自身が成長していけるということが明らかになった。そのため、絵本を選ぶときは、年齢に合わせた絵本を選ぶことが子どもにとって大切なのだと考える。そうすることで、より子どもも絵本に興味を持ち、より楽しみながら絵や言葉に触れることができ、絵本を好きになってくれるのではないかと考える。

4.参考文献

・澄川綾乃のことばカンタン家庭療育「2歳児にかけての発達の特徴」ホームページ 閲覧日 2018年11月20日

<https://sumikawa-ayano.com/2%e6%ad%b3%e5%85%90%e3%81%ae%e7%99%ba%e9%81%94%e3%81%ae%e7%89%b9%e5%be%b4/>

氏 名	三好莉奈	学籍番号	J015048	ゼミNo.	1
テーマ	未満児に対する指導案作成時の留意点について				

この研究テーマを選んだ理由は、3年時に地元の保育所の2歳児クラスで実習をさせていただいた時に、自分が立てた指導案と、実際に保育者から助言していただいたこと、子どもたちの前で実際にしてみてもとの反応とで自分の考えていたものと違っていた。どこをもっと見ていけば上手く計画が立てられるのか、どのようなことが未満児保育で必要なかを詳しく知りたいと考えたからである。

入学前、保育者は子どもと一緒に遊ぶ大人であると考えていた。だが、大学に入学し、講義を受けていくうちに考え方が変わった。保育所保育指針での指導計画の作成ではこう書かれている。保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。また、ねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切に適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにすること。とある。つまり、日々の保育での子どもの姿を観察し、子どもたちが今一番興味を持っていることを季節に合わせて計画し、保育者は環境を作っていくということであろう。

この論文の目的は、子どもたちが楽しめる指導案を立てる方法や未満児保育で必要なことを研究することであり、子どもが今興味を持っていることを知り、指導案に入れたり、未満児には、大人からの声掛けが特に重要ということがあきらかになった。自身の経験や書籍等から、指導案は、日々の保育での子どもたちの様子から立てていくものであるということが分かった。特に未満児では、基本的生活習慣（着脱・排泄・食事・睡眠）を身につけていかなければならず、これらも指導案のねらいに入れなければならないということが分かった。未満児は、一人ひとりの個別指導計画も綿密に立て、全体の活動が円滑に行うことができるようにしなければならない。未満児は特に個人差というものが大きく現れる時期だからである。保育者が日々の保育の中でその子の性格や周りとのやり取りを観察し、その子が楽しく、健やかに成長、そして安全に生活できるような指導案を作成しなければならないということが分かった。また、保育者との応答的なコミュニケーションも大切である。大人の声掛けを通して、子どもは多くの言葉を知ったり、自分の感情の表し方を学ぶのである。

指導案を作成するに当たって必要なことは、子どもたちの日々の様子を観察しながら、今の子どもたちが何に興味を持っているかを考え指導案に入れていかなければならないということである。また、子どもたちが今置かれている状況も踏まえ、それらも考慮しながら指導案を立てていかなければならないということである。

氏 名	山内彩愛	学籍番号	J015051	ゼミNo.	1
テーマ	保育者による愛着形成の方法に関する研究				

今回「事例研究における保育園での愛着形成の方法」として研究テーマを選んだ理由は、幼少期での愛着形成がとても大切だということをこの3年間の講義で強く感じるとともに、将来、保育士として専門性を生かしながら、どのような方法で愛着形成ができるのかを疑問に思ったからである。また、近年では、共働き家庭が増加傾向にある。それに伴い、子どもに対する愛着形成の困難さを保護者等や保育者が感じているのが現状である。保護者等や保育者は、子どもと一緒に過ごすことのできる限られた時間の中でどのような方法で愛着形成をしていけばよいのか等について疑問を感じたからである。これらを検証するために、現場での保育士経験のある現役保育士にインタビュー調査を行ったり、実習での事例研究をもとに、保育者はどのような方法で愛着形成をしているのかについて考察を行ったりした。

研究結果として、愛着は、社会性を身に着けるために欠かせないものだということがあきらかになった。具体的に、ここでいう社会性というのは、子どもの人格形成の土台を育て、そして、それが、自己肯定感や基本的信頼感に繋がるものだということである。愛着形成がされていないと、自分の安心できる居場所がなく、自分は愛されていない、どうせ自分なんかというように自己否定感が強まることで、他人を信頼することもできなくなり、将来、大きな障壁にぶつかったときに、自分から助けてほしいという発信が出来ず、社会に溶け込むことが困難になる可能性も考えられる。最低限度の養育だけでは、十分な言葉を用いたコミュニケーションが出来ない。その分、子どもと養育者の関わりは減り、普段から言葉に触れる機会が少ないため、どうしても知的発達の面での遅れが生じてしまうことがあきらかとなる。また、逆に母親の絆の重要性は、以前から指摘されていることだが、絆は母親(養育者)から子どもへという一方的な関わりによって形成されるものではない。母子の愛着関係は循環的相互作用(相互的なはたらきかけ)によって自然に強められていくと考えられている。つまり、このような瞬間的相互作用を有効なものにするためには、養育者が子どもの要求を敏感に感じとる感受性と、子どもの要求を的確に満たす応答性が重要になるといえるだろう。クラスの担任だけが愛着形成をするのではなく、園全体でその子どもの家庭環境や愛着形成が必要だということを共有し、子どもの成長を見守っていくという環境をつくっていた。そして、愛着形成の対象は、子どもだが、愛着形成の重要性を保護者等に伝えることで、愛着形成を家庭でも行ってもらえるように考える。これも間接的ではあるが愛着形成の方法の1つなのだとはいえる。しかし、現代では虐待が増加傾向にあるとともに、養護施設で暮らす子どもの数が増加傾向にある。これらの社会での課題から、今後、保育者による愛着形成はさらに重要になるといえる。

氏 名	明比麻羽	学籍番号	J015003	ゼミ No.	2
テーマ	製作活動における保育者のかかわり				

保育園や幼稚園に実習や見学に行かせて頂くと、折り紙遊びをしている子どもたちの姿をよく見た。自分の世界に入り込み、一人で折り紙を楽しむ子や、友達と協力しながら折り紙をする子、保育教諭や実習生のもとに持ってきて折ってもらう子など、子どもたちの姿は様々であったが、圧倒的に多かったのは、保育教諭や実習生のもとに持ってきて折ってもらう子であった。しかし、「わからない」と尋ねてきた子どもたち全員の要望に、大人が一気に応えることは不可能である。教育実習させて頂いたD認定こども園の年中組の担任I保育教諭は、一人で折っている子や友達と折っている子には様子を見て、自分たちで折った折り紙を認める声掛けをして関わっていた。保育教諭のもとに来る子どもたちには順番に折って渡したり、できそうな子には途中でやって見せて最後は子ども自身にやらせたりなどして関わっていた。私もD認定こども園の年中組で、子どもたちと折り紙遊びをする機会があった。そこで事例を抽出していく中で、どのような関わり、声掛けをすれば良いのかを考えた。また、折り紙折り方を説明した本の説明が難しいと覚えることがあり、どうすればわかりやすく説明できるのか、加えて、折り紙で育つ力、その力を育てるために必要なかかわりはないか、その発達意義についても追究した。

第一章では折り紙の歴史と教育的価値について追究し、第二章では保育現場における折り紙遊びの実践を事例と考察をもとにまとめ、第三章では折り紙遊びで育つ力について、第四章では折り紙遊びにおける保育者のかかわりについてまとめた。

折り紙は平安時代には既に存在しており、江戸時代から「折り紙」という言葉が使われ、一般化した。その折り紙が、現在でも子どもたちの遊びとして伝え続けられている。幾何学的直観の育成のためにフレーベルも恩物に取り入れていた。折り紙は、脳と手先の連携や発達を促すだけではなく、つくり上げたときの達成感や満足感を子どもに与え、それが子どもの自信にもつながっていく。また、作品をつくる過程で教え合う姿が見られるようになるなど、一枚の紙を媒体に子ども同士の関係が生まれていく。折り紙はただ完成しておしまいというだけではなく、つくったものを遊びのなかで使う道具にするなど、子どもの遊びを豊かにする活動でもある。折り紙遊びにおける保育者のかかわりとして、わかりやすい言葉かけ・たとえを使うこと、落ち着いた雰囲気や机を準備するなどの環境設定、説明する教材の準備などが明らかになった。

これから子どもに折り紙遊びを伝え続けるためにも、子どもが活動しやすい環境を設定したり、楽しさを一緒に味わえるように子どもよりも折り紙をマスターしておくなど、折り紙遊びだけではなくほかのことも同じだが、保育者として子どもの遊びにかかわるときの配慮点をよく理解しておく必要がある。

氏 名	大西 綾音	学籍番号	J015013	ゼミNo.	2
テーマ	保育者のうたうことが子どもに与えているもの				

保育の現場で歌を歌っている光景をよく見る。その中には単に子どもを保育者が思うように動かすために号令として歌を利用しているところも少なくはない。しかし、筆者はある保育園で、歌いかけることで自然に子ども自ら行動しているようにうたを取り入れている保育者に会った。そこで、本研究では、号令としての歌と歌いかけるうたの違いを研究し、歌いかけるうたを保育にどのように取り入れていけばいいのかを明らかにした。

第Ⅰ章では、人間の耳の役割、子どもの聴覚の発達の仕組みについて調べた。子どもの聴覚は生後 6 ヶ月でほぼ大人と同じであり、ヒトの赤ちゃんは静寂さより親が歌うわらべうたや子守歌などを好んで聞く。とくにマザリーズ(母親が高いトーンでゆっくりと抑揚をつけて語りかける話し方)を好む。そして子どもにとっての歌を大きく①号令としての歌と②聴覚経験としてのうたの 2 つに整理した。号令としての歌は、保育者のねらいとする方向へ動かすことが目的であり、保育者の働きかけとしては、CDで音楽を流したり、ピアノ伴奏で一斉に歌ったり、決められた歌を音階通りに正しく歌うことを指導する。一方、聴覚経験としてのうたは、声(リズム・メロディ)の楽しい変化や子ども自身が声を発して楽しむことが目的であり、保育者の働きかけとして、雰囲気や感情で自発的に歌うことで、子どももその声を聴いて一緒に歌ったり、子どもの声やうたを聞いたりして一緒に歌う。

第Ⅱ章では、保育所におけるフィールドワーク(片付け、おやつ、集まりの時間の観察)から、子どもの名前を入れる、パペットを使う、身ぶりや手遊びなどの身体活動を伴っているといった特徴が明らかになった。保育者と一緒にうたうことでちょっとした言葉でも感情や雰囲気を共有し意味を理解して、言葉と行動を結びつけていることが明らかになった。

第Ⅲ章では、歌を聴くことの効果として、①記憶力の向上、②安心感、③言葉の練習、④感受性の育ちが明らかになった。また、電子機器ではなく直接うたいかけることで、場面に応じて変化させることができ、音声のイントネーションや微細な表情の感受が、言葉の理解や発語の意欲、そして感情の理解と表現にもつながっていく。さらに、静かな保育室で歌いかけること、メリハリをつけた環境設定をしてから歌うことが大切であることがわかった。

以上より、保育者自身がうたを楽しむ姿は子ども達にも必ず広がっていくものであると筆者は考える。また、子どもたちは保育者から音楽を教わるのではなく、生活の中で音楽を楽しむ保育者の姿や音楽を楽しむ生活全体の中から、楽しさを見つけているのかもしれない。保育者はそのことを理解して、歌う楽しさを強要するのではなく、共有していくことが大切である。

氏 名	鎌倉志帆	学籍番号	J015019	ゼミNo.	2
テーマ	子どもの主体性を大切にした保育とは				

本研究では、子どもが主体的に活動するために保育者のどのような関わりが大切であるかについて明らかにした。そのために、まず、子どもの主体性の定義と歴史について整理した。次に、主体性と非認知能力の関係、主体性と子ども理解の関係について調査した。最後に、子どもの主体性に関して異なる捉え方に基づく二つの事例を比較し、保育者の関わり方を考察した。

第一章では、主体性とは保育者の指示で動くのではなく、子ども自らの考えや意志で動くことであることが分かった。また、主体には「私」と「私たち」の二側面があり、バランスがとれているということが主体的な状態であると言えることが明らかになった。そして、このようにバランスがとれるようになるためには、保育者の「育てる」営みが必要になる。

第二章では、非認知能力には三つの側面があることが分かった（OECD）。一つ目の目標を達成する力では、忍耐力・自己抑制・目標への情熱が伴う。二つ目の他者と協働する力では、社交性・敬意・思いやり、三つ目の感情をコントロールする力では、自尊心・楽観性・自信が伴う。無藤によるとこれらのスキルは、IQなどで数値化される認知能力と異なり目には見えにくい「学びに向かう姿勢」であり、「これからの幼児教育の中心」である。保育において、粘り強さや挑戦する気持ちを重視すること、非認知能力と認知能力が絡み合うように伸びていくこと、非認知能力は生まれ持った気質や性格ではなくスキルであると捉えて援助していく必要があることが明らかになった。

第三章では、保育者が自分の願いを子どもに押し付けてしまった事例と、子どもの気持ちに寄り添い保育者の主体性を大切にした事例を対比的に紹介した。そして、そのときの保育者の願いと子どもの思いを明らかにし、主体性との接点やずれについて検討した。その結果、保育者は単に子どもの世話をするだけでなく、「子どもの思いを受け止めて関わること」が重要であるということが明らかになった。つまり、保育者は子どもの思いを理解すればするほど葛藤するが、子どもの行為を受け入れ、保育者の思いを伝えたいうで、子ども自身が意思決定をしていくように関わるということである。

以上より、主体性は、子どもが生まれながらにもっている気質ではなく、保育者の関わりで十分に伸ばしていくことが出来る力である。保育者は、活動の中で子どもが今、何を感じ、何を思っ、どうしたいと考えているのかを見極めなければならない。また、子どもの主体性を育てていくためには、子どもの手本となる私たち保育者も主体性をもっていなければならない。

氏 名	長沼幸奈	学籍番号	J015040	ゼミ No.	2
テーマ	「災害における子ども・保育所の実体と保育者の対応」 ～子どもの権利保障の観点から～				

今日、日本では、経済的困難等を抱えた家庭の中で成長する子どももいれば、激甚災害により生活が一変しストレスを抱えて生活する子どももいる。本来、子ども一人ひとりには平等であり、最低限の生活をする権利があるはずだ。本研究は、子どもの権利条約をてがかりに、平成 30 年 7 月豪雨災害の実態と保育者の対応について調査することで、子どもたちが本当に幸せであるために保育者としてできることについて明らかにした。

第 1 章では、日本国憲法、児童福祉法、児童憲章より、子どもたちが幸せに生きるために、どのような権利が保障されているか明らかにした。戦後、子どもの権利は、子どもの誰もが幸せに生きる権利が保障されてきた。子どもには心身ともに健やかに育成される権利があり、基本的な生活習慣や社会常識などに適切に指導される権利もある。子どもは、守られるだけの存在やよい環境や生活を与えられるだけの受動的な存在ではない。遊ぶこと、意見を述べることも子どもに保障された権利の一つであり、子ども自身が能動的・主体的に生きることができると言える。

第 2 章では、平成 30 年 7 月豪雨災害のフィールドワークや保育者へのインタビューをもとに災害時の実態を明らかにした。また、保育所保育指針や PFA（子どもの心理的応急処置）をもとに、被災した子どもにどのような対応ができるのか明らかにした。子どもの生命を守るために、災害時の対応を共有し、行政機関や地域と連携して進めることが求められる。

第 3 章 PFA による被災後のケアでは、災害時に普段と違う行動をする乳幼児のストレス反応を明らかにした。PFA は、「見る（look）→聴く（listen）→つなぐ（link）」の行動原則のもと、それぞれに注意した内容がある。子どもに身近な保育者や保護者が子どものために寄り添い、手助けを行ったり、保護したりすることである。

第 4 章では、国立大洲青少年交流の家で実施した災害後の子どもたちのケアとして企画された遊びスプラッシュ～水鉄砲で思いっきり遊ぼう～のボランティア経験をもちに保育の中でも「遊び」の治癒的効果を認識していく必要があることを明らかにした。

以上より、保育者は何が子どもの「最善の利益」であるのか常に考えなければならない。災害は予測できないが、被災経験やボランティア活動で学んだことをもちに防災の準備や災害後の子どもの心身のケアを保育の現場で繋げられるようにしたい。

氏 名	麦田 舞	学籍番号	J015049	ゼミ No.	2
テーマ	スポーツと自己形成 ー 幼児の発達に合わせた体育指導ー				

私は小学校 6 年生から柔道をしている。柔道を始めたきっかけは、友達がやっていて興味を持ったからだ。柔道を初めて大学に入るまで、精神的に強くなる為や目標を掲げてそれを達成するために柔道を頑張ろうなど考えたことがなかった。だが、この東雲大学に入り柔道というスポーツを通して、それまで自信が持てなかった自分が大きく変わった。新しい仲間、監督と出会い、信頼できることで、挑戦し乗り越えようという強い気持ちを持つことができ、自信になった。この経験から柔道などスポーツが単に得意だからということだけでなく、自分をつくるうえで大事な働きをしているのではないかと考えるようになった。また、保育所や幼稚園での実習を通して、子どもたちと運動遊びを中心とした保育を行ったり、子どもたちと日常的に運動遊びをするなかで、スポーツが乳幼児期の子どもの発達にとって重要な役割を果たすのではないかとすることを考えるようになった。そこで本研究では、柔道をてがかりとしてスポーツが自己形成にどのような影響を与えているのか明らかにし、そしてフィールドワークによる事例から幼児期の運動遊びの指導の在り方について考察した。

それまでの柔術を戦うための技ではなく、自己形成の道とした柔道家、嘉納治五郎の「精力善用」「自他共栄」という思想は、スポーツによる自己形成の神髄を表す言葉である。「精力善用」の精神とは「心身の持つすべての力を最大限に生かして、社会のために善い方向に用いる」ということである。「自他共栄」の精神とは「相手に対し敬意、感謝することで、信頼し合い、助け合う心を育み、自分だけでなく他人と共に栄えある世の中にしようとする」ということである。

また、事例では、いつもは自由に遊びまわる時間を、あえて集団活動としてみんなでルールを確認して活動をすることで、子どもたちもわくわくし精神的に活発になりメリハリのある時間となった。いつも曖昧なルール、短い時間で遊ぶ子どもたちだったが、みんなで行うこと、ゲームを中断せずに最後まで行うことで、悔しい気持ち、嬉しい気持ち、勝つために頭を使い考えること、協力することなど、子どもたちなりに全力で熱中して楽しんでた。ゲーム終了後もやルールの変更について話し合うなど、自分たちで遊びを展開しようとする姿が観察された。

この研究を通して柔道だけでなく日々様々な経験から、応援してくれる人の為、自分の為、柔道ができる環境にあること、感謝の気持ちを忘れないことなど、生まれてきてから今までの人生でこのように感じ、考え、思うようになった。スポーツによる自己形成とは、まさに、このように自分の力を最大限に発揮しつつ、生活全体を通して感謝の気持ちを持つことだといえるだろう。

氏 名	相原 鮎美	学籍番号	J015002	ゼミ No.	3
テーマ	児童養護施設保育者が留意する援助の観点 ー経験年数の違いによる意識に着目してー				
児童養護施設の入所児童数は約 1 割増、乳児院が約 2 割増となる児童虐待の増加等に伴い、児童虐待防止対策の一層の強化とともに、虐待を受けた子どもなどへの対応として、社会的養護の量・質ともに拡充が求められている児童虐待の増加などにより児童養護施設に入所する子どもが増えており、要保護児童一人ひとりに対する援助の質が重要になってきている。そこで社会的養護の現状を背景に児童養護施設保育者が留意する援助の観点は何なのか。経験年数の違いによる意識に着目して検討する。 そこで、調査対象を任用初年目保育士と任用二年目保育士に限定し、インタビューに協力していただいた。調査項目は、児童養護施設保育士の子どもへの関わり方を検討するためにインタビュー質問 14 項目と設定した。 その結果、以下のことが明らかとなった。 まず、入所受け入れに関することでは、入所して来る子どもの入所理由についてはどちらも言わないことを徹底しており、子ども達がお互いになじめるように工夫をしている。 次に、障がい児への関わりに関することでは、任用一年目保育士の場合、子どもの気持ちを一番に考え怖がるような言動と行わないことに気を付けている。任用二年目保育士の場合、虐待されているということをあえて意識しないことで施設での安心感が得られる工夫をしていることがわかった。これらにより、一対一で寄り添うように関わることで目を離さないことと、子どもの気持ちを第一に考えていることが共通しているといえる。 さらに、学習支援に関すること(異年齢間のトラブル対応含む)では、個々の学習レベル・能力に応じた学習支援が行われており、トラブルが生じた場合なども子ども達が相互に話し合い解決できるような環境が用意されている。 加えて、精神面の安定に関することでは、幼児の場合、ひとり一人の成長の様子や発達を捉えた援助をしているといえる。 また、家庭復帰に関することでは、任用二年目保育士は、これまでの経験により家庭復帰への流れが専門職として定着しており、任用一年目保育士は対象者への直接的な関わりに思いが及んでおり家庭復帰への流れに意識を向けるまでには至っていないのではないだろうか。 上述により、施設保育士は現場での経験を積むことによって、対象者ひとり一人に関わって支援するカウンセリングマインドに加え、ソーシャルワーク的な視点を持ち合わせて職務に従事しているといえよう。					

氏 名	林麻衣	学籍番号	J015044	ゼミNo.	3
テーマ	幼児の主体的な音楽遊びの生起から発展への道筋				

幼稚園教育要領によると、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」と述べられているように、幼児は自分の気持ちを様々な形で表現し、友達同士で表現していくことの楽しさを味わうようになるのだろう。では、幼児は個々の音楽表現を他児との関わりの中でどのように広げていくのであろうか。これらを本研究の問いとして、筆者の実習事例の検討を通して明らかにすることを目的とする。

本研究では、筆者の実習を通して得られた音楽行動事例を原データとして、歌行動、ダンス行動、動きのリズム行動、道具を介したリズム行動の4つのカテゴリーに当てはめて分類し、幼児の様々な音楽行動が、いかなる道筋を経ながら、年齢ごとに発達を遂げるかその道筋を検討する。

歌行動事例では、すでに知っている音楽ではなく感じたことや見たものを即興で自分なりに歌を作るということは、3歳児の特徴的な音楽表現であると考えられる。5歳児は目に映ったものや自分の感じたことを普段歌っている季節の歌や知っている歌で表現したり、周りを巻き込み合同歌唱をしながら音の重なりを楽しんだりしていると考えられる。ダンス行動事例では、子どもたちは音楽を耳にすると自然と身体が動き、その動きには単純に首を振ったり、歌の歌詞を感じとり表現したり、また、歌に出てくるものを身体を使って表現していることが分かる。動きのリズム行動事例では、「ピーポーピーポー」「ペッタンペッタン」などの擬音語から成る音楽行動が多く見られた。2歳児、3歳児は言葉を交わしたコミュニケーションがあまり活発ではないため、感じたことを擬音語を用いながら身体を動かして表現したり、同じ言葉を何度も繰り返したりしながら音楽が形成されていることが分かる。道具を介したリズム行動事例では、2歳児～4歳児それぞれの年齢において事例が見られる。子どもたちはどの年齢においても好奇心が強く、小さな音にも敏感である。そのため自分の遊んでいる道具から自然と出た音に反応し音の出る楽しさを味わっているのだと考えられる。

事例を通してうかがえることは、2歳児や3歳児の低年齢の子どもたちには単純な言葉を繰り返して使う擬音語を用いたリズム行動が多く見られることに加えて、ものを通した音楽行動や、身体を動かした音楽行動が見られる。一方、4歳児、5歳児の高年齢の子どもたちでは、感じたことを既に知っている歌で表現しながら、まわりの子どもたちを巻き込んでいる姿が見られることから、仲間同士の協同で音楽の楽しさを味わっていると言えるのではないだろうか。

氏 名	深田雛子	学籍番号	J015045	ゼミNo.	3
テーマ	時代の変化にみられる女性のファッションの変遷 ～1920年代から 2010年代の装いについて～				

いつの時代もその時代によつての流行がありその時代に生きる女性はその流行を取り入れファッションを楽しんできただろう。

ファッションの歴史を見てみると、ファッションは遠い昔からその時代の社会傾向と大きく結びつきがあることがわかる。また日本のファッションは海外の社会的な動向や流行に大きく関係していることもわかる。日本女性のファッションはどのように私たちの生活と関わりがあるのか、また筆者の身近ではどのような変化を遂げてきたのかについて着目していきたい。

筆者の祖母、母にインタビューをして当時の情報を得る。年齢はおじやれに敏感であるだろう 20代前半に設定し、筆者と比較をする。また、地方での流行と都会での流行には違いがあるのか、もしあるのならばその違いはどのようなものかを知るため、都会のファッションの流行について検討する。

3世代の比較をしてみると、現代では当たり前だと思っていることがそうでないことが多い。現代はファッションをととても簡単に楽しむことができる時代になってきていることがインタビューを通してわかった。ファッションの変遷は時代の変遷に大きく影響しており、それだけでなくその時代に生きる人がどのようにファッションを楽しんでいるのかということがポイントになってくるのではないだろうか。1960年代から 2010年代の都会の流行を比較してみると、まずどの時代にも言えることは日本の景気とファッションは大きく繋がりがあるということだ。好景気の時は派手な色や柄が流行り、ブランドを着ていた時代があり、バブルが崩壊するとその流行が一変しカジュアルで手に取りやすい価格の服が流行している。日本の景気が良い悪いというのはファッションにも大きく影響していることが時代によって比較してみてわかった。やはり都会の流行は最先端であることがわかる。大まかにみると変遷として変わりはないように感じるが、全く同じものが流行っているという結果ではない。近年ファストファッションブランドの進出により祖母世代、母世代の時代よりは流行のファッションを比較的早く手に入れることができる時代になってきているのではないだろうか。ファストファッションの流行をみてみると、時代に合わせたファッションの在り方が時代によって大きく変化していることがわかる。ファッションが時代により今まで変化してきた背景には日本の経済がどのように変化してきたのかといことが大きく影響しているだろう。時代によりおしゃれとを感じるものは違い、時代によってファッション業界はその違いに合わせて人々がファッションをより楽しめるように考えられているのではないだろうか。

氏 名	眞鍋 春菜	学籍番号	J015047	ゼミ No.	3
テーマ	大正時代から平成現代までの女性の結婚観の変遷				

桶川(2007)によれば、恋愛を礼賛する声は明治初期において芽生え、大正期においてより一層勢いを持ち、花が開くようになった。ただよく知られているように、大正期では個人の自由な配偶者選択すら認められていない現実が存在していた。大正時代の世間の恋愛に対する考えとして最も囁かれていたものがまず、『恋愛には理性が必要である』ということ、更に『その理性的判断のためには両親の意見や承認が必要である』という論理であった 3)。つまり、このことから盲目的な恋愛は世間で好まれていなかったということが理解できる。また、両親からの承認を得なければならず、自由な恋愛をするのは容易なことではなかった。人々から恋愛を礼賛する声があげられていたにも関わらず、大正時代は正当な恋愛、世間の認める恋愛のみを『恋愛』と認めていたのである。しかし、そんな大正期でも、恋愛の自由は希求されており、恋愛を享樂することのできる社会にしなければならない点が声高に主張されていた。それらの声は財産や地位を目的にした強制的な結婚制度の悲惨さを強調する中で生み出されており、具体的な男女の交際の提言は監督者のもとでなされることが前提とされていた。恋愛の自由を求める声は、少数であり、当時有名であった多くの知識人たちも理性的な恋愛を唱えている中で、この希望が実現されることは非常に難しいことであった。

大正時代と表結果を比較すると、昭和～平成現代において、自由恋愛が中心となっていることが分かる。しかし、大正時代の名残は昭和時代に入ってからでも残っており、自由恋愛ではなく、両親の意志に従った女性たちは回答者だけでなく存在したと言える。そういった女性には両親の意見は絶対的である強迫観念があり、自分を守るための結婚、つまり情熱的な恋愛感情での結婚ではなく世間体を気にした結婚であり、現代の自分で選択する自由恋愛という価値観に不思議な感情を抱くことは自然なことだろう。さらに、筆者は、実体験に基づいて結婚観は形成されるという側面があると考え。つまり、一般的には大正時代は自由恋愛は認められなかったが、個々に見ていくと、駆け落ちや、両親の反対を押し切った結婚をした人々も存在するはずであろう。現代では、恋愛を自由に楽しむことは当たり前の風潮になっているが、その中でも両親の意見を絶対的に取り入れようとする人もいるかもしれない。なぜそのような考え方の人がいるのであろうか。それは育ってきた環境であったり、実の両親との関係性であったり等女性を巡る様々な環境が結婚観を形成しているからではないだろうか。

今後も女性の結婚観は時代とともに移り変わってゆくであろう。その都度都度で形成されていく時代の価値観が、女性の生きやすさをより一層形作るものであってほしいと筆者は考えるのである。

氏 名	加藤志穂	学籍番号	J015017	ゼミ No.	4
テーマ	「保育者の言葉かけが子どもに与える影響」				

1. 研究の動機 このテーマを選んだ背景は、保育実習に行った際に、子どもが大人の言うことをよく聞いているという経験をしたからである。その経験から保育者の言葉かけは子どもたちにとっても影響を与えていると感じた。子どもに、どのように声をかけるのが良いのか、また子どもにその意味が伝わるようにするにはどう言い換えるのか、そしてその言葉かけが子どもたちに与える影響はどのようなものかについて年齢順に考えてみたいと思った。

2. 子どもとの会話 どの年齢においても、子どもにとって大人のかかわりはなくてはならないものである。先ずは、大人の愛情のこもった表情、声、言葉が子どもの初語の後押しとなる。また、言葉が少ない頃には、子どもが経験していることや伝えたい思いに言葉を添えることが大切になる。それが会話の楽しさ、喜びを伝えることにもなる。子どもとかかわる上で、一人ひとりの会話やコミュニケーションを大切に、子どものスピードに合わせる（待つ）ということが大切になる。そして、子どもの発達や自立には大人の温かい励ましや承認が必要だからである。

3. 子どもの発達理解 そのためにも、子どもの発達の理解が重要になる。子どもたちが認めてもらいたいことは、上手にできたや上手く描けたなどの結果ではなく、その子が精一杯努力した過程である。また、できないたくさんしたことより、できたほんの少しのことを認めてあげることで子どもが救われる。大人が子どもの発達を理解し、子どものしたことやすることを肯定的に見、その思いに寄り添うことが必要になる。もし、子どもが使ってほしくない言葉を使っていたら、子どもを頭ごなしに叱るのではなく、子どもの気持ちを受け止め、どうして使わない方がいいのかを伝えることが大切だと思う。子どもが汚い言葉を使ってしまう背景には、テレビや大人が原因であったりもする。改めて子どもに話をするときには特に言葉使いに気をつけなくてはいけないと思う。

4. 個々に応じた関わり そして、子どもに何かを伝えたいときに、言葉で話すということだけが子どもに伝える方法ではない。子どもの発達に応じて絵や文字などの目に見える形にすることも一つの有効な手段になる。特に障がいをもった子や3歳未満の子に対してはそうである。言葉で伝えたことは、時間が経てば、忘れてしまうかもしれない。しかし、絵本や紙芝居などはそのものが存在する限り、何度も見直すことができたり、ストーリーや言い回しが変わったりしない利点がある。

5. まとめ 要するに子どもとの会話は、言葉だけではない。抱っこすること、くすぐること、散歩すること、一緒にうたうこと、一緒に食べること、一緒に遊ぶこと、一緒に笑うことのどれもが会話になる。特に低年齢児の場合は、言葉が少ないので言葉以外のコミュニケーションの方法が求められる。

氏 名	神野夏実	学籍番号	J015026	ゼミNo.	4
テーマ	子どもにとって作るとは何か				
1, はじめに（作るとはなにか） 保育の現場では、子どもたちは自分の好きな遊びを選び、さまざまな遊びや活動をしている。保育者はその姿や遊び方を見て、一人ひとりの子どもの中に何が育っているか確認する必要がある。その育ちを確認する最低限の視点として健康・人間関係・環境・言葉・表現の五領域が設定されている。これらは相互に分かちがたく関係しているが、この研究では、作る（制作する）ことを通して、子どもたちが日々の遊びや活動、生活の中で大切な能力を身につけていることを示したい。このような思いが研究の動機であった。 2, ホモ・ファール 中でも、作ることは子どもにとって大切であると考ええる。制作活動ではさまざまな素材の材料に触れる。それにより素材の性質を知り、諸感覚が養われる。さらに子どもの感性を引き出す。そうすると普段から日常の環境や季節の変化にも目を向けるようになり、おのずと発見も多くなる。色や形、匂い、手触り、動きなどに気づくことや自分が感じたことを伝えようとする。制作活動にそれが表れる。描いたり作ったりすることで子どもたちの表現の幅は確実に広げられる。 制作活動にはこうした意図やねらいがあると考えられる。子どもが何かを作る、表現するということはあるものを完成させたいだけでなく、それに関わるさまざまな思いや技能がかかわる。だから、「人間は制作する生き物」（ホモ・ファール）と言われるし、作ること自体が人間らしいとも言われる。 3, 作るとは自分を作る その時、その場所により発見や学ぶことは違うが、作ることを通してどのような経験も子ども自身を豊かにしている。作るとは単に事物を作るだけではない。子どもはその過程でさまざまな試行錯誤を繰り返しながら作り上げ、遊びに利用し幅を広げていく。それは同時に自分を作る（形成する）ことにもなる。この点が制作活動を見ていく場合大切になる。子どもは事物を作りながら自分を作るのだ。大人とは違い、子どもは暇つぶしに遊んだりしない。遊ぶことの中で自分の限界にチャレンジしている。この点では学びも遊びもあるいは仕事も同じである。積み木やままごと、鬼遊びでも子どもはその時の自分の能力をフルに用いている。それは人生にとって大切な経験である。制作することも同様である。 4, 作るとは生きること この研究では、保育における制作事例の分析や考察、制作者へのインタビューを通して、作るとは何かをより具体的に考えてみた。 人間として必要な要素を、子どもたちは遊びの中で自らの力で獲得している。何事にも全力で挑むその様子は、全身全霊を尽くしながら制作し、生きていることを実感させてくれる。作りながら生きていく力を身につける。つまり、作るとは「生きること」とも言えるであろう。					

氏 名	重松美加	学籍番号	J015029	ゼミNo.	4
テーマ	叱らない保育について考える				
1, 問題意識 私の問題意識はできるだけ叱らない保育をしたいということである。叱らない保育は子どももうれしいし、保育者もうれしいに違いない。このように思ったのは授業で出会った『ガンピーさんのふなあそび』であった。ガンピーさんは子どもや動物の本性を理解していて、たいていのことは叱らないのである。どうしてそのようになれるのかを考えると、そこには子どもの発達の理解があった。 2, 佐々木正美さんの著書との出会い 佐々木正美さんは子どもの発達の深い洞察から多くの著作を通して叱らない子育てを提案している。佐々木さんによると、叱らない保育をするために一番大切なことは、「発達を理解していれば優しくなれる」ということである。佐々木さんの著書『子どもへのまなざし』では乳幼児期の子どもの姿について書かれている。まず、乳児期の子どもは、「自分の望んだことを、望んだ通りに十分にしてもらうことである」と記されている。乳児期の子どもは自分の要求を自分でかなえることはできない。乳児が自分でできることは「泣くこと」だけである。泣いて要求をした時、その要求がかなえられればそれだけ相手を信じるし、自分自身も信じられるようになる。だからよく泣いて手をかけさせる赤ちゃんほど大人が愛情をかける機会が多くなり、長い目で見ればいい子であり育てやすい子である。 3, 経験し自分で考える 幼児期の子どもは好奇心旺盛な時期であり、いたずらな事ばかりしている。この時期の子どもはこの高さを飛び降りたらどうなるか、この川は飛び越せる距離なのか、こういうたぐいのことを時には残酷なことも含めて何回も繰り返すのである。子どもにとってはこの何度も繰り返す経験を多くすることによって考えることや判断する力も身に付けている。しかし子どもには大きくなるにつれて社会のルールを教えなくてはならない。その場合にはすぐに叱るのではなく、子どもが同じ失敗をしても繰り返し伝え、いつそれができるようになるのか楽しみに待つような気持ちが大切になる。 4, 現代の日本社会 現代の日本はコミュニケーションの不足から、それぞれの家族が互いに孤立し、育児のほとんどを自分の家庭の中だけでしなくてはならないような時代になっている。このことから育児に消極的な親が増え、育児書の発達と違うと不安になる。少し悪く見えると、それが順調な育ちであるにも関わらず、迷ったり悩んだりしている。それが近年増加傾向にある虐待に繋がっていると思われる。 5, 子どもの発達理解の必要性 これらのことから叱らない保育のためには、乳幼児期の基本的な発達を理解しておくことが必要になる。子どもは悪くなったように見える姿をも見せながら成長する。子ども一人ひとりが大切だという気持ちを忘れないでいたいし、それが子どもに伝わるような保育をしていきたい。また、一人で子育てに悩む保護者を安心させるような援助も忘れないようにしたいと思う。					

氏 名	白石 芹奈	学籍番号	J015030	ゼミ No.	4
テーマ	林明子の絵本の世界				

1. はじめに（研究の動機と目的）

私は日本を代表する絵本作家である林明子に注目した。その理由は、幼い頃に読んでもらった『おててがでたよ』や『はじめてのおつかい』などの林明子の絵本が好きだったからである。それらの絵本が子どもたちに好かれる魅力について考え、自分が読み手となったときに絵本作家の想いをも伝えられるような保育者になりたいと思ったからである。

2. 林明子について

林明子が絵本作家なったきっかけは、フランスの作家ジョルジュ・サンドが描いた『愛の妖精』に登場するファデットだという。最初は自分の満足を得るためだけに絵を描いていたが、次第に想像で絵を描くのではなく、実際の子どもの仕草からどんな姿がいいのか選ぶようになったという。子どもの眼は、大人よりもしっかりと見ている。だからこそ、「最高の絵を描かないと」と言う気持ちでこの仕事に取り組んでいるという。理屈ではなく体の毛穴で感じるような絵が描きたいという林明子。絵から、その子を抱きあげた時の重さとかぬくもりとか匂いさえも感じることもできる絵。視覚だけでなく、官能的皮膚感覚全てで感じられるように描きたいという。

3. 林明子の絵本の魅力

林明子の絵本の魅力は大きく3つに分けられる。①物語の中に引き込む力のある絵②細かい仕草さえもとらえた絵③優しく繊細なタッチの絵の三つである。具体的には本文を参照してほしい。

4. 絵本と保育

絵本の価値を最終的に考えるのは、読み手だと考える。同じ絵本でも、読み手が無感情で読むのと、心を込めて語るのとでは、その絵本の価値は違ってくる。また、絵本は文字を読めない乳幼児期のために作られている。言葉を獲得していない時期にもストーリーを楽しみ、想像したり、考えたりする経験を与えたいのである。そのため「絵」が添えられている。絵本は一人で読むものではなく、親しい人と一緒に読むものである。大人の愛情を子どもに伝える方法の一つである。絵本を通して、子どもと親しい大人とのやりとりの中で出てくる安心感、うれしさ、表情、そして言葉こそが、幼い子どもたちと絵本の大切な出会いになる。

最後に、絵本は「絵を読む」ということだ。単なる挿絵ではなく、絵が重要な役割を担っている。ただ本文を読むだけでなく、すみずみまで描かれた絵にも配慮しながら丁寧に読む必要がある。実際、林明子の絵には子どもへのやさしいまなざしがある。また、年齢や月齢による何気ない表情やしぐさ、動作の違いが丁寧に描かれている。さらに状況に応じて背景にも細やかな工夫や配慮が施されている。

氏 名	檜林 衿子	学籍番号	J015041	ゼミ No.	4
テーマ	『おかあさんといっしょ』から学ぶ保育のあり方について				

【はじめに】

1959 年 10 月 5 日から放送され続けている『おかあさんといっしょ』。日本の長寿番組の 1 つであり、多くの子どもたちや大人楽しませている。おかあさんといっしょがこれほどまでに人気で長い間続けられているのは何故か。その理由を知りたいと思ったのが研究の動機である。

そして、本研究を通して①『おかあさんといっしょ』が誕生した背景や子どもの年齢による発達段階や、番組内での工夫点を明快にしたい。②次に、子どもと関わる上での言葉遣いや声のトーン、表情のあり方を学び、私が保育者となったときに生かしたいと考える。③また、NHK は「おかあさんといっしょ」の番組において、親子間のコミュニケーションを深めるためにどのような工夫を取り入れているのか。そしてその NHK の意図は家庭や保育所、幼稚園ではどう生かされているのかということについても触れたい。

【第 1 章 『おかあさんといっしょ』の概要】

放送開始当初の 1959 年には、視聴対象年齢が 4 歳 5 歳としていた。しかし、1970 年代に保育施設への就園率が 90% になり、おかあさんといっしょを観る子どもが減ったため、番組の対象年齢を 2 歳にした。また、アメリカの教育番組である『セサミストリート』の影響を受け、一つの番組が短時間のコーナーで構成されるセグメント(segment 分ける)形式を取り入れた。

【第 2 章 『おかあさんといっしょ』から学ぶ子どもと関わる上で適切な話し方】

実際の放送内容を観てみると、スタッフ同士が柔らかな言葉で会話している様子がみられた。①子どもの話し言葉のモデルとなるように、②子どもたちを同じ一人の人間として尊重するため、③子どもが理解しやすいよう言葉を遣ったり、声のトーンを臨機応変に使い分けていることなどが明らかとなった。

【第 3 章 テレビ映像を介した親子間のコミュニケーションについて】

子どもとの時間が多く持てると思われる土曜日に、親子で行う運動遊びのコーナーが放送されていた。一緒に体操をすることで、子どもは「自分は愛されている」と感じられやすい。しかし、現在の保育所や幼稚園には「テレビは子どもを静かにさせるための手段」としか考えていない保育者もいる。保育者や保護者には、実際にアニメを観て会話することの楽しさを知って欲しいと考える。

【まとめ】

これからの課題として、『おかあさんといっしょ』に影響を与えた『セサミストリート』についても研究を進めたい。そして、この番組の発展を支えてきた後藤田純生と繁下和雄についても調査し、この番組に込めた想いについても考えていきたい。

氏 名	木村友梨菜	学籍番号	J 015502	ゼミNo.	4
テーマ	「クレヨンしんちゃんと現代の子育て」				
1、背景 子どもに人気のクレヨンしんちゃん（1990年漫画の出版、1992年アニメ放送開始）は元々は子ども向けの番組ではなかった。しかし、今ではゴールデンタイムに放送されるほどの人気となっている。一方、子どもに見せるにしては過激な内容もあるので保護者の意見としては賛否両論ある。過激な内容とは、お尻を出して「はんけつ」、と言ったり、「ぞうさん」という表現が使われていることである。 それでもこの番組は子どもに人気がある。私は学童でアルバイトをしているがクレヨンしんちゃんの番組は、オープニングテーマがかかると全員テレビに集まり、食いつくように見ている。しかも静かに視聴する。子どもたちには人気があるのだ。 今回の卒論では、まずその作家である臼山義人について書き、その後クレヨンしんちゃんに対する賛否両論を概観する。そしてこの番組が子どもたちに人気がある理由さらに、このクレヨンしんちゃんの現代的な意味を考えてみたい。 2、目的 クレヨンしんちゃんの賛否両論について明らかにしていき結果的にクレヨンしんちゃんとは子どもに見せていい番組かどうかを自分の考察とともに結果を出したい。そしてクレヨンしんちゃんでは息子しんのすけが「いけないこと」をするたびに「いいかげんにしなさい」と注意をしている。この「いいかげんにしなさい」とは子どもに使っていい言葉なのかについても参考書や学術書を通し明らかにしていきたい。 3、方法 ネットの記事や図書館の本を参考にする。 4、結果 「クレヨンしんちゃん」の意見では、賛否両論はあったが、研究を進めていくうちに私は TPO をわきまえれば子どもに下品な言葉やしんちゃんの真似はさせても良いという結果に至った。 子どもが楽しんでしんちゃんの真似をしている時は大人もそれを見守る心の余裕が必要であり、それが場所によって嫌な気持ちにさせる人が出てくる場合は注意をする必要があることが分かった。 また、「いいかげんにしなさい」という言葉は一概に悪いとは言えない。それは子どもより状況を判断することができる大人がしつけの一環として発した言葉かもしれないからだ。しかし、叱った後は子どもにお母さんが悪かったところは子どもと同じ目線に立って謝ること、またアフターフォローとして褒めることが重要。					

氏 名	生玉 詩織	学籍番号	J015004	ゼミ No.	5
テーマ	幼児の人間関係作りについて				
<u>1. 研究の動機</u> 「人間関係」は他者と仲良くすることではなく、年齢によってその視点も変化する。また、保育者が関わることによって子どもたち同士の関係のみならず大人との関わりも違ってくると思われる。大学の「人間関係」の講義で学んだことを基に、実際に保育実習や幼稚園実習などの現場で私自身が感じたこと、体験したこと等をまとめ、講義で習った内容と本当に同じかどうかを比較対照した。 <u>2. 研究方法</u> 大学の講義テキストから 0～5 歳児までの人間関係に関する記述部分を抜き出してまとめ、自分の実習体験や事例との比較対照を行った。また保育現場実習の経験を持つ本学子ども専攻の 2 年生～4 年生と短大保育科 2 年生を対象として「保育者の関わり方に関する意識調査」を実施して、回答を集計し考察を加えた。 <u>3. 結論</u> 3・4 年生は、2 年生よりも長く幼児教育について学習し、実習を体験しているので、現場での経験が生かされ、子どもを見る視点が変わっている。子どもと一緒に遊ぶ時には、子どもの目線、保育者の声掛け・配慮、の点で 4 年生がよく注意していた。また、子どもを援助する際には、目線、言葉使い、保育者の声掛け・配慮の点で 4 年生がよく注意していた。事例考察を書くときの注目点については、学年によって捉え方の違いが見られた。時間をかけて学習し、実習を重ねることで、経験値が高くなり、より現場での対応がやりやすくなると思われる。 人間関係について調べていくと、0～5 歳の子供について、意外に見逃していることや、意識していなかったことがあることに気がついた。さらに、子どもの行動には意味があることを知った。子どもと関わっていく上で、どんなに些細なことでも保育者は目を向けなければならない。 子どもたちの人間関係作りに対して、私自身が知らなかったことや意識していなかったことが多数あることが分かった。子ども同士の人間関係をしっかりと意識し、子どもたちと更に深く関係を築くことを大切にし、努力していきたい。 <u>4. 参考文献</u> ・ 神蔵幸子・桃枝智子、『保育内容（人間関係）』、大学図書出版、2014 年。 ・ 牧野カツコ、『子供の育ちと保育』、金子書房、2015 年。 ・ 横山文樹、『子どもの心 保育のこころ』、同文書院、2005 年。 ・ 増田修治、『子どもが育つ言葉かけ－聴きとる・つなげる・ふくらませる』、ひとなる書房、2009 年。 ・ 厚生労働省、『保育所保育指針解説書』、フレーベル館、2018 年。					

氏 名	山口 理々香	学籍番号	J015053	ゼミNo.	5
テーマ	バレーボール競技者のスポーツマンシップについて				

1. 研究の動機

2018年5月6日の日本大学と関西学院大学とのアメリカンフットボール定期戦で、危険なタックルをして相手選手を負傷させる事件が起きた。この行為は「スポーツマンシップに則っていない」「フェアでない」と多くの人々から意見が述べられた。この時に「スポーツマンシップやフェアプレーとは何か」という疑問が生じ、スポーツマンシップとフェアプレーについて研究することにした。さらに長年続けてきたバレーボールで「スポーツマンシップは何か」を調べることにした。

2. 研究方法

文献やWeb資料を参考にして、スポーツマンシップやバレーボールの歴史、バレーボールのルールの変遷を調べた。さらに、本学と松山東雲中学・高等学校のバレーボール部員を対象に意識調査を行い、調査結果を集計し考察を加えた。

3. 結論

本学と松山東雲中学・高等学校のバレーボール部員で、「スポーツマンシップ」という言葉を選手宣誓などで耳にしているはずなのに本質と違った捉え方をしていたり、「建前」と捉えている人もいることが意識調査結果から分かった。また、バレーボールの試合中の事例からの設問の回答から、選手も選手たちを応援する観客も「勝利至上主義」であり勝つことにこだわり、「スポーツ」の本質が見えなくなっていると感じた。

「スポーツマンシップ」について間違えた捉え方をしているのは、スポーツに対する教育が不十分であるからではないかと思う。現代の日本社会で人格形成をするためには、体を動かすことが主体の教育ではなく、「正しいスポーツマンシップ」を身につけさせる教育を行う必要があると感じる。今回の研究動機となったアメリカンフットボールの事件は、「勝利至上主義」から発生したのではないか。監督、コーチ、そしてまた選手も「スポーツ」の本来の存在意義を忘れていてのではないか。二度と同じ過ちを繰り返さないためにも、一人一人が「スポーツマンシップ」についてその存在意義を改めて確認し、次の世代に正確に伝えることが大切だと思う。

4. 参考文献

- ・ 広瀬一郎、「新しいスポーツマンシップも教科書」、Gakken、2014。
- ・ 広瀬一郎、「スポーツ・マネジメント入門」、東洋経済新報社、2005。
- ・ YOMIURI ONLINE 2018年「日大アメフト、危険なタックル問題」、
<https://www.yomiuri.co.jp/matome/20180524-OYT8T50002.html>、2018年10月25日。

氏 名	木下 裕有希	学籍番号	J014016	ゼミNo.	5
テーマ	ペット飼育の現状について				
<u>1. 研究の動機</u> 私の家庭では、知り合いから譲り受けた犬 1 匹と、拾った犬 1 匹と猫 1 匹の合計 3 匹を飼育している。毎日、ペットの世話をするのが日課で、家族にとって犬たちは欠かせ替えの無い存在である。最近、飼い主の無責任な行動や犬と猫の多頭飼育や飼育放棄による問題が起きている。ペットを飼う上で考えなければならない事柄や、実際にペットを買っている人の意識等について研究した。 <u>2. 研究方法</u> ペット飼育の現状とその問題、外来種生物について日本の現状や対策、飼い主の責任のあり方、殺処分やペットロスに関しての文献や Web ページを検索し資料を収集した。また、本学学生を対象にペットの飼養現状を知るため意識調査を行い、調査結果を集計し考察を加えた。 <u>3. 結論</u> 愛媛県にも多くの外来種生物が存在している。外来種生物は簡単に入手できるが、成長とともに育てることが困難になり飼育放棄をする飼い主が多い。この対策は行われているが、発生件数は減少せず、増加傾向である。 殺処分やペットロス等に関しては「動物愛護管理法」という法律で、厳重に管理されている。全国的に殺処分を「ゼロ」にする努力がされているが、ペット周辺の問題を「ゼロ」にするのは非常に難しい。飼い主の意識も非常に低い。全国的に猫の多頭飼育が増加していて、犬より猫の方が多く殺処分されている。 また、一人暮らしでも実家暮らしでもペットを飼っている本学学生は比較的多い。ペットを飼育している学生の半数以上は「犬」または「猫」を飼育していた。 人間は、可愛いものを見ると「母性本能」が働く。衝動的な感情や安易な理由で、ペットを飼い始める学生や家庭が多いが、これは、危険行動であり、その後に飼育放棄をする恐れがある。一人ひとりの飼い主が、ペットの種類や成長段階をよく調べ把握し、愛情をしっかりとペットに注ぐ必要がある。また、周りの人に迷惑をかけないように努力し、最後まで責任をもって世話ができるように環境を整えてから、飼い始めることが大切である。 <u>4. 参考文献</u> ・山田昌弘、家族ペット、株式会社サンマーク出版、2004 年。 ・厚生労働省、一都道府県別の犬の登録頭数と予防注射頭数等平成 23 年度～平成 28 年度－、https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou10/01.html、2018/10/14。 ・愛媛県獣医師会、http://ehimeken-vet.or.jp/act_kyoukenbyou、2018/10/14。					

氏 名	石丸 奈波	学籍番号	J015007	ゼミNo.	6
テーマ	きょうだいのできたときの兄弟の心情と周囲の大人の関わり方				
私が卒業研究をこのテーマにしたきっかけは、母親と私と姉の幼い頃の話をしているときに、興味をもった内容だったからだ。その内容とは、私はふたり姉妹の妹なので私自身が感じた内容ではないが、私が生まれた際に姉は目つきや表情が一気に変わったということであった。私と姉は今でも性格が違うが昔はもっと真逆の性格をしていた。私は母親を困らせるのが得意な子どもであったが、姉は心配性でおとなしく母親から片時も離れようとしない子であった。そのような姉がもうすぐ二歳になろうとするときに私が生まれた。 私が生まれると姉の心情としては、生まれてきた私に母親を取られたように感じたであろう。今まで片時も離れなかった姉が急に生まれてきた妹に母親を取られたら心が追いつかないであろう。小さいながらも我慢と葛藤から無意識のうちに目つきや表情が変わったのである。こういった事例は、第二子が生まれた家庭ではどこでも起こり得ることだ。この内容は昔から問題視されてきていた。問題視されてきたが、解決できていないのが現状である。 私の姉のように目つきや表情に出る子から態度として母親を困らせてアピールをする子ども、生まれてきた第二子をいじめてしまう子、蕁麻疹など体調不良によって出る子、中には見た目には全く分からないが我慢して精神的にストレスとして感じている子もいる。 目的としてこのようにストレスを感じている子どもが少しでもストレスを感じないように、また自己肯定感をしっかりともてるような関わりをすることである。 研究結果として、母親の関わりにおいて妊娠が発覚したら年齢に関わらず事実を子どもに伝えることである。低年齢児ほどどのように伝えたらよいのかと考える親も多いが事実を伝えることが子どもの不安な気持ちを取り除く方法となる。また第二子誕生後においては、第一子との一対一の関わりをもつ時間の確保が大切である。他にも年齢が低くても第一子と一緒に第二子のお世話をする機会を作ってあげることである。母親のお手伝いをする事で母親は「ありがとう」と伝える機会ができ、その言葉で第一子が自分も必要とされていると感じられる。 また、保育士としてそういった場面になった母親の話を聞いたり時にはアドバイスをしたり、家庭で寂しいと感じている子どもがいた場合にはその気持ちを理解し、第二の心のよりどころとなり、また母親と子どもとの懸け橋となることができる。子どもの誕生が誰にとっても幸せ、喜ばしいものとなるためには第一子への対応も欠かせないものとなる。					

氏 名	神尾 咲奈	学籍番号	J015020	ゼミNo.	6
テーマ	聴覚障害児の言語獲得について ～聴覚障害への理解を深め、大切にしたいこと～				
私は、小学生のときにみたテレビがきっかけではじめて手話に出会いその存在を知った。言葉ではなく手の動きを使ってコミュニケーションをとっていることに興味をもち、手話についてもっと知りたいと感じるようになった。最初、手話というものはどうも耳の不自由な人が使っているものだというぼんやりした認識でしかなかった。 しかし、手話について学び始め、聴覚障害者と関わる機会をもつごとにその認識は変化し始めた。関わりをもった聴覚障害者の多くがろう学校を卒業し、日常に手話を使い、第一言語として手話を使っている人ばかりだったが振り返ると手話・指文字・筆談・空書などで意思疎通を図ることはできていたように思う。そうして、聴覚障害者と関わってくる中で次第に彼らはどのようにして「言葉」を獲得していったのだろうかなどと興味をもつようになった。言語を獲得する上で聴覚は重要な役割を果たしていて、健聴者は一般的に聴覚から言語を獲得していくことがごく自然な過程である。聴覚と言語獲得の因果は容易に想像がつく。聴覚に障害があるとなるとそれは困難を要することは想像できた。私自身、普段何気なく耳に入ってきている音を遮断し聞こえない体験をした。そうすることで聴覚障害者の立場に立って必要な音情報がない世界を考えることができた。 子どもにおける言語獲得の臨界期は、4歳から5歳とされており聴覚障害の発見が遅れると十分な言語力を得ることが困難になるため、新生児聴覚スクリーニングなどの検査を用い早期発見に繋げ、早期治療を受けることが重要で大切である。それは子どもの QOL（生活の質）を上げるだけでなく、母親の養育上のストレス解消と QOL 向上に繋がると考えられた。一口に聴覚障害者といってもその原因が違い、聞こえの程度もさることながら、既得の言語体系等においても個人差が大きいといえる。 人間は生まれながらに言語を獲得できるシステムが脳の中に組み込まれていることも分かってきている。このことから、言語を獲得するシステムが組み込まれていても言葉に触れる機会や適切な教育の機会がなければ言語で満たされる予定の器は空っぽのままといえる。聴覚障害だからと言って、言語を獲得のために教育熱心になりすぎることはかえってよくない。言語を獲得する以前に一番大切にしなければならないことは、人との関わりが楽しいと感じられること。そして、能動的という言葉が重要となり、楽しいコミュニケーションの中で自然に言語を獲得していくものだと考える。彼らはコミュニケーションが必要な場面において困難さを感じるであろう。彼らが自然発生的に獲得した方略として視覚という聴覚障害者特有の強みを生かしたコミュニケーション手段がたくさんある。視覚情報処理能力を生かした健聴者との関わりで、社会参加することができているのではないだろうか。実際に、体験しなければ感じることにできないこともあるだろうが、聴覚障害者と健聴者がお互い歩み寄り理解をもつ姿勢が大切といえるだろう。					

氏 名	神野 真綾	学籍番号	J015031	ゼミ No.	6
テーマ	保育の場における「気になる子ども」について				

私がこのテーマを選んだ理由は、“障害とは何か”ということに疑問に思ったからである。その背景には、A 君という男の子と S ちゃんという女の子の存在が大きく影響している。私が小学校低学年の頃、特別支援クラスに在籍している A 君という男の子がいた。私は障害をもっている子だと意識したことはなかった。その A 君が電車の事故で突然亡くなった。その後、A 君の持っていた本が小学校の図書館に寄贈されたことで、存在を近くに感じていた。その後大学での実習で S ちゃんという女の子と出会った。S ちゃんは発達の遅れがあり、物事や気持ちの切り替えが難しいところがあり、私はどのように関わるか戸惑った。しかし、子どもたちは S ちゃんを様々な場面で助けていた。子どもたちにとって“障害をもっている”という特別な存在ではなく、クラスの一員だからこそ自然と行動をとっているのだと感じた。以上の経験から、クラスで気になるといわれる子どもたちや、障害や特性をもった子どもの命や寄り添い方について興味をもった。さらに、そもそも「障害」とは何かということに疑問に思うようになった。

ICIDH の考え方は、一方通行的で負の方向性をもった「障害」の考え方であるといえる。一方、ICF では障害を様々な要素が絡まった相互作用の結果と考え、その人の置かれた環境を整えることで活動や社会参加を可能にすることを目指していく。障害は当事者にとっての障害であり、支援する立場の考える障害ではないことに注目する必要がある。全ては当事者目線で当事者を中心において障害問題を考える必要がある。

杉山登志郎の「発達凸凹」の観点から障害を考えると、障害のない人でも得意、不得意なことがあるように、程度の差はあるが生活のし辛さという面からの特有の個性を皆もっているものである。つまり、誰でも凸凹はもっているということになる。また発達の凸凹が出るか出ないかは育ちの過程が大きく関係しており、劣悪な環境での生活は子どもたちの発達にとっても悪影響であると言える。

動的な人の集まりである社会に柔軟に対応していける力を育てる支援こそ、現代の子どもたちを保育する者たちに求められる必要不可欠な礎でないかと考える。これから保育の現場で働く際は、「障害」というものについて考えその子に合った援助を行っていききたい。また、子どもたち一人ひとりの個性や特徴を理解し、子どもたちがより良き発達や成長ができるよう、人的環境の一人として関わっていききたい。

氏 名	谷久 詠美	学籍番号	J015038	ゼミNo.	6
テーマ	ダウン症のよりよい療育を求めて				

私がこの内容について研究をするきっかけとなったのは、近所に住むダウン症の子の存在にある。その子は、Aちゃんと言い、小学2年生になる女の子である。Aちゃんと関わるうちに、もっとAちゃんのダウン症の症状について知り、どのようなコミュニケーションを取ることが彼女の発達に良い効果を及ぼし、また大切になるのか疑問に考えるようになった。そのような課題をもちながら、私は、2回生の10月に施設実習で某児童発達支援センターに行った。

実習では、ダウン症に限らず一人ひとりの個性を理解し、信頼関係を築いていくこと、そっと寄り添うことを学んだ。入ったクラスには、10人中3人と高い確率でダウン症の子がいた。ダウン症というくくりにあっても、一人ひとりの個性は、とても様々であった。ダウン症の症状だけでなく、他にも色々な合併症を抱える子も多くいた。以上のことから、今回の研究では、ダウン症の特性について理解を深め、ダウン症の一般的臨床像と、その発達はどんなものであるのか彼らはどのように成長をし、社会性を身に付けていくのか研究を進めている。

ダウン症は、通常23組46本の染色体のうち、21番目の染色体が1本増え、全部で47本になったことが原因で起こる。ダウン症は、次の3つに分けられている。標準型21トリソミーと転座型、モザイク型である。また、ダウン症は、合併症を伴わずに生まれてくる子もいるが、20～40%は循環器(心臓など)の疾患を伴って生まれてくる。近年は、出産直後に循環器系の疾患が発見されることが増え、早期の外科治療によって完治することも可能になってきた。消化器系の疾患が合併している可能性もあるが、このような疾患についても医療の発達により手術法が確立され、乳幼児期のあいだに改善できるものも多くなっている。ダウン症という共通点があっても、一人ひとりが個性的で個人差がある。あごや舌、唇の筋肉が弱いため、舌足らずな話し言葉になることがある。あごの骨の成長がゆっくりのため、口の中の容量が狭く、舌が口の中で滑らかに動かせない。耳も聞こえにくく、正確な音が聞き取れないため、正しい発音が分からず、聞き取りにくい発音になってしまう。また、早口になることもあり、気が急いでしまっている状態になっている。ゆっくり話す練習をすることで、相手に聞き取りやすい話し方を身につけることができる。

保育者は、子ども達だけでなく保護者との関わりも大切で、一人ひとりの思いに寄り添った支援が大切になる。保護者の気持ちに寄り添い、共感することで気持ちが少しでも安心したり軽くなったりすることができるのではないかと感じる。その子のペースに合わせ、一緒に成長を感じることが大切になる。その子一人ひとりの個性を認め、個性を伸ばしていくことが必要になるのではないかと感じる。そして、保護者の方や専門の機関と連携をし、その子の発達や生活を保障することが大切だと考える。

氏 名	濱田 灯里	学籍番号	J015042	ゼミ No.	6
テーマ	きょうだい間の性格特性はどのような要因に影響を受けるのか				
私は三姉妹の末っ子である。私には二歳上と四歳上に二人の姉がいる。私が姉二人との性格の違いを意識するようになったきっかけは二つある。一つは私が大学生になった頃からである。私も姉二人も同じ大学・学部に通っていたため、よく大学の教員から「顔は似ているが姉たちと違う」と言われることが多かった。大学の教員に違いを指摘される都度、姉たちと比べられている気がして、不快な気分になっていた。もう一つは社会の中でいわれるキャラについての性格を考えるようになった。私だけではないと思うが、その場の環境や人間に合わせてキャラを変えて接している。他者とのコミュニケーションをよりよくするために自分の立場を考えながらキャラを作ろうとしている私がいる。自分探しをすることで姉たちとの性格の違いを意識したり、長女のような次女のような性格になりたいと強く思ったりすることがあった。そのたびに性格の違いを意識することが増えていった。 今回の研究では、私たちの姉妹間の性格や特性を知るとともに、性格はどのような要因に影響を受けるのか調べたいと思いこのテーマを設定した。 姉たちとの性格はどのように異なるのか性格検査を用いた。質問紙法の Big Five(主要 5 因子性格検査)である。この性格検査は情緒不安定性や外向性、調和性や開放性、誠実性に分けられる性格検査である。Big Five(主要 5 因子性格検査)を、私たちきょうだい三人に用いた。結果から、上の子は下の子に合わせようとしたり、下の子は上を見て追いつこうと背伸びをしたりする傾向があると考えられる。出生順に合わせて家族内での立ち位置と何気ない振る舞いが無意識のうちに形成されてきたのかもしれない。これまでの家族・三姉妹の関係や出来事などを振り返り、環境に関する要因についても考えた。 研究結果として、きょうだい間の性格特性は、誕生からこれまで経験してきた環境によっても変わるものである。それに加えて、両親からの遺伝も含まれている。きょうだいがいる場合はお互いが影響を与え受け合うため、性格形成に繋がる。 今回私たち三姉妹の性格特性では、性格検査から三女の私は姉たちの姿や様子から影響を受けていた。さらに、次女は長女と三女に挟まれているため、長女は次女と三女が下にいるためそれぞれ性格特性に影響を受けたといえる。これは私たち三姉妹だからではなく、きょうだいがいるところでは、こういった影響はあって当然である。そして、その影響から性格形成に影響を与え、性格特性になるのである。三女の私は姉たちの影響もあるが、母の思いを受け入れすぎたことも性格特性に影響を受けた要因の一つではないかと考えられる。					

氏 名	渡部 琴子	学籍番号	J015056	ゼミ No.	6
テーマ	養育環境による子どもの育ち-障害児を兄弟姉妹にもつ子の育ち-				

私は 2 年次の保育実習Ⅰの施設実習で児童養護施設、3 年次の保育実習Ⅲで児童心理治療施設の両施設で実習させていただいた。どちらの施設の児童も入所理由として親からの虐待やネグレクトが多く割合を占めていた。そのため、親からの愛情を十分に受けていない児童が多いように感じられた。実習させていただいての印象は、暦年齢に比較してあまりにも彼らの心性が未熟に感じられた。例えば、初対面であるはずの実習生の私に小学生以下の低年齢の子どもたちは必要以上に物理的距離が近く馴れ馴れしかった。同様に思春期の児童においても共通して低年齢児同様に近かった。ただし、私から見て異性である男の子について最初は遠巻きに観察するようで彼との距離を感じていた。しかし、実習が終わる頃にはたかだか 10 日間であったにもかかわらず、さらに異性間の関係性であるにも関わらず、その距離は通常の年頃の異性間の距離よりも思った以上に近くなった。もちろん、女の子は最初からその距離が近かった。その中でもごく少数の児童には最初から最後まで距離が近くならなかった児童がいた。

このときに、大学の授業で学んだ、反応性愛着障害と脱抑制型社交障害についてオーバーラップした。これらふたつの愛着障害は、トラウマやストレスに関する障害として分類されており、まったく別の障害であるが臨床像は非常に類似している。さらに、共通して言えるのは決して先天的なものではなく、環境によるものであるということ、根底では愛情や絆・信頼関係を欲しているということである。よって愛着障害は他の精神障害などと違い、適切な環境が整いさえすれば、時間が掛かるかもしれないが、ほとんどの場合改善するということが特徴である。これらのことから、人との物理的距離(パーソナルスペース)についてとても興味をもった。また、同時に愛着障害とパーソナルスペースが密接にかかわってくるのではないかと思った。

結論として、ASRS(改)のポイントで高得点の学生つまり ADHD の疑いのある学生のパーソナルスペースの中央値は 41.5cm、ADHD の疑いのない学生のパーソナルスペースの中央値は 62cm であった。両群のパーソナルスペースに統計的に有意な差があるとはいえなかった。このような結果になった原因としては、まず、ASRS の質問項目において数が少ないために公開されているあらゆるホームページより質問項目を流用し、独自で質問項目を作ったことにあると考える。信憑性が低く、正確な結果が得られなかった可能性がある。しかし、両群をパーソナルスペースの平均値として比較すれば高得点群 43.9cm で低得点群 62.1cm であった。このことは U 検定で有意差は出なかったが、平均値の差としては、当初の目的である仮説を支持する方向の結果であるといえる。つまり、ADHD の疑いのある学生は ADHD の疑いのない学生よりもパーソナルスペースが短くなっている傾向があり、物理的な対人距離は近い。

氏 名	徳久 裕可里	学籍番号	J 015503	ゼミNo.	6
テーマ	教師の視点から見る「気になる子ども」の支援の在り方 ～文部科学省のデータや幼稚園教諭アンケートからみえるもの～				
保育現場で子ども達との関わりをもつ中で、最近気になる子どもが増えてきているように感じる。気になるといっても様々だが、1.友達との関わりを拒む。2.集中力が持続しない。3.予期せぬ行動をする。4.話など理解が難しい。などである。気になることは他にも多くあり、それを挙げればキリがなくなるが、保育の現場でどのように対応すればよいのか悩むことが多い。保育者が正しい知識をもち、一人ひとりとしてしっかり関わり、また保護者への伝え方も負担にならないような関わり方を学ぶことが、保育者に求められているのではないかと考え、この議題についての研究をしていこうと考えた。それにはまず保育者が、何が気になるか、子ども一人ひとりに目を向けることも必要だが、保育者同士が、何が気になっているか互いに理解することが必要となってくるのではないかと考える。保育者が自分自身の問題として困っていることを理解し、同じ目線に立ちつつ保育者自身の困り感を自覚することが大切ではないかと考える。また、園のスケジュールや目の前の課題を追うことで業務が目一杯になってしまうことで、困った幼児にばかりにとらわれるのではなく、保育者同士で子どもの成長や特徴を楽しめる余裕のある保育が望まれるのではないかと考えた。この研究では、現在幼稚園働いている保育者のアンケートを実施し、どのような幼児のどのようなことに悩んでいるかを明らかにしていく。 教師に今何を感じているか、「気になる子ども」についてどう感じるかというアンケートを通して、経験年数によって感じるものが異なっていることが分かった。それは、担任の年齢や経験年数が若いほど、幼児の表面上のことについて気になる子の対象となる。また年齢や経験を重ねていくほど、幼児の内面性や定型発達からの乖離について気になっていることが分かった。 この研究を通して、「気になる子ども」＝「障害児」ととらえることなく、個性ととらえていくことが保育者として大切になってくると考える。なかなか個性と世の中の全員がとらえることは難しいかもしれない。少なくとも子ども達と関わり、保育活動を展開していく立場で個性を肯定し、子どもの中の特性をストレンクスとして社会的に容認できるように方向付ける事ができればと考える。子どもの中に内在する強さに着目し、社会的に容認できる価値へと伸ばしていく保育活動が強く望まれる。子ども達も伸び伸びと生活でき、彼らが将来大人になった時に社会全体の偏見の目が少なくなるのではないかと考える。保育をしていく立場にある者として、まだまだ課題が多く残るが、この研究を通して理解を深めていったため、全てを障害と位置付けることなく保育を行っていきたい。					

氏 名	森木 奈知	学籍番号	J015504	ゼミ No.	6
テーマ	グレイゾーンに立ち止まる子どもたちへの支援 ―― 二次障害への事前対応として ――				

知的な遅れはないが、友達ができにくい、待てない、拘りが強いといった、人との関りや集団行動に困難を感じている子どもたちの多くは、特別な支援を受けることもなく思春期を迎え、多くの壁にぶつかっていく。算数が苦手な子どもたちや、運動が苦手な子どもたちが様々な教育施設で苦手を克服していくのと同様に、人づきあいの苦手な子どもたちにとっても「人づきあい」を学べる場所が必要であると考える研究を始めた。

本研究では、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder : 以下 ASD) に焦点を当てる。知能検査によって何が明らかになるのか理解した上で、代表的な療育方法である SST (Social Skill Training) , TEACCH (Treatment Education Autism Communication Handicap Children) , SS™ (Social Stories™) , の有効性について検討を行う。同時に AQ (Autism Spectrum Quotient) 日本語版・児童用を用いて、事例 (小4 男子) の AQ を分析し、成育歴の中から社会的スキルを身につけるのに効果があったと考えられる要因について様々な療育方略を参考に奏功の可能性についても取り上げる。

研究の成果として、知能検査は子ども自身を理解し個々に合わせた支援をしていくため、精密に優劣両面から子どもの認知特性を測定していることが明らかになった。また、療育の検討からは、子どもの認知特性を理解し個々の子どもの性質や必要性に合わせた支援を行うことが重要であることや、その土台として、非定型発達の人々を理解しサポートする TEACCH プログラムのような社会システムの必要性が明確になってきた。

研究の目的とした二次障害の事前対応として、知能検査・療育の検討及び事例から、社会的スキルを得るために有効と考えられる 5 つの要因を挙げた。その 5 つの要因の内の「人との関り」「他者からの評価」「自己肯定と自己認識」という 3 つの要因を満たす場所であったと考えられる将棋道場でアンケート調査を実施し、他の児童にとっても社会的スキルを得られる場所となっているかを分析した。その結果、社会的スキル、コミュニケーション、想像力に関して効果がある可能性が示唆された。

一連の研究から、二次障害を予防するためには、子どもたちが「自分を好き」と主体的に感じる事が重要であることが判った。そのための第一歩が自己理解であり、子ども自身が定型発達の人とは認知機能が違うということを「知っておく」ことで自己肯定へとつながる。多くの大人たちが療育 (教育) という名の下に子どもを型に押し込めようとするが、子どもを変えることができるのは子ども自身でしかないのである。

氏 名	相原亜海	学籍番号	J015001	ゼミ No.	7
テーマ	東京オリンピックから見るオリンピックの魅力				

1. 研究の動機と目的

2020 年に東京オリンピックで行われる。今までオリンピックをなんとなく見ていた人も東京で開催されることでオリンピックを身近に感じ興味が湧いてくるのではないかと考えた。

今現在注目されているのは競技者の場合が多く、競技自体が注目されているのは少ないのではないかと。そうすると、競技自体の魅力について検討していく必要があるのではないかと。そう考え、研究の目的を 2020 年の東京オリンピックの競技を通してオリンピックの魅力を明らかにすることにした。

2. 研究の方法

研究の方法は、今までのオリンピックの歴史や、2020 年の東京オリンピックで行われる 33 競技やその中の種目・採点競技等について詳しく魅力を考える。

3. 研究結果

本研究では、大きく分けて 4 つのオリンピックの魅力が発見できた。一つ目は、オリンピックの歴史から見る魅力。二つ目は、競技から見る魅力。三つ目は、追加競技から見る魅力。四つ目は、採点競技や男女混合種目から見る魅力である。

①オリンピックの歴史から見る魅力 オリンピックは社会の動きと連動していた。男女差別や人種差別があったり、戦争や東西冷戦でオリンピックが開催されなかったりした大会があった。のちにオリンピックは平和の祭典となっていく。

②競技から見る魅力 2020 年の東京オリンピックでは 33 競技が行われる。オリンピックでは毎回同じ競技が行われるわけではない。開催場所の各競技の競技人口によって新しく追加されることがある。

③追加競技から見る魅力 2020 年東京オリンピックでは、野球・ソフトボール、空手、スケートボード、スポーツクライミング、サーフィンの 5 競技が追加された。

④採点競技や男女混合種目から見る魅力 33 競技の中から①個人／団体、②採点競技、③男女混合種目の 3 項目に絞って調べ、さらに②と③について詳しく調べた。②は球技のように目で見て得点がすぐにはわからない競技だが、注目ポイントを知ることによって採点競技ならではの楽しみ方がある。③は、東京オリンピックで女性の参加数が過去最高となることから男女混合種目が増えた。よって今後女性の活躍がさらに増えていくだろう。

以上の魅力を知ることによってさらにオリンピックについて興味を持つ人が増えていくのではないかと。筆者は、今後この魅力をたくさんの人に伝える方法を考えていきたい。

氏 名	大野 優華	学籍番号	J015014	ゼミNo.	7
テーマ	日本昔話の継承についての課題とその方策 ～ディズニー映画との比較を通して～				

1. 研究の動機と目的

現代の子どもは日本昔話にあまり興味を持っていないようだ。実際に実習先の幼稚園や保育園などではディズニー映画に出てくるプリンセスやグリム童話の絵本や紙芝居がよく読まれていた。

そこで、この卒業研究では、現代の子どもたちに人気のあるディズニーの映画と日本昔話の特徴やテーマパーク等について比較し、そのことから子どもたちが日本昔話に興味を持つには、どのようにすればよいのかを検討することにした。

2. 「日本五大昔話」の特徴と問題点

日本五大昔話は、「桃太郎」、「かちかち山」、「猿蟹合戦」、「舌切り雀」、「花咲爺さん」の5つである。それらに共通する特徴は、①「老夫婦が登場すること」と②「善悪がはっきりしていること」であった。この2つは、日本昔話が普及した江戸時代に生きる人たちの間で好まれるものであったことが分かった。特に、日本昔話の中で最も有名である「桃太郎」は、一時期、軍国主義に使用されていたり、成立してから現代にかけて内容の変化があったりと様々な一面があることが分かった。また、「桃太郎」に登場する「鬼ヶ島」のゆかりの地が香川県高松市女木町にある。現地に行くと「子どもの興味が湧くテーマパーク感がない」という問題点が見えてきた。そこで現在、子どもから大人まで人気があり、テーマパークやディズニー映画、グッズなど幅広い分野で知られているディズニーワールドと比較し、日本昔話の継承に参考になる点はないか検討した。

3. ディズニーワールドとの比較から見えてきた課題

東京ディズニーリゾートは、年間約3千万人以上の人が訪れている日本の中で一番人気のテーマパークである。人気の理由は「テーマパーク」、「映画」、「グッズ」の3つがあるからだと考える。「日本五大昔話」と「ディズニー映画」の中で人気上位の4作品を「成立年」、「作品数」、「最初の作品」、「内容」、「登場人物」の5つの視点で比較した。その結果、子どもたちが「日本昔話」に興味を持ち継承するための課題と方策は、①交通機関②グッズ③プロモーション④大人や保育士が意識を変えることだと思われる。

4. 子どもたちへの継承について

子どもたちに「日本昔話」に興味を持ってもらうためにはまず、大人や保育士が知っていく必要がある。大人や保育士が「日本昔話」について詳しくなり、子どもたちに伝えることで子どもたちの興味を引き出すことができると考える。それに加え、「日本昔話」にちなんだゆかりの地の活性化も必要である。すぐに解決できる問題ではないが一人ひとりの意識を変えることが大切だと感じた。

氏 名	菅野 朱里	学籍番号	J 015021	ゼミNo.	7
テーマ	海外と日本の子育ての違い ～育児休暇制度を中心にして～				
<u>1.研究の動機</u> 現在の日本はニュースなどで、子どものことを多く取り上げているように思う。そのニュースは虐待、保育園の子どもの声、待機児童などあまり良いニュースではない。実際に、交通機関で子どもの鳴き声にうるさいと怒鳴る人など目にする。しかし、これは他人事ではないだろう。社会がこのように育児をしにくくしている。様々な問題がある中で、特に育児休暇については日本の大きな課題だ。 <u>2.研究の目的と方法</u> 日本の問題点をどのように改善していけば、子育てしやすい社会になるかということについて検討するために、本研究では、海外と日本の子育ての支援制度、特に育児休暇制度について比較する。 <u>3.男性の育児休暇取得率</u> ノルウェーとスウェーデンの男性の育児休暇の取得率はそれぞれ 89%、78%と男性の育児休暇の取得率が高い。しかし、日本では 1.6%と、比べ物にならないほど低い。COC+のプログラム「子育て家庭訪問インターンシップ」で、育児休暇を取得した男性の家庭を訪問した際、「会社には今までに育児休暇の取得の前例がないため、冷ややかな目で見られた」と話していた。冷ややかに見られるような社会が、男性の育児休暇取得率が低い理由だと考える。 <u>4. 今後の日本—男女が互いを思いやれる社会に—</u> 海外の子育て支援の方法調べると、父親手帳や交通機関にベビーカー用のスペースなどがあり、それらは日本でも父親手帳やベビーカーマークとして、取り入れていた。2018 年のジェンダー・ギャップ指数※は、日本は 110 位と低い。順位をあげるためには、女性が政治や社会で活躍していくことが課題となってくる。女性が社会に出るために「議員候補者の一定数を、女性と定める制度」である「クオータ制」を取り入れることが重要となる。一人ひとりの考え方も女性が管理職や政治に出ること、男性が育児をする社会が当たり前のことになるように変えていく必要がある。そうすることで、男性も女性もお互いがお互いを思いやれる社会となり、女性にも育児にも優しい社会となると考える。現在は、女性が育児をしながら、社会に出られるような制度や、育児の負担が軽くなるような制度が多い。しかし、その制度は男性が育児休暇を取得しやすい制度ではない。今は女性も働く時代であり、育児も男性が参加する時代だと考える。時代に考え方が追いつき、一人ひとりの意識が変わるのは時間がかかる。今後、会社の育児に対する意識を変えるために行動するなど、少しでも子育てしやすい社会になるようにしていきたい。 ※世界経済フォーラム（WEF）が各国の社会進出における男女格差を示す指標。					

氏 名	武藤 礼子	学籍番号	J015050	ゼミ No.	7
テーマ	日本神話を伝えるために必要なこと ～『古事記』の理解と子どもへの伝え方～				

1. 研究の動機と目的

大学二年生の 12 月に松山東雲学園附属幼稚園で実習させていただいた際、イエス・キリストの誕生までの劇を年長の子ども達が発表している姿を見た。その時、これが日本神話だったらどうなるのだろうか、日本神話を子どもに伝えたらどのような反応をするのだろうかという疑問に思った。そこで、日本神話を知らない子どもたちや大人にもわかりやすく伝える方法を考えたいと思った。

2. 研究の方法

「クリスマス」は「イエスキリストの誕生日」だと知る機会も多いが、日本神話には連想しやすい行事や話などが身近にない。そこで、(1) 日本神話について、「古事記」等に登場する神話の内容や数、神様について調べ、神話の全体像をつかむ。(2) 子供向けの神話の絵本にはどのようなものがあるか調べる。(3) 以上を踏まえて、子供向けと大人向けに伝え方を考える。

3. 日本神話に登場する神々について

本研究では、日本神話について調べる対象を『古事記』全 3 巻のうち、上つ巻の神話に限定し、上つ巻に登場する神々について調べた。そしてその神々の関係を参考文献も利用しながら、系図にまとめた。その結果 162 人の神々が上つ巻に登場することがわかった。私たち人間のように夫や妻を持ち子孫を残していったことが分かった。また、初代天皇が登場したところで終わっており、天皇は神様の家系ということも分かった。

4. 「日本神話」を扱った絵本

AMAZON で「日本神話」「絵本」のキーワードで検索して得られた本は、35 冊で、「日本神話」「絵本」というキーワードで検索して一番多いのはやはり「日本神話」というキーワードが入っているものが多かった。また「古事記」というキーワードも多くあった。個別の話としては、「スサノオ」「天の岩屋」「因幡の白兔」の話が多く見られた。

5. 神話の伝え方

子供向けと大人向けに分けて方法を考えた。子どもに伝える方法として、①絵を使った紹介 ②人形などを使い劇にすることで子どもも視界でも楽しく話を聴くことができるようにする ③日本神話を一から話すのではなく、物語ごとに分けて話をすることの三つの方法を考えた。大人向けの伝え方として、生活する中で身近なもので日本神話に関係することを、各大学の学生を対象に小さな雑誌や、パワーポイントを使いながら説明していく方法を考えた。

氏 名	山本 夏子	学籍番号	J015054	ゼミ No.	7
テーマ	乳幼児の言葉の発達と絵本の関わり				
1. 研究の目的 本研究では、絵本が乳幼児の成長にどのように関係し、どのような絵本が乳幼児の言葉の発達を促すかを明らかにしていきたいと考えた。 2. 乳幼児期の言葉の発達と絵本 0～1歳は「喃語」という同じ文字を2文字以上連続した言葉を発する。 1～2歳は1語のバリエーションを増やし、徐々に2語となっていく。 2～3歳は自分自身のことを、だいたいの日常会話ができる。 3～4歳は言葉の良し悪しの関わらず、面白いと思った言葉をまねる。自分でストーリーが理解できる。 4～5歳は身の回りの化学や文化、歴史などにも興味をもってくる。 乳幼児はこのような発達をたどることから、それぞれに適する絵本の内容は以下のようになる。 0～1歳はストーリー性のないもの。 1～2歳は簡単なストーリーのあるもの。 2～3歳は数字の入った少し長めのもの。 3～4歳はストーリーが繰り返されるようなもの。 4～5歳は絵本の登場人物の気持ちなどを表現しているもの。などを選ぶとよい。 3. 言葉の発達を促す絵本 絵本の中に書かれた物語の1つ1つには、乳幼児にとっての大切な言葉や感情、想像力等の発達を促す大切なものがある。では、その数多くの絵本の中で、「言葉の発達を促す絵本」には、どのような絵本があり、どのように言葉と関係しているのだろうか。6冊の絵本について、言葉の発達段階のどこに適するののか、調査した。 4. 絵本と乳幼児の言葉の発達についての具体的検討 ミリオンセラー1位の『いないいないばあ』と2位の『ぐりとぐら』の絵本の内容を具体的に調べ、①本書の楽しみ方②本書の言葉について発達との関係を検討した。 5 保育現場と絵本 保育者の絵本選びはとても重要だ。子ども達は、絵本の読み聞かせの中で、様々なことを吸収し自分のものにしていける。子どもたちと様々な絵本を知って新しい発見をするとともに、絵本の持つ可能性を最大限に保育現場で生かしていくことが必要だ。保育者や保護者は、今現在の子どもの発達に合わせて、その時に合った絵本を選び、与えていくことがとても大切である。					

氏 名	一色 彩花	学籍番号	J015008	ゼミNo.	8
テーマ	色の創造と表現				
私の卒業研究のテーマは色の創造と表現である。問題意識としては、幼少期から子どもが「ピンク色が好き」、製作では画用紙を選ぶ際に「黒がいい」と言うことがある。実習させていただいた園で何度も子どもがこうしたことを口にして聞いたのを聞いたが、好きな色を好きだからと言う理由で物を選択したり、好きな色を共有したりしたことは誰もが経験したことがあると思う。それは色彩に気づき、それらに慈しむ心が育ち、個人としての自我が育っているからだと考える。色にはそうした魅力がある。 既存の染料ではなく、身近なもので存在していない色をつくり自身の気持ちを表現する色彩経験を取り入れることができれば、それは幼少期における好きな色との出会いとなるはずだ。 研究の目的は、製品として作られた色ではなく、幼少期に「自身の気持ちを表現した色をつくること」により、子どもたち一人ひとりが好きな色と出会いを経験し、色に対する感受性を形成することは育ちにつながると考えて、そうした活動の可能性について実製作を踏まえて考察を行うことである。 方法は具体的な、まず実験的な染色をいくつか行う。染めるための材料は幼児が安全に扱えるものとし、染色を繰り返すことで安全かつ確実に染める条件を研究する。色々な材料を試み、素材となる布やハンドタオルを実際に染め、実践し材料や方法をまとめ、考察する。また、染めた布地を利用し、筆者自身がオリジナルの作品を制作する。 実験的な染色をする中で、表現の魅力について学んだ。染色実験により、自然物から個人の好みによる色、濃さを生み出すことができた。素材の元の色からは染色後の色合いは予想できないほどに、その変化は興味深い。その繊細な色についての受け取り方は一人ひとり異なるものになるだろう。自分にとって好きな色は、試行錯誤の結果、自分で作ることにによりはじめて出会う色となった。染め方により色、模様をつくることができ、すべてが自己表現として生み出された。 結論としては、ごく身近な植物や、食材として見ていたものから色が出てくることに対して「どうして、なぜ」と疑問が浮かび上がる。そして、染め方が理解できれば、あれも染めようとする。すると時には抽出できない色も出てくる。このように布を染めると斑ができたり、想像と異なる染まり方をする経験が「染色遊び」ではできる。うまく染められない経験をするのも子どもたちにとっては意味があることなのだ。不思議だと思う気持ちを持ったり、どうしたらよいかと考える試行錯誤の時間での心の育ちを期待して、結果がたとえ失敗だとしても、子どもたちのそうした営みについて愛情をもって受け止めたい。身近なもので存在していない色をつくり自身の気持ちを表現する色彩経験は、子どもの心身をより豊かに育む役割を担うものだ。					

氏 名	今井 友美	学籍番号	J015009	ゼミNo.	8
テーマ	一度は作った泥団子				

1.研究の動機

様々な園で実習を行い、子どもたちと沢山の遊びをしてきた。その中でも、泥団子を作って遊ぶ子どもたちを見て自身の幼少期が思い出された。そんな自身の幼少期から約 15 年の月日経った今でも子どもたちによって作り続けられる泥団子を見て、なぜ子どもは泥団子を作るのか、また泥団子作りは子どもにどのような影響を与えているのか知りたくなり、研究テーマとした。

2.研究方法

泥団子作りについての先行研究を調べ、自身の考察を加える。また、実際に「鏡のように光る泥団子」を製作し、生まれてくる心情を確かめる。さらに、保育現場で子どもと一緒に鏡のように光る泥団子を作ることは可能なのか考察する。

3.本論

なぜ、子どもは泥団子を作るのかについて調べた所、次のようなことが分かった。泥団子作りは、環境遊びの一環であり、保育者・教師が身近な環境に触れて遊べるよう保育活動の中で意図的に泥団子作りを教えているのである。また、泥団子作りには人を没頭させる魅力がある。使う土、製作過程、製作時間など個人の自由だ。自分にしか作れないものを作り上げていくことはどこか魅力を感じる。さらに泥団子作りには達成感が存在する。ドロドロの土が自身の手によって一つの球体になった時、その球体が周りから称賛を受けた時、爽快感にちかい達成感を味わうのである。こういった魅力があるからこそ、多くの人に泥団子は作り続けられているのだと考えた。

4.結論

実際に泥団子を製作したことによって、その製作過程から次のようなことが得られると分かった。①「最後までやり遂げる達成感」②「周りからの称賛によって繋がった自分への自信」③「努力すれば成果が目に見えて現れる」という以上の三つは、現在の筆者の自我を形成する重要な部分を占められると思われる。そうしたものが泥団子作りから得られるのなら、積極的にこれを子どもたちに教えていきたいと考えた。

また、鏡のように光る泥団子を製作してみて、泥団子作りは光らせるということが最終目標ではないと感じた。加用（2001）も述べているが、土と関わる中で、いかに自分が満足できる泥団子を作れるかが大切なのだ。

最後に、保育現場で子どもたちと一緒に鏡のように光る泥団子を作ることは可能なのか検証した。結果、不可能ではないがここまでのレベルになると難しいと推測している。のべ10時間ほどの製作時間が必要となってくるため、限られた保育時間内では困難に近いだろう。しかし、子どもが望む場合は主体性の育ちに配慮した環境設定を行い、経験ができるように支援することが保育者・教師の役割だと考える。

氏 名	鹿庭 真奈美	学籍番号	J015018	ゼミNo.	8
テーマ	フェルトで作る万年カレンダー				

1.はじめに(動機と目的)

実習で子どもたちがその日の日にちと曜日を覚えていない感じであり、シール貼りの時などには子どもたちがそれを聞いてきたりしていたため、分かりやすく、そして楽しく子どもたちが見やすいカレンダーが作れないかという問題意識を持った。そこで、万年カレンダーにすることで子どもたちに興味を持ってもらい分かりやすく日にちを覚えてもらうことができないかと考え、制作をおこなう。背景にはその月に関する行事を作り貼り付け季節ごとの行事についてのイメージを持ってもらうようにして、ただ日にちを知るだけではないものを目指した。

2.方法

1月～12月までの背景を季節ごとに作り、子どもたちに月の行事にも興味を持ってもらうようにする。日にちと曜日はどの月でも使えるようなシンプルなものにする。年中では曜日を平仮名に、年長では漢字にと年齢に応じて学んでいけるようにする。子どもたちが怪我をしないよう、マジックテープではなく磁石を用いる。その中で、磁石でくっつく楽しさも一緒に味わってもらう。

3.制作過程

準備物はフェルト・刺繍糸・裁縫道具・綿・磁石・型取り用の紙を準備する。フリーハンドで型取りをし、月ごとの背景を作り磁石で取り外しができるようにする。子供たちが、分からないような背景も取り入れ子どもたちに興味を持ってもらえるようにする。数字だけでなく、行事にも興味を持ってもらう。

4.まとめと今後の展望

子どもたちの反応などを想像しながら制作する楽しさを味わうことができた。また、フェルトにすることで子どもたちに安全であるように配慮することができた。背景には子どもたちの知らないようなデザインも取り入れたため、数字だけを学ぶのではなく、季節ごとの行事の意味合いも学べるのではないかと。そして、時間の概念が育ってきている子どもに対して、今日は何月何日よ、と分かるようにしてあげるこのカレンダー作品は、子どもたちの時間に対する観念の発達に即して教育的であり、有意義だといえる。

私は今後、現場に出て保育をしていくことになるが、この「万年カレンダー」を使用することで多くの子どもたちに時間の概念を楽しく身に付けてもらい、そうした発達段階にある子どもたちが日にちを理解できるようになることを期待したい。将来、私は子どもと向き合い常に子ども目線になって考えることのでき、そして子どもたちの発達について深く理解を示すことができ、信頼される保育士になりたいと思っている。

氏 名	菊池 愛美	学籍番号	J015022	ゼミ No.	8
テーマ	人と人を繋げる「布」 布を使った作品制作を通して				
筆者は幼少期から「布」や「針や糸を使う」、「縫う」ということが好きであった。その後、いくつになっても布への興味は尽きることがない。そのように私を惹きつける「布」の魅力について追究していきたいと考えたことが、本研究のきっかけである。 布や裁縫の歴史、人との関わりを調べ、何故布に魅了されるのか、布にはどのような魅力があるのかについて考察し、さらに、布を使った作品制作を通し、このテーマについてさらに理解を深めていく。 そもそも、昔の女性にとって布を扱う技術は欠かせないことであった。これが出来て一人前と認められていたほど、布との関わりは深かったが、現在では一人ひとりが衣料の生産、加工技術を習得する必要はない。手間暇をかけて作るよりも、お店で売っている商品を購入する方が手軽で楽だからである。 そのような時代だからこそ、布と向き合っ手間をかけた「作品」を自分で実際に作ることで、布の良さや魅力はより感じられるという考えから、「黒丸ワーク絵本『ぼく』」「クッション」「余り布での作品」の制作に臨んだ。 一枚の布だったものが作品となったとき、それには気持ちがこもり、愛着がわく。そのような作品を普段の生活の中で気軽に使ったり、持ち歩いたり出来ることは、布の良さである。 また、作る目的（誰のために、何のために作るのか）が明確だからこそ、作り手の思いがこもりやすく、使う側にもそれが伝わりやすい。布という素材、それを縫って作品を作るという行為は、人と人が繋がるきっかけとなり、さらにそこから人の思いに気付いたり、触れたり、感じられたりもするのである。 さらに、人の思いが見えやすいからこそ、物を大切に作る気持ちも芽生えると考ええる。このようなことが布の魅力ではないかと作品制作を通して筆者は考えた。 出来上がった作品には自分の思いや考えが強く反映される。作品にそれらが反映されるということは、その作品を通じて自分自身を表現しているということにも繋がるのではないかと考える。自分を出すこと、表現することが不得意でも、布・裁縫を自己表現の一つとして使うことは出来るのではないか。 また、IT 化が進む社会のなかで、人は現実の人間と会話することに飢えている。私たちの生活が便利になればなるほど、他者を感じる術を失っているようにみえる。布で物を作るという行為は、自分自身を表現するだけでなく、他者の存在を自ら確認していくことに他ならないのかもしれない。					

氏 名	城戸 亜沙美	学籍番号	J015023	ゼミNo.	8
テーマ	折り紙教育が幼児に与える影響				
筆者は、幼い頃によく折り紙で遊んでいたが、折り方が難しいものがあるとすぐに投げ出していた。だが、大学３年生の時に偶然、動画投稿サイトに投稿されていた折り紙の作品を目にした。それを見て、筆者は紙一枚で多様な作品を生み出すことができる折り紙に無限の可能性を感じた。本稿では、この折り紙に着目し、その教育的役割や作品製作の素材としての表現の可能性について明らかにしていくことを目的とした。 本や資料を用いて折り紙の起源や歴史について学んだり、教育実習での観察から考察を行ったりしたうえで折り紙が保育現場で果たす役割について考察する。また、折り紙を主な表現方法とした絵本を制作し、既存の絵本とのイメージを比較した。絵本の制作には、折り紙だけでなくカラーセロハンなど他の材料も用いて制作をした。折り紙絵本には、観るものに「触れてみたい・どうやって作ったのか」という造形的な興味関心をもたらし、想像力を刺激する効果があると考えられる。 教育実習での観察を通して、子どもにとって折り紙は、手本を模倣して折り、できあがったときの喜びを味わうもの且つ、自分が作った作品を遊びの中に取り入れるための道具であると述べた。それは、子どもの発達において手先を器用に使う「巧緻性」や、難しい作品を作る時に周りの友達と一緒に協力しながら作ることから培われる「コミュニケーション力」、また、手本と自分の手元を見比べながら完成を目指して試行錯誤しながら作るための「集中力」を養うために十分な役割を果たしている。 子どもたちの遊びの環境の中に、折り紙は浸透している。この作品を作りたいという理想を持って一生懸命折り紙に取り組む。難しいと思っていたものが、自分で試行錯誤し挫折を繰り返しながら作りあげることができたことの感動は相当大的なものであるといえる。保育者は、子どもがそのような達成感を得ることができるように援助しなければならない。難しく投げ出しそうになったときは、優しく寄り添って一緒に完成を目指すことが大切である。何気なく紙を折るという、一見すると単純に見える作業からは子どもの発達を促す要因がたくさん含まれている。折り紙遊びは幼児の育ちに欠かせないものであると考える。 筆者は今後、保育の現場に出て日々の保育において折り紙の魅力を伝え、子どもが大きく成長できる手助けをしたいと考えている。「楽しい！」「できた！」という気持ちを、子どもと一緒に共有できる保育者を目指していきたい。					

氏 名	木下 佳那	学籍番号	J015024	ゼミ No.	8
テーマ	「作品としての楽器」				

筆者は高校生の時に浜松市楽器博物館に行きデザインによってうける印象が変わるという認識を新たにした。また、大学 2 年生の時に、様々な打楽器を使って音を表現する授業でトロムメールという楽器を使った。トロムメールは、作りは簡単なものだがユニークな形をしていて不思議な音がする。筆者はその楽器を保育の現場で使ってみてはどうかと考えた。こうしたことから作品としての楽器という概念でいくつかの楽器を自作することにした。そしてそのデザインを工夫し、幼児に受け入れやすくすると同時に、表現遊びに繋げることはできないかを考察していく。実際に作った手作り楽器を子どもたちが遊ぶ現場で提示し、様子を観察することで調査をしていく。

まずカリンバという楽器を制作した。これを制作したことで、楽器は自分で作れるのだと自身がついた。次のトロムメールでは、「楽しいデザインの楽器であるほど受け入れられるだろう」と予想し、このことを検証・比較考察するために意匠が異なるパターンで制作した。①素材、形（機能）は同じだが、装飾をしていない基本形（基本形）、②各鍵盤を色分けしたもの（色分け）、③各鍵盤に動物の絵を描いたもの（動物の絵）の 3 つである。

完成した 3 つのトロムメールを持って松山東雲学園附属幼稚園（以下園）に持って行った。今回は 5 歳児、3 歳児に実際にトロムメールで遊んでもらった。比較していくと、トロムメールそのものの使い方やそれぞれのデザインごとの遊び方が大きく異なっていた。5 歳児は、すぐに楽器として音を正しく出して楽しんだのち、トロムメールを「鍋」に見立てて、ままごとの一部として使用し自分たちの遊びに取り入れて遊んでいた。意匠の違いによる受け入れられ方の差はほとんどない。そして 3 歳児は、それが楽器だとわかっても、太鼓のようにしかバチを扱えず、意匠の違いによる受け入れ方の差が著しかった。③（動物の絵）の特定の絵柄を狙って叩こうとしたり、②（色分け）の色や③の動物に興味を持ち名前を言ったりしている姿が多く見られた。

これらの様子から、子どもたちが普段から園の楽器に対して多様な関わり方をしていくからこそ見られた姿であると分析する。つまり、この園では音楽会等の特別な時以外でも子どもたちが自由に楽器に触れて遊ぶことができる環境が整えられていたが、そういう環境であるからこそその展開であったと考えられる。幼児が楽しく楽器と親しむ環境を作る一環として、遊びの中で楽器に興味を持ったり、関わりやすくしたりすることは重要である。そのために楽器のデザインも工夫する必要があるのではないか。今回確かめたように、育ちによって受け入れられ方は異なるが、楽器とかかわるきっかけを作るためにも、提示する楽器がオリジナルの「作品としての楽器」であることは意義深い。筆者は将来、今回作った楽器で自分のクラスの子どもたちに遊んでもらい楽器や音楽に興味を持ってもらいたいと考えている。

氏 名	河野 有紗	学籍番号	J015025	ゼミ No.	8
テーマ	「あこがれの何かになりたい！」 ー幼児期に「身につけるもの」を製作する教育的意味ー				

筆者は、幼稚園教諭免許取得のための教育実習で「ファッションショー」を観察した。そこでは普段製作活動に消極的な子どもが楽しみながら製作をする姿が見られるなど、子どもたちの様々な変化が確認された。そこで、幼児期に体験する様々な製作活動の中でも、「身につけるもの」を製作することは、他の製作活動では得られない体験や心の変化があるのではないかと考えた。

本稿では筆者自身が作品としての「身につけるもの」を制作しながら、この製作活動が幼児に与える影響や、子どもが豊かに育つ製作活動にするために教師はどのように関与すればよいのかについて考察を深めた。そうすることで幼児が園生活の中で作ってあらわすことの喜びを感じられるようにすると共に、自分らしさを発揮し、友だちのその人らしさを認めながら日常生活に必要な衣食住の衣に関する興味関心を高め、生活をより豊かにするように促す事を目的とした。

制作に用いる材料は保育現場で実際に用いられているものや、家庭で手に入りやすいものを使用した。作品制作を通じて筆者が幼少期に持っていた「あこがれ」への変身願望が追体験の形で満たされていくことが確認できた。子どもたちの場合なら、まさに現在進行形でこの「あらわしたい」という製作意欲をかきたてることができると予測する。また、制作中に感じた様々な気づきや困難から、教師の関与の重要性についても考察した。

「身につけるもの」を製作していく過程では「なにかになりたいという願望」を行動に移す事が出来る。「あこがれの何かになりたい」「好きなものを身につけて、いつもの自分とは違う自分になりたい」という願望は幼児が今までに出会った心を動かす出来事から生まれてくる。いつか見た何かになりたいというあこがれ、目の前にはないものを思い浮かべてイメージする力が「感性」であるといえるもので、この製作活動によって幼児の豊かな感性を育て、それを原動力として子どもの主体的な活動を行うことが出来る。

また、友だちと一緒に「身につけるもの」の製作活動を行うと、活動中にイメージを共有し、同じものを身につけることで一緒に遊んでいるという気持ちを高め、幼児の協同性を育むことになる。

子どもたちの主体的な学びや新たな発見を引き出すために教師には、まず幼児の行動に込められた思いを汲み取り、子どもの世界に入ることが求められる。次に素材をたくさん提供すること、さらに環境設定の段階でいくつかの可能性を予測する力を持つことが重要である。

今後の幼児教育の現場において「身につけるもの」の製作活動を効果的に実践しながら、豊かな造形表現活動になる為に適切な関わりが出来るようにしたい。

氏 名	澤田 楓	学籍番号	J015028	ゼミNo.	8
テーマ	コラージュ作品が人に与えるもの				
コラージュという技法は、美術におけるモダンテクニックの一つである。異素材を組み合わせることで画面に貼り付け、思いがけない効果を得ることができる。実際コラージュは切り貼りで効果を得ることができるため、福祉の現場ではリハビリの一環として使用されている。実際に過去の実習で利用者の方が取り組まれている様子を目にした。絵を描くことが苦手な人にとっても簡単に取り組めることが魅力の一つである。本稿ではコラージュについて調べながら、そのおもしろさに着目し、コラージュ作品のどのような点が人を魅了し、夢中にさせるのか研究した。そしてその研究結果を将来保育の現場にも生かしていきたいと考えた。 コラージュの先駆者として重要な人物に、ジョルジュブラック()と、パブロピカソ()という人物がいた。二人は、廃材などの本来の絵とは異質の、それも日常的なものが絵画に導入される手法を「コラージュ (貼り付けたもの)」紙の切れ端を油絵や素描の表面に貼り付ける方法の場合は「パピエ・コレ (=糊付けした紙)」と区別した。コラージュ作品の制作では、日常的な素材を数種類組み合わせることが前提になる。生け花の杉浦(1999)も「作者の感性でその材料の新しい組み合わせを考え、新しい美しさを作り出すこと、すでに存在しているものをどう組み合わせるかがその人のオリジナルだ」という。 生け花も、コラージュも異なった素材を組み合わせることにより、オリジナル性を強めて、自分の表わしたい感情を自由に表現できる。 卒業制作には、廃材などの身近な素材を使用した。異素材を組み合わせるだけでなく、制作を一種類の素材だけで行うとコラージュ作品はどのような見え方をするかについても、実際に制作して比較を行い、やはり多様な素材があるからこそ「見立てのおもしろさ」があるのだということを確認した。 コラージュとは、異素材を組み合わせることにより、本来持っている素材のイメージを払拭し、新しい思いがけない効果を得ることができる。保育の現場では素材の形を生かした見立て遊びもコラージュの楽しみの一つとして考えられる。 テーマのない制作を行っていても、制作を進めていくうちに見立てによって自分の中の創造性が刺激され、自分らしい作品の制作ができる。作り手の気持ちがしっかりと表現されていれば他者に感動を与えることができる。ゆくゆくは、こういった非言語の表現活動を通して「言葉ではないメッセージ」を発することができる感受性を自分にも育てていきたい。					

氏 名	鈴木 美紗	学籍番号	J015032	ゼミNo.	8
テーマ	絵を描くという冒険				

はじめに（絵を描くということについて）

私は、幼少の頃から絵を描くことに興味を持ってきた。大学に入学し、いつか油絵具を使った制作しようと考えていたところ、授業の中で様々な画材に触れ、さまざまな技法を学んだ。画材には、今まで使ってきたアクリル絵の具からクレヨン、色鉛筆など高校では進んで使おうとしなかった物もあった。実習で幼稚園に赴いたとき、子どもたちの絵は、まるで“冒険”に出発するかのように自由だということに気付かされた。絵を描くということは、冒険と同じだと考える。

ところが絵を描くことに対し苦手意識を持つ人は多い。多くの人が評価されることを意識するあまり「絵はバランス良く描かないといけない」と思い込んでおり、しかも「その方法を知らない」のである。また、強制されたりしたことで、絵というものが自由ではないと感じ、描くことを諦めてしまった場合もみられる。

目的と方法、先行研究について

伊牟田経正（1934 年～2018 年）の制作をもとに考察をおこない、それを踏まえて自身でも絵画作品を制作する。先行研究が伝えたいことを理解し、自己を開放し自由に表現するように努める。伊牟田の作品はたんに「目の前のものを写実的に描いた」だけではないように感じられる。彼は生前“私は、絵を描く時、見えるものを描きながら、その向こう側に確かに在る「見えない何か」を感じていて、それを捉えたいといつも願っていた。”と述べている。つまり彼にとって絵画表現とは、眼の前にあるものを写実的に描くというだけのことではないのである。

私の絵画制作について（ふりかえりと結論）

伊牟田のいう “見えるものを描きながら、その向こう側に確かに在る「見えない何か」を感じて描く” という方針を意識し制作を進めていった。「見えない何か」については、象徴的なイメージや、観るものに色彩の感情で訴えるなどの具体的な方法を取るにより、「馬や動物に親しみを持ってもらいたい」という私の作画の意図を全体から醸し出すことを目指した。完成した作品はまだ不完全ながら、この意図に沿ったものになり、これまでの作品よりも思索の深いものに仕上がった。

子どもたちのように自由に描いていくには、「非日常」を意識することが重要である。絵を描くことは「非日常」の行為であり、言葉を超えたものである。描くことで人は気持ちが晴れたり、もっと前に進もうという気持ちにもなる。ここまですぐいいというゴールも用意されてはいない。そんな「自由な冒険」なのである。多くの人たちに「絵を描くという冒険」を試してもらいたい。

氏 名	辻本 玲奈	学籍番号	J015039	ゼミ No.	8
テーマ	自閉症の人が夢中になれるもの				

自閉症の人が夢中になって取り組むことができる作業療法とは何か。実習で障害者施設の作業療法中に利用者の方々がなかなか作業に夢中になることができているという様子に気が付いた」。本稿では自閉症の作業療法について図画工作の視点から考えたい。自閉症の特徴から、①目で見ること、②手で触れることを中心にした感覚 という二つのテーマを挙げ、どうすれば自閉症の方が作業に夢中になれるのかを研究した。自閉症の方が作業に楽しんで取り組むことができるようになることを目的とし、作品としての作業用具を制作し、現場で提案する。

作業用具とは「ボール紙パズル」と「土粘土のお椀」である。制作に用いる素材は、普段目にすることや触れることが少ないであろう、ボール紙と土粘土とした。ボール紙は、厚みや触り心地から、パズルに使用し、土粘土は人の手で練られた温かみから、陶器のお椀にし、こちらのお椀はお箸で小さな物をつまんで移動させる作業の器として使用した。制作した作業道具を実際に自閉症の方々に利用してもらい、普段の作業の様子とどのような違いがあるのかを観察し、考察した。

実際に作業の様子を観察したところ、普段目にすることが少ない、土粘土の陶器は利用者の方々の注目の的となった。正規の使い方だけでなく、土粘土のお椀をただ触ったり、なでたりすることに夢中になっている方もいた。また、つまむための小さな物を紙粘土で制作していたが、そちらの紙粘土の感触を楽しむ方もいた。さらに、ボール紙パズルでは裏表非対称のピースに苦戦したり、触ってピースの形を確かめたりと、数分ではあるが夢中になって取り組む姿が見られた。

観察結果から分析すると、自閉症の人は、目で見ることよりも、感覚でものごとを知覚する人が多いのではないかと考えられる。私たち健常者は目で見た情報を主に信じ、知覚することが多いのではないか。自閉症の方の、感覚、特に触覚に対する鋭さや鈍さは健常者の生活においては軽視されがちなことと言ってもよく、私たちが日常における新たな発見を積んでいくには良い知覚方法だと考える。作業療法という視点のみの考察ではあるが、自閉症の方が夢中になれるものは何か、興味を持てるものは何か。それは、「感覚で感じられるもの」というのが今回の答えになるだろう。しかしそれは自閉症の人にだけ言えることではない。五感で感じるということは、私たち人間にとって大切な感覚である。それは、保育園や幼稚園、小学校の授業などでも同様であろう。どのような場面であっても、手で触れることを中心にした感覚で周りを知覚することは、人間を夢中にさせるのだ。筆者は今後保育の現場で、五感を使った活動を広げていくつもりである。五感を使うことの楽しさを伝える保育を目指していきたい。

氏 名	福本 咲桜	学籍番号	J015046	ゼミNo.	8
テーマ	スクラッチ絵本の世界からみえるもの				

大学の図画工作の授業で「スクラッチ」や、「スパッタリング」、「デカルコマニー」などのように様々な技法（モダンテクニック）を学んだ。スクラッチ技法で様々な作品を作っていくうえで生じてきた疑問点を明らかにさせながら「スクラッチ」の持つ深い可能性を追求したい。その疑問点とは、①なぜ黒色だけが削ることができ鮮やかな色は残るのか、②「クレヨン」と「クレパス」は名前が似ているが違いは何であるのか、③普段、画用紙でスクラッチを行うが和紙などのように他の紙素材を用いて「スクラッチ」を作ることは可能であるか、について調べた。

さらに、本研究では再生のイメージを強く持つスクラッチという技法で、どのようなイメージを描いていけるのか深く追求するため、作品制作も併せて行う。

先述した①、②、③の疑問点を実験によって確かめていくために、様々な紙素材を支持体としてスクラッチを行う、「クレヨン」と「クレパス」それぞれでスクラッチを試し、検証した。実際に「スクラッチ絵本」を制作しスクラッチの持つ深い可能性や表現力を追求する。スクラッチによる『冬に咲くひまわり』（筆者オリジナル 2018）と『きんぎょがにげた』（五味太郎 1977）の模写という 2 作品を制作し、オリジナルの表現におけるスクラッチ表現の可能性と、五味氏の作品をスクラッチで模写することで、作画におけるイメージの展開を学びたいと考えた。

スクラッチ技法は色を塗り重ね、黒で塗りつぶし、削ることで下の色が再び見えるようになることで絵を表現することの面白さと、心理的に人を引き付ける効果、表現方法に変化をもたすことができる。心理的に人を引き付ける効果について触れると、実際に作品が展示されている場合、スクラッチで制作された作品が最も学生たちの目を引いていた。黒地に引っ掻いたあとの色彩が鮮やかであるため、心理的に人を引き付ける効果があるのではないかと考える。スクラッチは工程が普通に絵を描くときより、時間も労力も必要となってくるが、作品を作っていくことで自分が思い描いていたものとは異なるイメージで色が浮かび上がり、もう一度同じ物を作ろうとしても再現することは不可能である。この技法は時間をかけて仕上げることで作品への愛着とたった一つの作品とすることができ、様々な色で表現豊かに作品を作ることで人々の目を引き付けることができることができるということを伝えていきたい。

筆者は今後、集中力を養いたいときや、何かに没頭したいときなどにスクラッチと向き合い、自分自身のオリジナル作品を多く制作し、表現していきたい。

氏 名	山口 絵莉子	学籍番号	J015052	ゼミNo.	8
テーマ	木製玩具の良さについて				

それぞれの保育現場において、園によって、教育方針や宗教など違いがあるが木製玩具は共通して置かれているのを見た。筆者自身も幼少期に園や自宅で積み木や、木材で作られた小さな家具でおうちごっこをしていたこともあり、本稿では、なぜ木製玩具は、園や子どもに好まれるのか・木材はどのような良い影響があるのかに着目した。これらについて調べていくと共に、実際に木材を使って作品を制作し、木行くについて考察する。

なぜ木製玩具が好まれるのかを調べるために、制作した木製の積み木を制作し、実際に、子どもに使ってもらい反応を確かめることにする。また、木材には幼児(人間)に対してどのような良い影響があるのか、玩具に良く使われている木材の種類や玩具に不向きな木材の種類についても調べるために文献をあたった。

まず、木材を使って積み木を制作した。制作を進めていくなかで、「木目」があることや、木材をのこぎりで切ることの大変さ、紙やすりで削って触り心地が良くなっていく達成感を味わった。そして、なぜ木製玩具は、園や子どもに好まれているのかを考察した。作る過程でも五感が刺激されるが、木製玩具で遊ぶことには「つるつる」・「ぼこぼこ」・「さらさら」などといった触覚や、木の独特な「香り」といった嗅覚、「白い」・「茶色い」といった視覚、木製玩具同士が当たった「音」といった聴覚が養われていくのではないかと考えた。未満児だと口に入れてしまうこともあり、木の独特な香りが口内に広がるといった「味覚」も刺激されると予想する。

制作した木製の積み木を実際に友人の子ども(女兒:2歳4ヶ月、2019年1月時点)に遊んでもらい様子を観察した。ひたすら積み重ねて、壊すという作業を繰り返すその時の音を楽しむ姿が見られた。このことから、木材の良さは「音」という部分もあることに気づいた。作ったり壊したりするなかで「音」は付きものであり、木製だとそれが「耳にやさしい」のである。これらを踏まえ、木材には温かみを感じさせ、木製の積み木には「遊ぶ」という目的以外に感覚を刺激する要素があると考えた。プラスチック製や紙製の玩具のように破損することも少なく、また、なめたり口に入れたりしたとしても安心で、長く遊べる利点がある。

このように、子どもの五感の発達に関係し、耐久性・安全性に優れ、自然を感じることができるため、木材は園や子どもに好まれていると考える。

筆者は、今後も木製に注目をしていきたい。自然が減ってきている世の中ではあるが、子どもにもっと自然を身近に感じてもらえるようにしたい。

氏 名	山本 実咲	学籍番号	J015055	ゼミ No.	8
テーマ	安全な粘土について				
筆者は幼少期から粘土に触ることに興味をもってきた。大学に入り、保育について学びを深めるなかでもっと好きな粘土について調べ、その特徴などを調べたいと考えた。特に、食物アレルギーのある子どもでも楽しめ、口に入れても大丈夫な粘土はないのかという問題意識をもって、どんな工夫をしたらそのような子どもたちでも粘土を楽しめるのか考察したい。安全な粘土のための材料は何が適当なのか。作り方はどうなっているのか。またそうやって作った粘土を長持ちさせるにはどうしたらいいのかについて考察する。 最近の食物アレルギーにはどのようなものがあるのかについて調べる。そして、安全な粘土になりうる材料によって実際に粘土を1から作り、目的に合う粘土ができるかを確認する。その粘土の感触や保存方法について詳しく紹介していく。また、それらは口にしても大丈夫なのかを、実際に食べて検証していく。 まず、最近の子どもに一番多い食物アレルギーについて調べた。最近の子ども達には免疫が少なく、すぐ風邪を引いたり体調を崩したりする現象が見られる。そういう子どもたちにおいて多く見られるアレルギーには、三つの代表的なものが挙げられた。最多であるのが「鶏卵アレルギー」、次に「牛乳・乳製品アレルギー」でそれに続き「小麦アレルギー」と一般に知られた名前のアレルギーが多いことがわかった。これらのアレルゲン物質を避けるようにして、代替物質を材料にするという考え方で「寒天」、「小麦」、「団子粉（米粉）」を用いた安全な粘土を作り、検証をおこなった。その結果、製作方法や保存方法について、調べた情報どおりにやってもうまくいかない場合もあり、その都度工夫していくことも必要であったが、アレルギーのある子どもでも材料を工夫された粘土で粘土遊びを楽しむ事ができるのが確かめられた。 さらに、こうした食材を材料とする粘土であることから、遊んだあとに食べても大丈夫なので非常に興味深い。また、粘土を作る過程や、できた粘土で何かを作る過程、さらにはそれらを楽しく食べることで、子どもの諸感覚を働かせる事ができる。これは保育所保育指針に照らしても子どもたちの創造性や手先の巧緻性などを育むことが期待でき、意義がある。遊んだあとに、お菓子のように食べる楽しみもあるというならば、子どもたちはきっと大きな期待感を持つことだろう。 筆者は今後、アレルギーのためにみんなでする遊びに参加できないという子どもが一人でも減っていくことを望む。今回得た知識をこれからの活動に取り入れて、安全な材料でみんなで楽しめる粘土を作り、今後の自分の保育に活かしていきたい。					

氏 名	岡 祐里佳	学籍番号	P 015005	ゼミNo.	9
テーマ	何故、人はディズニーリゾートに何度も足を運ぶのか				
私は大学2年生の時、大学のキャリアプログラムである「ディズニーおもてなし研修」に参加した。地元の企業でインターンシップに参加し、実際に東京ディズニーリゾートにも足を運んだ。その中で学んだことは、おもてなしとはお客様の心に気づき一歩先のサービスを提供すること、と言うことを学んだ。世界中から多数の集客を望めているということは、それだけ見えないところで、工夫が、凝らされている裏方を探してみたいと考えた。現在日本には、多くのテーマパークが存在し、営業している。その中で、成功し進化を続けているテーマパークもあれば、廃園になっているテーマパークも多々ある。地方で人口が減少し、過疎化していると言う問題もあると思われる。その中で、成功し進化し続けている、株式会社オリエンタルランド(以下、ディズニーリゾート)に着眼点を当てたい。 世界にはディズニーランド関連のテーマパークが、六ヶ所ある。上海ディズニーランドなど、雨が降ればすぐレストランを閉めたり、アトラクションを閉めたりかなり自由らしい。そしてキャストの笑顔や、ホスピタリティーが欠落しているようだ。改めて日本がおもてなし大国だということに気付いた。 ディズニーリゾートでは、来場者の90%以上がリピーターである。より集客を増やすため、新しいアトラクションを導入したり、新しいキャラクターを作ったり工夫がなされている。その他に、集客が増える方法を自分なりに考えた。今後ディズニーリゾートが入場者数を増やすためにはどのような戦術を立てればよいか。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催で多くの外国人観光客が来日することが予測されるが、その際に集客効果が望める企画を立案していく必要がある。そのためキャストの英語力や、中国語などの語学研修に力を入れるべきだ。また価格の高さも気になる。チケット代と食べ物や飲み物、カチューシャなど、一万円程度はかかる高価なものについては今後検討していく必要がある。 更に、地方の人が行きやすくするため、チケットの値下げも必要だと思う。地方から来た人にチケットの値引き制度を導入したりすると良い。他地方からの観光客も行きやすい環境を作るべきだ。また最近は、SNS映えや写真映えという言葉をよく聞くだろう。ディズニーで写真を撮り、SNSに載せ「イイネ」を貰ったりすることで承認欲求を満たしてくれる場所でもある。「私って、ここに来てこんなに楽しく、それに友達や恋人もいて、最高!」と、誰かに認めてもらいたいという承認欲求が強い傾向にある。それ故、写真映えのスポットを増やしたりすることも大切だ。そしてキャストもゲストも我が子を預けられる事業所内保育所のような施設をパーク内に作ってもよいと思う。まだまだディズニーリゾートは、顧客を増やす為に戦略を考える必要があると思う。これからも成長が期待できる施設がこのディズニーリゾートなのだ。					

氏 名	河野 桃花	学籍番号	P015011	ゼミ No.	9
テーマ	映画『もののけ姫』から見る社会問題				

はじめに

様々な社会問題を提起しているスタジオジブリ作品の中でも、『もののけ姫』は、明確な結論を出しているように感じられた。『もののけ姫』は、自然と共存しようとする者たちと自然を支配しようとする者たちの物語であり、「生きる」ということ自体がテーマとして描かれている。そこで、本研究では、『もののけ姫』に焦点を当て、宮崎駿監督が伝えようとした現代の社会問題について考察した。

第一章 『もののけ姫』について

『もののけ姫』の成り立ちや主な物語の内容について述べている。

第二章 『もののけ姫』の時代背景

『もののけ姫』の時代背景が室町時代であり、メインの舞台がタタラ場である理由について考察した。宮崎が鍛冶屋に憧れていたことから考察を重ね室町期にたどりついたこと、近代的な考えを持ったエボシというキャラクターが生まれたためであることがわかった。

第三章 『もののけ姫』の登場人物たちから見る社会問題

『もののけ姫』の登場人物たちから見る社会問題について考察した。宮崎はエボシについて、「二十世紀の理想の人物」であると語っている。挫折に強く何度も立ち直り、人を差別せず受け入れるエボシの姿は、現代の人々が目指すべきところであるだろうと考えた。

第四章 『もののけ姫』から見る環境問題

『もののけ姫』の環境問題、また、『もののけ姫』から見る現代の環境問題について考察した。『もののけ姫』は、歴史の上で人間がやってしまったことをもう一度再現している映画だと宮崎は語っている。人間達は自分勝手に自然を破壊し続けてきた。その結果がタタリ神を生み、シシ神を殺し、森を取り返しがつかない状態にしてしまった。また、森を破壊した事により自分たちが災害に苦しめられることとなった。宮崎は『もののけ姫』から自然の恐ろしさについても伝えようとしていることが分かった。

第五章 結論

第一章から第四章までを考察し結論付けた。森林を守り、自然と人間が共存していくためには、第一にこれ以上森林伐採を行わないことが大切である。また、女性が社会に進出し、差別について厳しく言われている今、『もののけ姫』を制作するには意味があったと思われる。以上から、宮崎は『もののけ姫』を通して現代の環境問題について警鐘を鳴らし、現代に生きる人々や日本の社会のありようについても一度考えるきっかけを作ったと結論付ける。

氏 名	長田 弥子	学籍番号	P015022	ゼミ No.	9
テーマ	漫画『風の谷のナウシカ』における宮崎駿の人類への警鐘				

本研究の目的は、数多くの名作を手掛けてきた宮崎駿監督（以下、宮崎）の作品である漫画『風の谷のナウシカ』を読み解き、この作品で宮崎の現代の私たちに対するメッセージを読み解くことである。

物語を読み進めていくと、三つの注目すべきポイントが見えてきた。一つ目は、高度な科学技術を要しながら滅びた旧人類は、汚染されていない動植物の原種、農作物、音楽と詩以外に、後世に残す価値のものを作れなかったとしている。原因は、地球が汚染されると共に、次々と生まれる新しい病気、おびただしい死、たくさんの宗教が生まれたことにより、たくさんの正義や利害が生まれたことだ。これにより、自らの手に負えなくなり收拾がつかなくなった人類は、生き物や文化や芸術以外に残す技術はなくなったのだ。二つめは、旧世界から止むことのない戦争や内戦、繰り返す大海嘯である。これについて宮崎は「みな自分だけは過ちをしないと信じながら、業が業を生み悲しみが悲しみを作る輪から抜け出せない」と庭の主のセリフを通して読者に訴えている。三つ目は、ナウシカと墓所の主の対峙のシーンである。人類再建のためであっても科学の力で生命を生み出し弄ぶことをナウシカは許さず、新しい人間の卵と共に無に帰している。

まとめとしては、漫画の連載が終了して二十五年ほど経つ今でも、漫画『風の谷のナウシカ』の世界のように現実世界も同じような道を辿ろうとしている。人口増加に伴い深刻化する汚染問題や地球温暖化、資源の枯渇などの環境問題。また思想や文化の違いにより各地で起きている戦争やテロ事件。このような多くの社会問題を抱える私たち人類に対して、宮崎が最も主張しているのは「共生」だと私は思う。人類が破壊し支配しようとしてきた自然によって私たちが生かされているということ。憎しみの連鎖が引き起こす戦争の恐ろしさ、生命の尊さを知ることが必要である。宮崎はスタジオジブリ立ち上げ当初を、「ジブリを作った頃、日本は浮かれ騒いでいる時代だった。経済大国になり“ジャパン イズ ナンバーワン”なんて言われていたけど、僕は頭にきていました。頭にきていなければ『ナウシカ』なんかは作らない」と振り返っている。技術革新が進み、私たちの暮らしは飛躍的に向上した。しかし、未だに戦争をし、また環境破壊の問題を解決できずにいる私たち人類は、本当の意味で進化できているのだろうか。経済は賑やかでも心の方はどうなのか。そのように宮崎は現代を生きる私たちに訴えかけている。ナウシカが提起した問題は消して架空の世界の問題ではなく、まさに私たちが生きていく上での問題なのだ。ナウシカの言動は、多くの問題を抱えながら混沌とした時代を生きていく私たちにとって、重要な指針となるだろう。ならば物語中で言われる偉大な生命として、現状から変化していくことのできる存在でありたいと思う。

氏 名	池宗真佑子	学籍番号	P015001	ゼミ No.	10
-----	-------	------	---------	--------	----

テーマ	The Three Worlds of the Internet				
-----	---	--	--	--	--

The internet is useful, but it is also dangerous due to computer viruses, identity theft, cyberbullying (*net-ijime*), and sexual predators. These are problems with the surface web and deep web. There are even greater dangers in the dark web, many of which involve cryptocurrencies, or internet money. The purpose of this study is to learn more about the risks of the internet and to help others protect themselves. This paper first defines the terms: *the internet* (or *the surface web*), *the deep web*, and *the dark web*. Next, it discusses the rise of Bitcoin and other cryptocurrencies. Finally, it looks at why the deep web is dangerous and suggests ways to keep children safe online.

According to Iffat & Sami, a good definition of the “surface web is essentially the visible web, that is, the web as most people know it.” The deep web, sometimes called the invisible web, is the large part of the internet that is inaccessible to conventional search engines. According to Apple’s American English Dictionary, the dark web is “the part of the World Wide Web that is only accessible by means of special software allowing users and website operators to remain anonymous or untraceable.” A cryptocurrency is a digital or virtual currency designed to work as a medium of exchange.

There are many dangerous ways people use the internet, especially the dark web. If children use the internet, their parents must use the internet with them. According to the Child Rescue Network, when it comes to internet safety [parents] must remember that, according to the FBI, there are an estimated 50,000 predators online, at any given time, all looking for potential victims.

氏 名	藤原千華	学籍番号	P015503	ゼミ No.	10
テーマ	Miyazaki Hayao and the History of Studio Ghibli				

Studio Ghibli movies are popular across all generations and nationalities. It is said that “Disney movies touch the heart, but Studio Ghibli films touch the soul.” According to Hannah Ewens, Miyazaki Hayao, of Studio Ghibli, was the master at balancing “the spiritual, the realistic, the fantastic, and the human.” This paper first introduces Miyazaki Hayao’s life and his contribution to anime. Next, it explains how he built Studio Ghibli. Finally, it discusses some of the Studio Ghibli movies and shows the influence that Miyazaki and Studio Ghibli have had on the world of animation.

Miyazaki Hayao was born in Tokyo in 1941. He was not good at sports but excelled at drawing. After graduating from Gakushuin University, he joined Toei Animation, where he met Takahata Isao. Miyazaki and Takahata started Studio Ghibli in 1985 after the success of their movie *Nausicaa of Valley of the Wind*. Other important films they made together include *Spirited Away*, *My Neighbor Totoro*, *Princess Mononoke*, and *Howl’s Moving Castle*.

Together Miyazaki and Takahata have worked on 13 movies that have influenced artists and animators everywhere. Ghibli’s female characters have also broken down the role of gender that is sought implicitly in society. Their movies have complex, strong female characters who do not need to be rescued. According to Miyazaki, “They need a friend, or a supporter, but never a savior. Any woman is just as capable of being a hero as any man.”

Miyazaki Hayao is one of the most influential animators ever. His creations have touched the souls of people all over the world.

氏 名	宮内 愛	学籍番号	P015504	ゼミ No.	10
テーマ	Australia on the Brink: Climate Change and the Danger of Global Warming to the Australian Environment				
Australia is one of the most vulnerable countries to climate change. According to the Australian Government, “Australia faces significant environmental and economic impacts from climate change across a number of sectors.” This paper first describes the ecological system of the Australian Great Barrier Reef and then looks at the effects of global warming, in general. Next, it looks at the effects of global warming on the Great Barrier Reef and on the sea turtle. Finally, it looks at ways Australians are trying to slow down global warming. The Great Barrier Reef is the world's largest coral reef area spreading over 2,300 km in length. In recent years coral reefs are in danger due to various environmental problems. Coral bleaching due to rising seawater temperature, as well as water pollution and the mass reproduction of starfish are causing the mass death of corals. The survival of the Great Barrier Reef is in question. The Great Barrier Reef is the breeding ground of the largest and most important green turtle in the Pacific. Australia is worried that sea turtles are all becoming female due to the rise in seawater temperatures. It is estimated that 99% of all new-born turtles are female. More than 189 million square kilometers of marine ecosystems around the Great Barrier Reef can no longer function properly due to human activity (plastic pollution, shipping, fertilizer runoff, fishing). Less than half of the remaining ocean area is designated as marine protected area. In conclusion, due to climate change caused by global warming, marine creatures such as coral and sea turtles are endangered. Many animals have died. In the Great Barrier Reef, the coral bleaching phenomenon is progressing, mainly due to the rise in the seawater temperature and the severe summer heat. Sea turtles have been found to be mostly female in recent years due to the continuing severe heat. These problems affect all the earth. Humans must do more to help cut emissions that cause global warming or the Great Barrier Reef, and the animals it supports, will disappear completely.					

氏 名	伊原 希洸	学籍番号	p015002	ゼミ No.	12
テーマ	アメリカにみる映画の中の異文化コミュニケーション				

本研究は、アメリカ国内の異文化コミュニケーションについて、文献研究を基に、映像に表れる異文化状況下の人間関係の発展と変化を分析し理解を深めるために行った。文献研究では異文化接触と異文化適応についての先行研究を概観し、オバークのカルチャーショックの定義や、その後進められた異文化適応のプロセスを理解した。それを基に「ダンス・ウィズ・ウルブズ」(映像 1)「最後の恋のはじめ方」(映像 2)「最高の人生の見つけ方」(映像 3)の 3 種類の映画を対象として、それぞれの異文化適応プロセスを考察した。具体的には、アドラー(1975)による認知・感情・行動面から捉えた異文化適応プロセスの 5 段階を用いてそれぞれの適応段階の分析を行った。その結果、映像 1、2 では 5 段階の中で不適応過程も見られたが、基本的には同じような適応過程を辿っていることが共通していた。映像 3 では、映像 1、2 と同様に、不適応過程も見られた。また 5 段階の順番が入れ替わることがあり、必ずしも適応モデルの順番通りではなかった。

次にアドラー(1975)が示す適応過程の第 5 段階(異文化受容・適応の最終段階)に繋がった決定的出来事として特に注目したのは下記の通りである。

映像 1 では、ダンバーがアメリカン・インディアンに、バッファローの大群を知らせることで彼らの信頼を得ることができ、バッファローの心臓を食べる儀式的な行動で、アメリカン・インディアンの一員となることが出来た。映像 2 では、誤解によってすれ違いを重ねていたヒッチとサラが、第 3 者の介入で互いに意地を張ることなく素直になることで局面が一変し、相手を受け容れることができるようになった。映像 3 では、現実的に黒人・白人間の差別意識に捕らわれて異文化に抵抗を感じ、辛い経験をしていたカーターとエドワードが、その差別など関係なく最後の人生を互いに捧げることが出来るようになった。病院の同室という望まない環境に置かれ、「棺おけリスト」(死ぬ前に一緒にやり遂げたいリスト)を作り一つ一つ成し遂げる中で互いへの気持ちが変わり、自分が辛いときに助けてもらったことで認め合うことが出来たのだ。

このように異文化に接触すると、簡単になじめるわけではなく、カルチャーショックを受けることもある。だが、自ら努力し相手のことを思いやる事が出来れば、どんな状況でも心底親しくなれることが、3 つの映画を通して理解出来た。今後、海外留学や旅行に行く機会があれば、この研究を基に、カルチャーショックに陥ることがあっても自分自身から歩み寄り、人生の中で素敵な経験を増やしていきたい。

氏 名	高橋寧々	学籍番号	P015017	ゼミ No.	12
テーマ	アスペルガー障害の子どもをもつ母親への支援のあり方について				

第 1 章 序論 近年、発達障害とみなされる子どもの発症要因として様々な分析がされているが、未だ明確な結論は得られていない。アスペルガー障害の子どもは、他者の表情や場の状況を読み取ることが困難であり、限定的なものへの興味関心やこだわり行動から対人関係上多くの問題を抱えている。しかし知的に明らかな遅れがないため障害に気付かれにくい。この点を理解し、アスペルガー障害の子をもつ母親が体験している困難、実際に受けている支援及び必要とする支援について考察を行った。

第 2 章 日本社会の教育環境の現状と発達障害 平成 25 年に行われた文部科学省「特別支援教育の現状」調査によると、過去 10 年間の推移を基に、特別支援教育を必要とする児童生徒は全児童生徒数の 3.11%（約 32 万人）から更に増加すると予測されている。なかでも、発達障害を支援対象に含む特別支援学級と通級の児童生徒数の増加率は、それを含まない特別支援学校より高く、今後も増加傾向が予測されている。

第 3 章 発達障害とは この章ではまず発達障害の定義を述べ、「発達障害者支援法」について説明した。また、分類と症状について「DSM-5」を基に紹介した。発達障害は自閉スペクトラム症、注意欠陥・多動症、限局性学習症に分けられるが、2013 年以降アスペルガー障害が自閉スペクトラム症に含まれたため、現在実際に使われている診断基準を載せている。しかしこの改定後の診断基準によっても、実際には症状が重複するなど判別するのに時間がかかり、難しいということが考えられる。

第 4 章 インタビュー調査 こうしたアスペルガー障害をもつ子どもとその母親への支援には多くの課題があり、家庭、学校、病院、カウンセラーなど支援のネットワークの中にあっても、多くの課題や不安を抱えながら適切な支援を受けられない母親は多く、個人のニーズも様々である。そこで聴き取り調査を行った。母親へのインタビューの結果から、夫の関心の低さや本人への診断名告知が困難であること、当時は発達障害への意識が低く学校での合理的配慮も受けられなかったなど、いくつかの困難を抱えていたことが浮上し、支援のあり方に主な課題があることが理解できた。

第 5 章 今後の展望と課題 母親は、最も支えられてきた支援コーディネーターを中心に自ら支援の繋がりを広げていた。このような積極性は、ニーズに応じて適切な支援を受ける上で欠かせない。しかし、カウンセラーなどの専門員が必ずしも最適な支援者とは言えず、相性や支援体制によるずれが生じることがある。母親への支援においては、社会的役割を重要視し過ぎず、的確な情報提供や家族の協力に加えて、「心のキーパーソン」を見つけることが大変重要になると考える。

本人への診断名告知については、いつ誰がどのように告知するかといった研究がされているが、実際には理想的なあり方と大きな隔たりがある。このような実態を明らかにするとともに、その研究を将来の仕事に生かしたいと考えている。

氏 名	田原 沙紀	学籍番号	P015019	ゼミ No.	12
テーマ	アイドルが社会にもたらす影響 ーアイドル・ファン・メディアの視点からー				

ジャニーズを含むアイドルという存在はファンだけでなく、時には社会に影響を与えることがあるのではないかと考えた。その場合、筆者自身も、少なからず何かしらの影響を受けているものと考えられる。果たして、アイドルという存在は社会に影響や効果をもたらしているのか。その場合、ファンを含む私たち一般人の考え方にどのような影響や効果をもたらしているのか。本研究では、社会や私たちへの影響や効果を具体的に追及し、考察することにした。

第 1 章 アイドルの変容

アイドルとは若者世代を中心とした文化であり、歌手やスターとしての実力よりも性や若さといったものをアピールする存在である。アイドル自身が直接的に何かを発信するには限界がある。主にメディアを通して発信することが多いが、アイドルとファンの密接な距離を保っている現代のアイドルは、メディア経由で自ら発信しなくても大きな影響を与えられることがある。それはファンを経由することだ。近年、SNS が普及する等、国内外の人同士でも簡単にコミュニケーションが取れるようになり、ファン同士、ファンとファンではない人とでも簡単に国内外関係なくコミュニケーションを取ることが可能だ。アイドルは SNS の普及と共に変容してきている。

第 2 章 アイドル・ファン・メディアが社会に与える影響

日本のアイドルグループである櫛坂 46 が 2016 年に横浜市で開かれたイベントで着た衣装がドイツの軍服に酷似していると指摘されたことがあった。ファンの間では好評だったものの、ネット上では第二次世界大戦時のことを想起させるという批判が国内外で起こる事態となった。ネットというメディアを通さなければ、出来事はここまで大きな反応が起こらなかった可能性がある。ネット上で話題になるという事は、今回の事例にはメディアが必要不可欠な存在であると言える。ネット上で話題になる場合、マスメディアの大きな力も必要だが、個人間で使用されるパーソナルメディアも必要不可欠である。この事例は、トータルだと約 2 週間余りの期間で、世界規模で注目される大きな出来事となった。メディアを経由した影響ではあるが、SNS が普及した事によって影響の早さというのは良くも悪くも早くなっていると言える。

第 3 章 考察

アイドルを含むタレントにはメディアによって増幅される影響力がある。だからこそ、アイドルたち自身を含む私たちも歴史や時代背景といった知識を持つことが重要だと考える。それは、アイドルでなく単なる視聴者である私たち一般人も、アイドルの持つ社会的な影響力の一部となっている可能性があるからだ。

氏 名	續木 美美	学籍番号	P015021	ゼミ No.	12
-----	-------	------	---------	--------	----

テーマ	日本と韓国を中心にみる英語教育改革
-----	-------------------

現在、日本は少子高齢化の対策として、外国人労働者の受け入れ拡大を早急に進めている。近い将来、日本社会の「多文化化」がさらに進み、文化背景の異なる外国人と英語をはじめとする外国語によるコミュニケーションが日常的により必要とされる社会が予測されている。とくに国際通用語である英語の重要性は一層高まることから、英語教育の改善が求められてきた。

2020 年には東京オリンピック・パラリンピックを迎え、英語の必要性を身近に感じるが増えていく中で、英語を苦手と感じる人はまだまだ多いのが現状である。このような背景から、日本では海外の英語教育についての調査をもとに、2001 年頃から小学校から大学まで一貫した英語教育改革の充実と改革が検討され、英語教育の低年齢化に向けた改革が段階的に進められてきた。例えば、小学校は従来 5 年生頃からローマ字だけだったが、2009 年度以降、小学校 5 年生から外国語活動として英語に触れる時間が設けられ、さらに、2018 年度からは、小学校 5・6 年生で英語が教科化された。今後、小学校 3 年生から英語が導入されることも検討されている。

今回の卒業研究では、文部科学省の資料と論文で文献調査し、日本と韓国を中心に英語教育改革について研究した。韓国は英語教育改革を先駆的に進めた国であるため、ほとんどが 10 年ぐらい前のデータで最新のデータを見つけるのに苦労したが、現在の日本と同じように、韓国国内で賛否両論がある中、1990 年代に英語教育の抜本的な改革に着手していたためであることがわかった。

日本の英語教育改革については、英語教育改革の背景、小中高での英語教育の接続と大学との連携、韓国を中心としたアジア諸国（中国、シンガポール、タイ、台湾）の小学校英語教育改革、外国語活動の現状と改善点について詳しく調べた。その結果、①中学卒業時に 5 割以上の生徒が英検 3 級程度以上達成を目標としているが、達成度はまだ低く、②生徒の英語による言語活動の割合は 7 割程度とかなり高く、③英語教育必修化、スピーキングとライティングを組み込んだカリキュラム、到達レベル、教員養成などの面で課題があり、④子どもが英語に対する意欲や関心を高めるためには、保護者との連携が欠かせない、⑤日本は韓国はじめ他のアジア諸国より改革の面で遅れている、ということが分かった。

今後、日本でも英語教育の低年齢化が始まり、グローバル化の中で、2050 年を見越した改革が続くことであろう。また、小中高が連携して大学に進むまでの英語能力の基礎づくりが充実し、さらに進むことを望んでいる。今回調査したのは韓国、中国、台湾など近隣のアジア諸国だったが、他のアジアの国々やヨーロッパ諸国の英語教育も機会があれば調べてみたい。

氏 名	早川 胡子	学籍番号	P015025	ゼミ No.	12
テーマ	日本人女性による韓国大衆文化の受容 ー第 3 次韓流ブームはなぜ起きているのかー				

K・POP にハマったことをきっかけに筆者は「韓国」について興味を持ち始めた。そして同じように「韓国」が好きな女性たちはなぜ好きなのか、さらにどうしていま第 3 次韓流ブームが起きているのか知りたいと考え、このテーマに至った。

第 3 次韓流ブームは韓国グルメ、韓国コスメ、K・POP により構成されている。その始まりは 2017 年初頭に「チーズタッカルビ」が新大久保・コリアンタウンで人気を集めたことからであった。「インスタ映え」することから Instagram で一気に拡散され、さびれていた街にかつての賑わいを取り戻した。さらに、その人気により「韓国コスメ」や「K・POP」が再び注目を集めるようになったのだ。

日本人女性のトレンドになっている韓国コスメは、その SNS 映えする見た目からインスタグラマーや、ユーチューバーたちにより紹介され、雑誌でもたびたび特集が組まれるほどである。韓国コスメは低価格でありながら高品質であり、斬新で新しいアイデアの新商品を次々と発売している。

新たな「ジャンル」として定着してきている K・POP は、「JC・JK 流行語大賞 2017」のヒト部門で TWICE が 1 位選ばれ、その TWICE がとして 6 年ぶりに紅白歌合戦に出演するなど、その人気が再熱している。MV が動画投稿サイト YouTube に投稿されれば、その再生回数が 1 億回を越えることも当たり前になっており、日本でも自由に閲覧できる YouTube は、ネット世代の 10～20 代のファン層を獲得している。

本学と近隣の大学 3 校で 7 月に行った韓国コスメや K・POP についてのアンケート調査では、229 人から回答を回収することができた。結果として、日本人女性は化粧品を買う上で、「使い心地」と「安さ」を重要視していることが分かった。また、K・POP においては、全体の約半数の人が K・POP が好きだと回答しており、イメージとしてはダンスやパフォーマンス力の高さ、そして K・POP アイドルの容姿やスタイルが高く評価されていることが分かった。

現在起きている第 3 次韓流ブームは 10 代～20 代前半と若い世代から支持され、さらに Twitter や Instagram などの SNS や動画投稿サイトの YouTube により、その情報が発信されている。ティーン世代の女性はインターネットや SNS から得られる、移りゆく流行やトレンドに特に敏感である。日本にはないような韓国のグルメやコスメ、音楽がそうした日本人女性たちの目に留まり、SNS などを通じて拡散されたことが、第 3 次韓流ブームに繋がったのではないだろうか。

第 3 次韓流ブームの中心である若い世代は、「韓国」に対して「悪いイメージ」を持つ人は少なく「平和ボケ」してしまっている。韓国の大衆文化を受け入れ、慣れ親しんでいる今こそ、韓流ブームによって少しでも多くの日本人が歴史問題に目を向け、知っていくきっかけになることを願う。

氏 名	星山 陽香	学籍番号	P015031	ゼミ No.	12
テーマ	ファッションとコミュニケーションの関係性 ー カラーコーディネーションに関するイメージギャップ ー				

第 1 章 はじめに

ファッションは服を着る事から始まるかそれ以上のものがあると考ええる。なぜなら、自分が好きだと思ふ服装を毎日して外に出ているからだ。目的や相手によってコミュニケーションができていないのではなか。テーマにもあるコミュニケーションとファッション（ファッション価値）、コーディネートに必要な「色彩」に視点を置き研究を進めることにした。

第 2 章 研究目的

選ぶ服装のスタイルや色彩で、伝わるイメージは大きく異なる。ファッションを通して、人は他者とコミュニケーションしていると言える。また他者に与える印象や他者から与えられる評価はファッションに価値を生む。そこで、全体的なファッションが与える影響や色の組合せの効果を調べ、ファッションがどのようなコミュニケーションを生むかについて文献調査をもとに研究した。

第 3 章 ファッションとは

第 1 節は親世代(1980 年代)を中心にファッションの流行と現代とのイメージギャップを見ていった。第 2 節では消費者の視点から「色彩」「カラーコーディネーション」について考えた。色自体は「ただの色」と考える人が多いかもしれない。しかし無意識に色の影響を受けているのではないか。実際、色を性格に置き換えて考えると、「ピンクが好きな人は女の子らしく可愛い物が好き」など色の印象によって性格も自然と判断される。第 3 節では他者に与える印象について、服の系統ごとに考察した。

第 4 章 ファッションの価値観についてアンケート調査

筆者と同じ年代の女性のファッション観（価値観）について身近な女性の意見を知るために、松山東雲女子大学生・短期大学生を対象にアンケート調査を実施した。回答を集計し自由記述に関する考察を含めてまとめた結果、予想通り、ほとんどの女子大生がファッションに興味がありうるということが分かった。またファッション雑誌を読まなくても Instagram や Twitter などの SNS で情報を得ることが出来、スマートフォンのアプリなどでトレンドを知ることが出来ること、「カジュアルでシンプルな服装」が流行に偏らずに楽に着ることが出来ること、親世代（1980 年代）と比べると、あまりお金を使わずにお洒落を楽しんでいることが特徴として明らかになった。

第 5 章 まとめ

今回の研究を通して、自分自身にとってファッションや服装は本当に大事なものであり、お洒落はやはり自分にとって最も好きな事だということへの理解が一層深まった。服装、アクセサリ、色などの組合せを少しでも変えることにより、お洒落を楽しむことが可能で、コミュニケーションの幅が広がっていくだろう。

氏 名	山本 英里奈	学籍番号	P015039	ゼミNo.	12
テーマ	女性はずなぜ痩せたがるのか ー現代女性の「痩せ志向」の背景を考えるー				
【背景・目的】					
筆者は以前、「痩せすぎが理想体型？」というテーマのもとレジュメ作成を行ったことがきっかけで、現代女性の「痩せ志向」の問題について知り、より深く研究したいと、卒業研究テーマにすることとした。本研究では、若い女性の痩せ志向の背景にある理由やきっかけ、痩せ志向に影響を与えているもの、また、若い女性が興味をもつダイエット方法、その情報の入手手段などについて探っていった。					
【内容・方法】					
現実自己と理想自己のギャップや、現代女性の痩せ志向の現状、痩せ志向の増加における社会の取り組みについて、文献調査とインターネットで資料収集を行い、本学学生 170 人を対象に「現代女性の痩せ志向に対する認識」「自分自身の理想体型」「ダイエットに対する意識」の 3 つの領域についてアンケート調査を行った。					
【結果・考察】					
文献から、痩せ志向には、メディアなどだけでなく「ステレオタイプ」や「現実自己と理想自己」、「公的自己意識と他者意識」といった心理的背景も影響していることが分かった。また、アンケート調査から、痩せ志向の人が増えてきていると考える理由では「現代では痩せている方が綺麗だというイメージが強いから」という回答が 67%と最も多く、次いで、「メディアに出てくるモデルや女優に痩せている人が多いから」との回答が 64%と続いた。やはり現代の若者には「痩せ＝綺麗」という固定観念が植え付けられており、こうした背景の中で、痩せ願望を持っている人が約 85%と非常に高い割合を占めている現状が明らかとなった。その反面、痩せすぎの弊害を理解している人は約 42%と想像以上に少なく、まずは痩せすぎの問題について理解を深めることが必要不可欠なことであると考えられる。					
痩せ問題への取り組みでは、厚生労働省による「国民健康・栄養調査」（平成 29 年）で、現代の日本女性の 8 人に 1 人が「痩せすぎ」であり、現代女性の栄養状態は食糧難の終戦直後よりも悪い現状が明らかとなった。そこで、「健康日本 21（第 2 次）」では第 1 次に引き続き、20 歳代女性のやせの者の割合を 29.0%から 20%に低減する目標を掲げたが、いまだに、明らかに健康を害するレベルの低体重モデルが、メディアに好ましい美の基準の持ち主として取り上げられている。					
ヨーロッパでは、2000 年初頭からイタリアなどで痩せすぎモデルが禁止され、フランスでは 2017 年に痩せすぎモデルの活動が法律で規制された。今後アメリカでも規制が検討されている。日本は今後、いま問題となっている「痩せすぎマネキン」を廃棄して「標準体型マネキン」に戻すことの重要性を定着させ、さらに海外での対策を見習い、そういった規制を実施することを視野に入れるべきであろう。					

氏 名	若宮 愛美	学籍番号	P015042	ゼミ No.	12
テーマ	インターネット依存症				

近年はとても便利な世の中になった。その一つはインターネットの普及である。総務省（2014，2018）によると 2017 年時点でインターネットの利用率は国民の 8 割にも及んでいた。近年では小、中学生からスマートフォンを所持している人が多く、インターネットに依存し、勉強に支障がでていることが指摘されている。このような社会背景や現状から、インターネットへの依存問題に着目することにした。

インターネットのメリットは、情報量の多さ、スピード、通販、コミュニケーションツールの豊富さ、ゲームと多いが、デメリットも多い。情報の信ぴょう性や、個人情報の漏えい、悪質な書き込みなど気を付けなければならないことがある。その中でも社会問題化しているのはインターネット依存症である。

ネットへ依存することにより、視力の低下、肩こり、若者の運動不足や身体能力の低下にもつながっている。また思考力や意欲の低下により、勉強や仕事などにも影響している。（樋口 2013）長時間のオンラインゲームにより死に至った事例もあり、生活に様々な影響を与えている。（朝日新聞 2018）

平成 26 年には Young スコアによるネット依存的傾向中以上の人は 54.3% と半数以上いた。年代別にみると 10・20 代が最も多く 68% だった。スマートフォン未保有者よりスマートフォン保有者のほうが依存的傾向は高く、厚生労働省（2018）でも、ネット依存の疑いがある全国の中高生は 2012 年度で 52 万人だったが、2018 年では 92 万人にのぼり、5 年間で 40 万人増加した。若者による依存者が増えた背景には、少なからずスマートフォンの普及が関係していることが分かる。

さらに、インターネット依存の問題は日本のみならず海外でも社会的問題となっている。近隣の韓国では全世代で多くの依存的傾向者がいる。中国では端末を脱獄して使っている人がいるのが特徴である。日本では、友達とつながっていないと不安になる「つながり依存」というものがあるため、主にコミュニケーションツールやオンラインゲームなどへの依存度が高い。

世界保健機関 WHO は 2018 年に「ゲーム障害」を新たな疾病として認定された。最近日本では 2018 年に神戸大学院にネット依存症専門外来が開設されるなど、インターネット依存者の予防・治療に大きな進歩が見られるようになった。しかし、ネット依存は病気というよりも自己責任の結果と見られがちである。ネット依存に対する国民の意識を高め、知識を広めていかなければ、インターネット依存という疾病に対する危機意識の高まりを見ることは難しいだろう。

氏 名	高田瑞希	学籍番号	P015016	ゼミNo.	13
テーマ	北宇和郡鬼北町地域おこし協力隊の活動を促進するための方策の提案				

本研究では、北宇和郡鬼北町地域おこし協力隊の課題を明らかにし、活動促進のための方策を提案することを目的としている。

第1章では、地方の現状について述べている。地方は少子高齢化、大都市への人口流入による過疎化が進行している。地域力の維持・強化を図るためには、担い手となる人材の確保が特に重要な課題である。その解決策の1つとして、地域おこし協力隊がある。

第2章では、地域おこし協力隊制度の概要、愛媛県内の地域おこし協力隊の現状について述べている。地域おこし協力隊は都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化にも資する取り組みであり、有効な策であると考えられている。愛媛県でも18の自治体でこの制度が導入されていることがわかった。しかし、各地域が募集人数に対し、それ以上の応募があるなか、鬼北町は隊員不在の状態が続いている。

第3章では、地域おこし協力隊についての先行研究、本研究の目的について述べている。地域おこし協力隊の現状や課題についての先行研究は多数あるが、実際に課題を解決し、活動を促進していくための方策について指摘する先行研究は乏しいと感じた。そこで、本研究では、鬼北町地域おこし協力隊の課題を解決するための方策について明らかにすることを目的とした。

第4章では、鬼北町地域おこし協力隊の方へのインタビュー調査について述べている。調査は在任中の隊員1名、任期終了後鬼北町内に定住している2名の計3名に対し、インタビューを行った。地域おこし協力隊に応募する理由は様々であり、〈〈夢を実現させるための足掛かり〉〉や〈〈働くための基盤作り〉〉にしている人がいることが分かった。また、調査協力者が実際に地域おこし協力隊として活動して〈〈将来のビジョン〉〉を早い段階で考えておくことの必要性を感じていることが分かった。

第5章では、インタビュー調査の結果を踏まえての考察、鬼北町地域おこし協力隊の活動促進のための方策の提案について述べている。インタビュー調査の結果、地域おこし協力隊に応募する人は、〈〈将来のビジョン〉〉を持って応募すること、鬼北町役場（行政）は、地域おこし協力隊募集ブースでの取り組み、任期終了後も安心して定住するための仕組みづくりが課題であることが明らかになった。そして、隊員、鬼北町役場（行政）に対する方策を指摘した。

以上により、鬼北町地域おこし協力隊の今後の活動促進のための方策として、地域おこし協力隊に応募する人が〈〈将来のビジョン〉〉を持って応募するために（1）鬼北町地域おこし協力隊マッチング診断の実施、鬼北町役場（行政）の募集方法、支援体制のあり方として（2）鬼北町ポストカードの作成、配布（3）鬼北町地域おこし協力隊専門員（担当者）の配置、を提案した。

氏 名	入山晃子	学籍番号	P015501	ゼミ No.	13
テーマ	大学における社会人学生募集の現状と課題 ～松山東雲女子大学の社会人学生募集活動から～				
本論では、大学における社会人学生募集の現状と課題について松山東雲女子大学（以下、本学）の社会人学生募集活動から明らかにすることを目的とする。 第1章では、問題提起、背景、本論の目的と方法について述べている。 背景については、まず、社会人学生を増やそうとする国の動向を紹介する。 文部科学省は「学習者個人の要請に応えるだけでなく、社会的要請に応える取組でもある。また、各国の動向をみても、社会人就学が学校教育の現代化に寄与し、経営上も効果的である」とその意義を唱えている。各省庁の政策の中に社会人の就学を進める動きがみられる。次に大学の現状を述べる。今、大学は進学率が上がりその数も増えているが、地方大学においては充足率が低い。また、少子化の影響を受け、危機感を持った大学は学生募集に力を入れているが、社会人学生に対する募集活動は見えてこない。 次に社会人学生の現状について記す。社会人学生に関する先行研究のよって動機や目的は明らかにされているが、社会人の募集について触れられた事例は少ない。「学び直し」の需要や社会人の意識は高いが「学び直し」を阻む要因があることに触れる。 第2章では本学の社会人学生募集活動の現状、大学の社会人学生募集の現状と課題について述べていく。本学の社会人募集活動は、オープンキャンパス、雑誌などへの広告、事業所訪問である。そのうちオープンキャンパスの参加者数や雑誌広告から検討した。本学はオープンキャンパス前に広告を出しているが、毎年の入学者は増えておらず募集活動の成果があるとはいえない。他大学は、学校案内に社会人学生募集を載せているところは少なく、本学程に積極的ではないことがいえる。 第3章では考察を述べる。大学の学生募集は現役学生の募集を優先している現状があり、社会人学生募集には積極的ではないといえる。また、「社会人の学び直し」を重要視している大学は多いが、その割合は私立大学が一番低い。社会人学生受け入れに対する意識改革が課題ではないかと考える。 おわりに、本論の結果と今後の課題について述べ、締めくくる。新しい時代の大学の在り方として、社会貢献が大学の使命であるという。地方大学において社会人学生を募集していると声を上げることが地域貢献に繋がると期待したい。					

氏 名	馬越 遥香	学籍番号	P 015004	ゼミ No.	14
テーマ	飲酒と喫煙における健康被害				

第 1 章 はじめに

飲酒と喫煙はそれぞれ健康にどのような影響を及ぼすのか、また同時習慣ではリスクはどう変わるのかを研究する。

第 2 章、第 3 章 飲酒による健康被害・歴史と対策

アルコールの影響により意識レベルの低下、嘔吐、呼吸状態の悪化などに陥る急性アルコール中毒や肝臓病、メタボリックシンドロームなどのリスクが高くなる。また、心臓病や心筋梗塞、動脈硬化などの大きな疾患に繋がる可能性も高くなる。女性の飲酒によっては体内の水分量が男性に比べて少ないため、血中アルコール濃度が高くなり、急性アルコール中毒になる可能性が高い。妊娠中の女性の飲酒により、生まれてくる赤ちゃんに様々な悪影響が出る可能性がある。

健康日本 21 は現在第 2 次が行われており、アルコール関連問題の早期発見・早期介入や未成年者の飲酒防止・国民への情報提供・取り巻く環境の整備を対策として挙げている。

第 4 章、第 5 章 喫煙による健康被害・歴史と対策

喫煙による健康被害として、がん・心疾患・脳卒中など多くの病気と関係している。現在の煙草製品には「依存性」「有害性」「魅惑性」を有しており、粒子成分、ガス成分、発がん成分が多く含まれている。煙の通り道となる口、喉、肺などが特にがんのリスクが高くなる。女性の喫煙によっては、生理不順や肌荒れが挙げられるが、妊娠中の女性については胎児への影響が大きいと言われる。早産や死産、低体重出生児、先天異常などの可能性が大きくなる。明治頃からは学習院の禁煙令、煙草の専売体制の確立が進められた。喫煙については多くの法律、条令、通知、指針などが存在する。

第 6 章 飲酒と喫煙の同時習慣による健康被害

1990 年から 10 年にわたり行われた調査では、喫煙をする人のがん死亡率は飲酒量の増加とともに増加していた。アルコールの成分に煙草のがん原物質を活性化させる作用があり、分解能力が弱い場合は特にがんの危険性が上昇する。

第 7 章 結論

飲酒と喫煙には直接的な健康被害と間接的な健康被害があり、大きな疾患へのリスクが高まる。また、女性の飲酒・喫煙によって出生児に大きな影響がでる可能性を考えなければならない。多くの人が健康への影響を知っていく必要がある。

氏 名	岡田 瞳	学籍番号	P015007	ゼミ No.	14
テーマ	現代の女子大学生バレーボール選手におけるスポーツ傷害と予防				
【研究背景と目的】					
近年、競技スポーツ実施下で、多くの傷害が報告されている。現場ではスポーツ障害の予防について十分な知識を持つ指導者が不足しており選手が身体的・心理的に大きな不安を抱えたままの競技復帰を果たしている現状もある。これらによると、スポーツ傷害でスポーツ活動だけでなく日常生活に支障をもたらすこともある。そのための予防方法は種目によって異なるが、私が高校、大学と続けていたバレーボールを中心に研究する。高校生の時はトレーナーや栄養士の方がいたので、怪我のケア、今後この怪我をしないための予防方法、そして食事の栄養管理や体調管理はできる環境にいた。しかし、大学生になって環境が大きく変化し、高校生の時にやっていたことを自分でしなければならなくなった。そこで本研究では、S 女大学バレーボール部所属の学生を対象とし、スポーツ傷害・予防方法を調べていく。					
【研究方法】					
研究方法としてはアンケート調査を行った。傷害の有無や受傷部位、その傷害が日常生活への支障になるか、そして普段行っている予防方法などを質問した。その結果をもとに、バレーボール選手はどの部位の傷害が多いのか、現在行っている予防方法にプラスしてやるべきことは何かを検討した。					
【結果と考察】					
バレーボールで 5 年以内に 2 日以上活動を休止することがあった人の中でポジション別に見てみると、ほとんどがスパイカーであった。スパイカーはレシーバーと違ってジャンプをしたりネット際のプレーをしたりすることが多いので、その分怪我をする人が多くなっている。怪我をした部位は半数以上の方が足関節で、その全員の怪我の病名が足関節の捻挫であった。次に多い膝の怪我は、ジャンプによる負担が太ももの前側の筋肉の疲労として蓄積される。この筋肉が硬くなるため痛みや炎症の原因になることがある。その他では、腰椎分離症・前十字靱帯断裂・半月板損傷・疲労骨折・脱臼などが挙げられた。傷害の原因で考えられることとして柔軟性とダウン不足と疲労が一番多く挙げられた。今後の課題として、バレーボールは足関節の傷害が多いことから、足首の柔軟性を作ること、テーピングなどで捻挫をしないように予防すること。また、ジャンプをする機会が多いこの競技は他の競技に比べ膝に負担がかかっているため、ストレッチは欠かせない。その日疲労はその日にとっておくこと。そして、痛みや違和感を覚えたら我慢をせず、練習を控え休息をとるようにする。					

氏 名	小村 遥	学籍番号	P015012	ゼミ No.	14
テーマ	ソフトテニスにおける認知度の向上ー硬式テニスとの比較を通してー				

1. 研究の動機・目的

私が取り組んでいるソフトテニスというスポーツは、ラケットを使うスポーツでも日本での競技人口は多い。しかし、14 年間続けてきた中で、あまり注目されておらず、認知度の低いスポーツだと感じた。

競技人口の多さに比べて認知度が低い理由に注目し、ソフトテニスの認知度向上のための方策について検討することを目的とし、硬式テニスとの比較によって新たな方策を検討することにした。

2. 本論

第 1 章ではソフトテニスの歴史と現状について述べた。ソフトテニスは日本発祥のスポーツで、約 130 年の歴史がある。中学生の競技人口が多く、部活動におけるテニスはソフトテニス主流とされているが、今後、中学校の部活動に硬式テニス導入されていくことが推測される。第 2 章、第 3 章では、硬式テニスとの比較から認知度が低い原因とされる問題点を 2 つ述べた。ソフトテニスにプロ制度がないこと、オリンピック競技種目に含まれていないということが挙げられた。第 4 章、第 5 章では、ソフトテニスオリンピック競技種目に含まれない理由、含まれるための条件を述べた。公益財団法人日本オリンピック委員会のオリンピック憲章の競技国数の条件を硬式テニスは満たしているが、ソフトテニスは満たしていないので、オリンピックの競技種目になることは難解である。ソフトテニスオリンピック競技種目に含まれるためにはオリンピック憲章の条件を満たすために競技国数を増やす必要がある。アジアを中心に普及しているため、ヨーロッパやアフリカの国々に広める必要がある。もしくは、硬式テニスの種目の一つになることである。その方が近い未来、オリンピックで競技することができるようになるのではないかと考える。第 6 章では現在日本で行われているソフトテニスの普及活動の内容を述べた。競技規則の改訂、映画の公開や海外への普及活動などが行われている。

3. 結論

硬式テニスと比較し、プロ制度の立ち上げ、メディア露出の増加、競技国数の増加が認知度向上への重要なポイントと考える。賞金が出る大会を多く作り、テレビ放映の機会を増やす。実業団やナショナルチームなどの海外遠征を増やし、ソフトテニスを広める。これらの方策を実現させるためには、大口のスポンサーを獲得することが必要である。スポーツにおけるスポンサーの獲得術や、メリットについては今後の課題としたい。今後、ソフトテニスの普及発展のためには日本ソフトテニス連盟の広報委員会や強化委員会、対策プロジェクトなどの活動が重要になってくると考える。

氏 名	重松 茜音	学籍番号	P015014	ゼミNo.	14
テーマ	認知症の特徴と関わり方について				

背景

近年、日本における高齢者の割合は年々増え続けている。今後、高齢者人口の急増とともに認知症患者数も増加し、2020年には325万人まで増加するといわれている。わが国の認知症の原因疾患は、1980年代まで脳血管性認知症が最多とされていたが、近年はアルツハイマー型認知症が最も多い傾向にある。性差については、アルツハイマー型は女性に、脳血管性は男性に多いといわれている。

目的・研究方法

認知症の症状は人それぞれで、同じことを繰り返す、物とられ妄想、帰宅願望があるなど様々な症状がある。本研究では、周辺症状に焦点を当て、行動や心理状況の関連性と認知症のある方との関わり方について研究を進めることを目的とした。ここでの研究は、帰宅願望、物とられ妄想について、高齢者施設で介護職員として働く視点から考察した。

研究方法は、認知症に関する書籍、論文などをもとに文献調査を行った。

考察・結論

帰宅願望の場合、利用者によって施設を利用する理由は異なるため、一人ひとりの「帰りたい」という背景を踏まえたうえで、利用者にとって何が必要であるかを考える。その場限りの対応をしてしまうと、次第に事実でない説明やうそをつかなければならない場面を避けることになりかねない。どうしてもうそをつかなければならないときは、それが本当にその人のためなのか、ということを考える必要がある。

物とられ妄想の場合、誰かに盗られたと考えてしまうのは、それが利用者にとって大切なものであり、なくさないようにするために引き出しの中などにしまい込んだが、自分がどこにしまったのかを忘れてのことなどがある。利用者が探しているものが、昔から使っているものだったり、家族に貰ったものだったり、思い出のあるものだったとき、その物がなくなってしまったと思ったら不安になるはずである。利用者の不安な気持ちに寄り添うことができれば、安心感を与えることができると思われる。

したがって、パーソンセンタードケアの考え方をを用いることで、個人のニーズを満たすことができると考える。また、利用者に満足してもらうために、職員との連携や、他の利用者に与える影響を考えることが必要である。自分の行い次第で、利用者に与える印象が変わってくる。つまり、利用者に満足してもらうことは、職員の満足にも繋がると考えられる。今後の課題は、利用者がどのような場面で満足を得ていると感じるかを検討することである。

氏 名	檜田采佳	学籍番号	P015027	ゼミ No.	14
テーマ	「なじみの音楽と認知症の症状の関係」 —改善効果と活用方法—				
1. 背景・問題意識					
近年、日本では高齢化が進んでいる。日本は 1970 年に高齢化社会に突入した。2016 年の総務省統計局の調査によると、65 歳以上の高齢者人口は 3461 万人で、総人口に占める割合は 27.3% となっており、人口、割合共に過去最高になったことが分かる。こうした高齢化とともに福祉施設も増加し、福祉施設の増加で注目され始めたのが音楽療法である。 筆者の大学 3 年次の実習先はグループホームであり、そこでは食事中的 BGM やレクリエーションや体操の一環として音楽が使われていた。レクリエーションで懐かしい童謡を合唱した際、普段はソファで横になっている利用者が歌詞カードを見て自発的に口ずさんだり、あまり笑わず口数も少ない利用者がこちらに関心を示し話しかけてきたりと様々な姿が見られた。その様子から、音楽は認知症高齢者に何らかの影響を与えており、うまく活用することで認知症の症状緩和へと結びつくのではないかと考えた。					
2. 目的・研究方法					
本研究の目的は収集した書籍・論文をもとに文献調査を行い、施設での音楽の活用状況を把握し、認知症の症状に音楽がどのような影響を与えるのかを考察することと、施設でのより良い音楽の活用方法を検討し、今後の課題を明らかにすることにある。					
3. 結果・考察・結論					
本論における分析の結果、なじみの音楽はコミュニケーション増加や、意欲関心の高まり、存在意義の再確認による自己確立・社会性の取り戻し・維持など、様々なプラスの影響を与えることが分かった。そして、軽度のうちから音楽療法を行うことで症状緩和や認知症高齢者の QOL 向上に結び付くなどなじみの音楽を用いた音楽療法にはまだまだ可能性があることが示唆された。今後の施設での活用方法としては、主体性を高めるための自己表現力向上レクリエーションが必要と考察し、具体例として失敗への不安が少なく参加しやすいなじみの音楽を用いて歌詞を味わうレクリエーションを提案した。 なじみの音楽は一人ひとり異なる。世間一般のなじみの音楽よりも本人のなじみの音楽こそ、より丁寧に本人と向き合い寄り添えることができると考察する。自己表現力向上レクリエーションにも限界はあり、本人や家族へのアセスメントにも限界はある。福祉業界の人手不足解消のための社会制度の見直し改善とともに、意思表示ができない認知症高齢者のなじみの音楽を探る方法を今後研究していく必要がある。					

氏 名	藤田 侑巳	学籍番号	P 015029	ゼミ No.	14
テーマ	軽度発達障害児の関わり方について				

近年、発達障害の子どもたちが増えており ADHD（注意欠陥・多動性障害）、ADS（自閉症スペクトラム）、LD（学習障害）などが昔と比べてメディアで幅広く取り上げられるようになった。発達障害には様々なその子どもたちの個性があり、一人ひとりの性質や特徴が違い一つの障害をとっても症状が軽い子どももいれば重い子どももいる。重い障害の子どもたちはその症状事態目に見えない内面的なものではなく表面的なものが多く、周りから見ると健常者の子どもたちと違うところが見えてくる。しかし、症状が軽い場合はどうだろうか。表面的では見えづらい部分が出てきたり内面的なものが多いため、あまり健常者と見分けがつかない部分もでて来るのではないだろうか。その為、大人になってからも見分けがつかず気付かないまま生活していくうちに気づいたり、気づかず生活を続け両親すらも全く分からない場合もある。そこで今回軽度の障害について深く追求していくためテーマを軽度発達障害児の関わり方にし、考察していく。

障害の主な特徴として、3つ挙げられる。LD、ADHD、HFPDD でまず LD は学習障害で全面的に知的発達の遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算するなど一部の能力が劣っているので周囲にそのことがわかりにくいのが特徴である。ADHD は、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力及び衝動性、多動性を特徴とし、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。HFPDD は人間性が薄く（共感性が乏しい）社会性の発達が悪い、コミュニケーションの障害がある。

このことを踏まえて家族間のかかわりや周りの健常者のかかわりを考察していくと、現代の日本では差別や偏見が昔と比べては格段に減ったが今もなお学校ではいじめがあり、家族間ではその子どもがどうしても受け入れられず、施設に預けている親や兄弟間でもその子と関わらなかつたり、障害があるきょうだいに対しての差別や偏見など健常者の子どもがしている例も少なくない。現在の日本では知識や理解しようと歩みよろうとしていない。理解するうえで障害の子どもたち一人ひとり違った関わり合いが増えその子を生かした支援をしていくことが大切なのではないだろうか。

また、障害は年々増えてきており子どもから大人まで幅広く取り上げられている。このことから発達障害のことについて正しい理解をし、子どもたちに関わる全ての人が、お互い歩み寄ることで関わり方が以前より深く理解していくことにより、その子の特徴をうまく出せるようにできるのではないだろうか。

氏 名	大城 亜未	学籍番号	P015502	ゼミNo.	14
テーマ	家庭環境による子どもの貧困状況と制度や支援				

問題と目的

日本の子どもの貧困率は厚生労働省の調査の結果 13.9%であることが明らかになった。さらに、日本は富裕層と貧困層の格差も激しい。その格差の要因の一つとなっているのが学歴で、親の学歴が低いほどその家庭の子どもは貧困に陥りやすいというのが日本の現状だと言われている。

そこで、実際に先行研究を参考にしたりアンケートを実施するなどして、各層による親の子どもに期待する教育年数や家庭環境によって子どもの将来は左右されるのか、また、きょうだい間での教育格差は生じるのかなどを調べ、日本の子どもを取り巻く環境の現状を知り、そこから見えてくる課題とその課題に対する解決策を考える機会を設けたい。加えて、日本には子育て世代を支援するためにどのような政策がとられているかも調べ、今後どのような取り組みが必要か検討を行う。

先行研究の到達点と課題

本章では、先行研究を通して親の学歴によって子どもの将来が左右されることや親の学歴や所属する層によって子どもに期待する教育年数には違いがあるということがわかった。そのため、特に貧困層にある家庭は親がきょうだい間で期待する教育年数に違いがあると予想する。また、日本の教育環境は各国と比較すると、多額な費用がかかるためそれを軽減するような政策やこれ以上教育格差を拡大しないための具体的な対策を求めているのではないかと考える。

調査、結果、考察

第2章での現在の教育環境と課題を踏まえ、本章では、各層の親がきょうだい間で期待する教育年数に違いは生じるのか、また現代の子育て世代はどのような制度や取り組みを必要と感じているか調査するためアンケートを実施した。その結果、親の所属する層によって多少ではあるがきょうだい間での親が期待する教育年数には違いがあると考えられることができる。また、日本は家庭で負担する教育費用が多いのもあるせいか、現代の子育ては教育費用の見直し、無償化を最も多く求めていることがわかった。一方、家庭環境や親の学歴によって子どもの教育を左右する教育格差の見直しを求める傾向は予想以上にあまりみられず、それよりも子の可能性をもっと広げられるように得意分野を見つける機会の拡大やいずれ社会に出て働く子どもための将来役立つような取り組みを求めていることがわかった。

終わりに

本研究全体を通し、子どもの教育環境を取り巻く問題は深刻であり、深刻化の防止のためにも迅速な対策が必要である。今後は子どもの教育環境を取り巻く問題に対して、具体的な解決策を検討する研究を進めていくことが望ましいと考えられる。

氏 名	坂本 有香	学籍番号	P015013	ゼミNo.	15
テーマ	音楽が感情・気分に及ぼす影響 —調とテンポに着目して—				
【はじめに】我々は、音楽によって感情や気分が影響を及ぼされることが多々ある。これらの音楽は、音楽の3要素(リズム、メロディー、ハーモニー)を変化させることによって雰囲気が大きく変わる。この3要素に着目した先行研究は数多くあるが、要素が厳密に統制された実験刺激を使用した研究は多くない。 【目的】本研究では、メロディーに含まれる調とリズムに含まれるテンポの組み合わせの違いが①聴き手の感情・気分にどのような影響を及ぼすのか、加えて②音楽の感情的性格(聴き手が音楽に対して知覚する印象)にどのような影響を及ぼすのかを検討する。先行研究を基に、聴き手に対して、(1)長調でアップテンポの曲(以下、長 U)は活動的な感情を喚起させる、(2)長調でスローテンポの曲(以下、長 S)は、落ち着きや心地よさを感じさせる、(3)短調でアップテンポの曲(以下、短 U)は、不安感や緊張感を感じさせる、(4)短調でスローテンポの曲(以下、短 S)は、抑鬱や退屈さを感じさせるという4つの仮説を立てた。 【方法】愛媛県内の大学に在学する学生40名に実験を行った。実験刺激は MuseScore2 を用いて作成し、2つの要素を厳密に統制した。質問紙は①を検討するために多面的感情状態尺度(寺崎・古賀・岸本, 1991)と②を検討するために感情価測定尺度(谷口, 1995)を採用した。 【結果】調×テンポ×多面的感情状態尺度得点の分散分析の結果、長 U においては活動的快の得点が有意に高くなり、長 S では非活動的快、親和、集中が高くなった。短 U においては驚愕が高くなり、短 S においては抑鬱・不安、敵意、倦怠が高くなることが見出された。また、調×テンポ×感情価測定尺度得点の分散分析の結果、長 U においては、高揚、軽さの得点が高くなり、長 S においては、親和が高くなることが分かった。短 U においては、強さが高くなり、短 S においては荘重が高くなることが見出された。 【考察】多面的感情状態尺度における分析結果から、長 U では聴き手に対して活動的な感情を喚起する効果、長 S では落ち着きを喚起する効果があったといえる。また、短 S では消極的な感情を喚起させる効果があったといえる。よって、(1)(2)(4)の仮説は支持された。短 U では緊張感を喚起させる効果が認められたが、不安感を喚起させるとは言い難いため、(3)の仮説においては、一部支持されることが明らかとなった。感情価測定尺度における分析結果から、長 U は明るく、長 S は落ち着いた感情的性格を音楽に持たせ、短 U は力強く、短 S は荘厳な感情的性格を持たせることがわかった。					

氏 名	藤岡 真奈	学籍番号	P015028	ゼミNo.	15
テーマ	首の長さから推定された身長が印象形成に及ぼす影響				

【目的】我々は、他者と初めて対面した時、何らかの印象を抱く。その中でも、性格特性についての印象は、人の内面的な部分であるため、初対面の段階でうかがい知れないことの方が多い。では、どのようにして性格特性を判断しているのかというと、顕著で分かりやすい外見・身体的特徴から、「このような性格特性を持った人に違いない」といった推定をしている。つまり、外見・身体的特徴がその人の印象形成に大きな影響を及ぼすことが示唆される。このことから本研究では、身長という身体的特徴に焦点を当て、この特徴が印象形成にどのような影響を及ぼすか検討する。この時、印象形成の手掛かりとして実際の身長の値だけでなく、自ら推定した身長の値も利用するのではないかと考える。そこで、実験参加者に刺激人物の身長を推定してもらう形をとる。また、身長の推定にも、他の身体的特徴を手掛かりとすることが指摘されている(松下・野崎・森川, 2014)。このことから本研究では、身長を推定するための手掛かりとなる身体的特徴として首の長さを採用し、この特徴を手掛かりに、身長が推定されるのかについても併せて検討する。

【方法】愛媛県在住の女子大学生 40 名を対象に実験を実施した。首の長さを長・中(加工なし)・短に加工した刺激を呈示し、質問紙にて推定身長(cm)と印象評定尺度 (あてはまらない 1－あてはまる 5)の回答を求めた。

【結果】印象評定尺度の因子分析を行ったところ、「積極的である」などの項目を含む快活性因子と、「まじめである」などの項目を含む誠実性因子の 2 因子が抽出された。推定身長(高・中・低)×印象 (快活性因子・誠実性因子)の分散分析の結果、推定身長が高いほど、印象評定尺度得点が有意に高かった($p<.05$)。さらに、パス解析を行った結果、首の長さから推定身長(パス係数=.54)、推定身長から快活性因子(.38)と誠実性因子(.25)で、いずれも有意なパスが得られた($p<.001$)。このことから、実験参加者は、刺激人物の首が長いほど身長を高く推定したと考えられる。また、首の長さが推定身長を介して印象形成に影響を及ぼす可能性が示唆された。

【考察】推定身長が高いほど印象評定尺度得点が高くなるという結果は、身長が高いほど、信頼性があると感じたり(山本, 1995)、リーダーシップ能力があると評価されたりする(Re et al., 2013)という先行研究と一致している。また、首が長いほど推定身長が高くなるのは、北岡(2008)の研究で得られた、スリムなほど背が高く見えるという錯視と同じ原理が働いている可能性がある。さらに、首の長さは、印象形成に直接影響を及ぼさないが、身長という他の身体的特徴を介して影響を及ぼす可能性が示唆された。この結果から、身体的特徴の中でも、印象形成に直接影響を及ぼす中心的特性(身長)と、中心的特性を推定するための手掛かりとなる周辺的特性(首の長さ)が存在していると考えられよう。

氏 名	村上 滯佳	学籍番号	P015036	ゼミ No.	15
テーマ	非対面型コミュニケーションにおける送受信者の感情が受送信者の絵文字使用に与える影響				
【目的】近年では、CMC(computer-mediated-communication)での非対面型コミュニケーション(メールや LINE(LINE 株式会社)など)を利用している人が増加している。しかし、非対面型コミュニケーションでは、表情や口調、姿勢などの非言語情報が欠如するため、誤解やすれ違いを生みやすい(加藤・赤堀, 2005)。これらの対策として、文章などに絵文字や顔文字を付与して用いられている(荒川, 2015)。絵文字や顔文字については、様々な研究がなされている。ここではメッセージを送って、その返事を受け取る側のことを送受信者と呼び、送受信者からメッセージを受け取って、その返事を送る側のことを受送信者と呼ぶ。荒川・竹原・鈴木(2006b)は、送受信者の感情の違いによって受送信者が使用する顔文字に違いがあるか検討した。その結果、送受信者がネガティブな感情(不安や怒り、悲しみ)を感じている時に受送信者の使用する顔文字の種類に違いが認められた。しかし、この研究では、送受信者の感情を軽減させる状況における顔文字の使用を検討することが目的であり、ポジティブな感情(喜び)も軽減させるように設定していた。そこで、本研究では絵文字に着目し、送受信者の感情を軽減させるように統制を行わず、受送信者の使用する絵文字の種類に違いがあるか検討する。また、ポジティブな感情に感謝と楽しみも加えて検討する。 【方法】愛媛県内に在学する女子大学生 40 名(平均年齢=21.13,$SD=0.87$)を対象に実験を実施した。非対面型コミュニケーション(LINE)で送受信者から文章が届いた画面を PC で提示し、その届いた文章に対する返信文と絵文字や記号を回答用紙に記入するように求めた。 【結果】受送信者の使用した絵文字の個数で、6(送受信者の文章：喜び・感謝・楽しみ・悲しみ・怒り・不安)×6(絵文字の種類：喜び・感謝・楽しみ・悲しみ・怒り・不安)の分散分析を行った結果、送受信者の文章と絵文字の種類の主効果、交互作用ともに有意な差が見られた($p < .01$)。さらに多重比較を行った結果、送受信者が喜びや感謝、楽しみの文章を送った時には、感謝や楽しみのポジティブな絵文字を使用する傾向があった。また、送受信者が悲しみや怒りを感じている時は、悲しみや不安のネガティブな絵文字を使用する傾向があった。 【考察】 送受信者の感情によって受送信者が使用する絵文字の種類に違いが認められた。さらに、受送信者が絵文字を使用した理由の回答数から、送受信者がポジティブな感情状態である時、受送信者がポジティブな絵文字を使用することは、相手の感情に共感したからであることが言える。一方で、送受信者がネガティブな感情状態である時、受送信者がネガティブな絵文字を使用することは、相手の感情を励ますためや、落ち着かせるためであることが言える。故に、相手の感情を軽減させるためだけに絵文字を使用したのではなく、共感したから使用されることも認められた。					

氏 名	村上侑希	学籍番号	P015037	ゼミ No.	15
テーマ	いじめの形態の変遷 ～学校でのいじめの現状に着目して～				

1. 本研究の目的

いじめは深刻な社会問題である。この問題の解決を難しくしている要因として、過去と現代のいじめの形態が変化していることが考えられる。また、それらの変化に伴っていじめの定義が変化してきていることから、いじめの形態の変遷を論じる前に、いじめの定義を把握しておく必要があるだろう。これらのことを踏まえて、本研究ではいじめの定義や形態の変遷を明らかにすることを目的とする。

2. いじめの定義

文部科学省と研究者のいじめの定義を明らかにしたうえで、本研究では「いじめ」を「学校集団内において、人数などで優位に立つ一方が比較的少数である他方に対して行う行為であり、被害を受けた他方が心身の苦痛または物理的な影響を感じているもの（なお、インターネットを通じて行われるものも含まれ、いじめの発生場所や時間を問わないとする）」と定義した。

3. いじめの形態の変遷

内閣府が発行している子供若者白書（旧青少年白書）と文部科学省の資料を基に、平成 12 年度から平成 29 年度までのいじめの形態の変遷を明らかにした。その中でも、平成 18 年度からいじめの態様の項目として追加されたパソコン欄（パソコンや携帯電話で、誹謗中傷や嫌なことをされる）に注目した。文部科学省(2012)より、平成 24 年度にパソコン欄の件数が増加している。同年頃より、スマートフォンの普及率が急増(総務省, 2017)していることも踏まえると、情報通信機器の普及が近年におけるこのような形態のいじめの増加を後押しした要因のひとつとも考えられる。

4. 現代におけるいじめの現状（ネットいじめ）

近年におけるいじめの現状の特徴的な例として、ここではネットいじめを挙げる。藤・吉田(2014)は、ネットいじめについて、相手に直接的に被害を及ぼす直接的ネットいじめと対象の個人情報や秘密を公開したりするなどの間接的ネットいじめがあることを指摘している。このようないじめの解決を難しくしている要因として、ネットいじめと現実世界でのいじめの特徴の違いも考えられる。今後の対策として、藤・吉田（2014）は、ネットいじめの被害を最小限に留める方法として、被害時の脅威認知に焦点を当てた取り組みが必要であることを指摘している。具体的には、ネットに関する知識や被害時に取るべき対処法を教育すること、被害時の相談先を設置・周知すること、相談によって何が期待できるかを理解させることが重要であると述べている。これによって、被害時にもその脅威を過大視することなく対処できるとしている。

氏 名	成本みのり	学籍番号	P015023	ゼミNo.	16
テーマ	不登校による社会的不利とその支援 教育機会の保障に向けて				
1. 問題意識・背景					
近年、少子高齢化の影響により、日本の年少人口は減少傾向にある。以上を反映して、義務教育にあたる小学校・中学校の児童・生徒数も同じことが言える。ただし、そのような人口動態の変化とは対照的に、文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(2015)によると、不登校の児童・生徒数はむしろ増加し続けていることが分かる。ともかくも、[阿部,2014]において言及されているように、不登校問題の深刻化は日本の将来にも大きな影響を与える。不登校の結果として生じ得る低学歴は非正規労働者、低所得となるリスクを高め、税金・社会保険料の減少にもつながるためである。以上より、不登校の問題は社会全体で捉えていくべき問題であると提起できる。 それでは、すでに公的機関による不登校問題への対策があるにもかかわらず、なぜ不登校児童・生徒数は増え続けているのか。					
2. 目的・研究方法					
本研究の目的は、上述した問題意識のもとで、(1) 不登校問題の現状と、不登校に至る要因の整理、(2) 現行の不登校支援における課題の明確化を行い、効果的な支援のあり方、不登校問題の改善・解消するための方策を提起する。なお、研究方法としては書籍・論文等をもとに文献調査を行った。					
3. 考察・結論					
本論では、「不登校」を「家庭環境」や「経済問題」と結びつけて論じるべきであることを明らかにした。それは、社会や周りの環境が与える影響が大きく、「不登校問題」を広い視野で捉えていく必要があることにもつながってくる。そのような理由により、本研究では不登校児童・生徒への福祉的支援の必要性を強く主張する。そして、人と環境への働きかけを実践し、不登校問題への早期対応を実現するためにも、専門性をもったスクール・ソーシャル・ワーカー（以下、SSW）が重要となり、そのSSWの支援体制の整備が課題となっているわけである。 また、学内、学外で不登校問題への対応が様々な形で取り組まれているなかで、そこでの共通した課題を析出した点もまた、本研究の意義として位置付け得る。つまり、不登校問題への支援の方法やその役割には相違がみられる。しかし、学内・学外双方の施策において専門職の配置が追いついておらず、十分な対応ができていないのが現状である。不登校児童・生徒への支援業務にあたる学内・学外の専門職は質・量ともに不足しており、不登校問題に対してはそれらの人材の確保こそが今後の大きな課題となると考えられる。					

氏 名	濱田 理沙	学籍番号	P015024	ゼミNo.	16
テーマ	家庭内における高齢者虐待の現状と課題				

1. 問題意識・背景

現在の日本は、医療技術の発展などで平均寿命が延びたことにより、日本の総人口に占める 65 歳以上の高齢者の割合は過去最高の 27.7%(2017 年時点)となり、いまや「超高齢社会」に突入している。急速に進む高齢化の中で、高齢者への身体的・心理的な暴力や高齢者にすべき介護や世話などを放棄・放任などの虐待問題が深刻化していることも見逃せない。2006 年に「高齢者虐待防止法」が施行されたが、虐待の相談・通報件数は、2006 年に 18,390 件であった相談・通報件数が 2016 年においては 29,663 件にまで増加しているのである。以上のうち、養介護施設従事者等による高齢者虐待に関する相談・通報件数は 1,723 件であるのに対して、養護者による高齢者虐待は 27,940 件であった。このことから、高齢者虐待は往々にして施設内よりも、個々の家庭内において発生していることが伺える。高齢者虐待に至る要因は、養護者にかかる重い介護負担や、養護者と要介護高齢者の人間関係、養護者・要介護者それぞれの抱えている問題など実に様々である。その一方で、先に述べた急速な日本の高齢化は、今後も介護や療養を必要とする高齢者の増加につながり、さらにそれによって養護者のストレスや介護疲れの要因による虐待が増加することも懸念されるのである。

2. 目的・研究方法

本研究の目的は、上で述べた問題意識のもとで、とりわけ家庭内で発生する高齢者虐待の現状を整理し、虐待に至る要因を追究するとともに、虐待が起きた際の対策や虐待が起きる前の効果的な予防策について考察していく。なお、研究方法としては、高齢者虐待に関する書籍・論文等をもとに文献調査を行った。

3. 考察・結論

本論では、高齢者の虐待問題のなかでも養護者と高齢者の関係性に着目し、虐待に至る背景・要因について明らかにした。まず家庭内における高齢者虐待の要因については、高齢者側、養護・介護者側の双方と両者の関係性をみていく必要がある。というのも、虐待に至るまでの養護者と高齢者の人間関係が、虐待をより複雑なものにしているからである。そのため、適切な支援を行っていくためには高齢者側だけではなく、養護・介護者側への支援も重要となろう。さらに、家庭での虐待を外側(=家庭外)から判断するのは非常に困難であり、家庭という閉鎖的な空間がしばしば養護者を孤立化させているため、高齢者虐待防止ネットワークやキーパーソンなどといった「つながり」の形成も必要不可欠である。例として「隣人祭り」や高齢者や地域住民が気軽に利用できる食堂の開設などが挙げられる。以上のような「つながり」を形成・再構築するための取り組みを各自治体の社会資源に合わせて実施していくことが今後求められる。そして、このような「つながり」が高齢者虐待の予防・防止になりうる。

氏 名	星野 愛	学籍番号	P015030	ゼミ No.	16
テーマ	高齢期の貧困改善 社会保障諸制度との関連				

1.問題意識・背景

内閣府の『平成 29 年度版高齢社会白書』によると、「60 歳以上の高齢者の経済的な暮らし向きについてみると、『心配ない』（『家計にゆとりがあり、全く心配なく暮らしている』と『家計にあまりゆとりはないが、それほど心配なく暮らしている』の計）と感じている人の割合が全体で 64.6%」であるという。以上をみる限り、現在の日本の高齢者はさほど経済的な困窮状態に陥っていないように思われるかもしれない。しかし、以上は高齢者の主観的側面からその生活を捉えたものである。現に、OECD（2012）の調査において、日本の 65 歳以上の相対的貧困率は 19%であり、OECD 諸国の中でも上位の値であった。日本における高齢者と貧困の結びつきはまた、生活保護の世帯類型別受給世帯数からも読み取ることができる。厚生労働省の「生活保護制度の現状について」（2017）によると、高齢者世帯における生活保護受給世帯は 2017 年で 83.9 万世帯であった。2007 年の 49.8 万世帯と比較すると、この 10 年間で 34.1 万世帯増加していることになる。それによって、2017 年の世帯類型別の構成割合についていえば、いまや高齢者世帯は 51%と生活保護受給世帯の約半数を占めているのである。以上のことから、高齢者の貧困は 21 世紀の日本でも確かに存在し、早急に解決すべき社会問題の一つであることは明らかである。

2.目的・研究方法

上述した問題意識のもとで、本研究の目的は収集した書籍・論文をもとに文献調査を行い、①高齢者の貧困問題の現状や、公的年金制度や生活保護制度といった社会保障の諸制度が果たしている役割や、これらの制度と高齢者の貧困問題の関係性を明確にすること、及び②公的年金制度と生活保護制度を繋ぐ仕組みなどについて考察し、今後の高齢者に対する最低生活保障の在り方について検討することにある。

3.考察・結論

本論では日本における高齢期の貧困の現状及び社会保障諸制度と貧困問題の関係性に着目し、高齢期の貧困改善案に向けた方策について論じた。以上によって明らかになったのは、第 1 に公的年金制度には、すべての国民に対しセーフティネットの機能が果たされてとはいえないという問題が存在する。第 2 に生活保護制度には、生活保護法第 1 条において「自立の助長」が規定されているように、長期利用は法の成立段階で想定されておらず、そのため経済的自立が困難な高齢者の受給期間が長期化するという問題が存在する。さらに、第 3 にこの社会保障諸制度間の関係性は希薄であるという問題を明らかにした。以上の改善案として、本研究では公的年金制度の中に公的扶助が組み込まれているスウェーデンの年金制度を取り上げ、高齢期の最低生活保障の一元化の必要性を論じた。

氏 名	松岡 愛実	学籍番号	P015033	ゼミNo.	16
テーマ	高齢者主体の活動しやすい地域社会				

1. 問題意識・背景

定年を迎え、地域での生活が多くなる高齢者に対しては、「生きがい就労」、「シニアボランティア」、「サークル・趣味」などの社会参加活動を行う機会がそれぞれの地域で提供されている。高齢期における以上の活動について、2012年の内閣府『高齢社会対策大綱』では、生きがいを持って活躍し社会参加活動を促進するなど、充実して過ごせる条件の整備を図るとしている。しかしながら、内閣府の「平成 25 年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果」によると、2013 年の 1 年間で何らかの社会参加活動に参加した高齢者が 61.0%となっており、残りの約 4 割の高齢者は参加していない実情にある。一方で、早坂・後藤・中村（2005）による研究において、老化によって心身の諸機能が衰える高齢期にそのような活動をすることは主観的健康感を維持し、高めることもできると述べられている。

2. 目的・研究方法

本研究の目的は、第 1 に関連した研究論文、書籍などから文献調査を行い、社会参加活動に参加する男性と女性について、それぞれの特性を踏まえながら比較し、社会参加活動に参加している高齢者の現状を明らかにすることにある。第 2 に、高齢者が地域でアクティブに活動していくための方策について検討していくことにある。

3. 考察・結論

本論における分析の結果、高齢男性・女性それぞれにおいて社会参加活動に従事するうえでの課題が明らかとなった。まず、高齢男性では、就労に関する社会参加活動を行う一部の者において、それらの活動と男性高齢者の志向とのミスマッチが起きている。他方で、女性では男性に比べ地域との結びつきはあるが、後期高齢者の女性は年齢とともに閉じこもりがちになる傾向がある。

以上の課題を踏まえたうえでの今後の対策としては、高齢男性の場合、就労に関する社会参加活動を促進するための仕組みづくりが重要となる。このことより、「高齢者と社会参加活動をコーディネートするコーディネーター」をシルバー人材センターといった地域の身近な就労に関する機関に配置すれば、ミスマッチを解消することができると考えられる。続いて、高齢女性の場合、後期高齢者が年齢とともに閉じこもりがち傾向にあることの解消と主観的健康観を維持するために、社会参加活動への参加をどのように促すかが重要となる。以上に対しては、高齢女性それぞれの日常生活を考慮した社会参加活動をコーディネートする者を、総合的な相談もでき様々なボランティア情報の提供もしている社会福祉協議会といった、地域の福祉を支える身近な機関に配置する必要があると考えられる。さらには、上で述べた高齢者と就労、高齢者と地域をコーディネートする人材を育成することも、今後においては求められる。

氏 名	宮地由季	学籍番号	P015035	ゼミ No.	16
テーマ	高齢者の多様な住環境の在り方 ーより良い暮らしのための課題とその対策ー				

① 問題意識

日本における高齢化の現状として、内閣府の『平成 29 年版高齢社会白書』では、2016 年で高齢化率が 27.3%となっている。このような高齢者人口それ自体の増加に加えて、『平成 28 年版高齢社会白書』によると、要介護者又は要支援者と認定された高齢者についても、2013 年度末で 569.1 万人となっているという。そして、『平成 26 年版高齢社会白書』による高齢者の生活環境への調査では、身体が虚弱化したときに望む居住形態では、「自宅に留まりたい」とする人が全体の約 3 分の 2 を占めている。このことから、今後も増加傾向にある高齢者の中で、介護を必要としながらも、在宅の生活を希望する高齢者がさらに増えていくと考えられる。しかし、多くの高齢者が在宅を希望する中で、国民生活センターに医療機関ネットワーク事業の参画医療機関から提供された事故情報によると、65 歳以上の高齢者の住宅内での事故発生が 77.1%（2013 年）となっている。今後も増加すると考えられる在宅で過ごしたいという高齢者のニーズに対して、われわれはどのように対応すればよいだろうか。

② 目的・研究方法

上述した問題意識のもとで、本研究の目的は在宅で過ごしたいという高齢者のニーズに対応するため、住環境の整備のあり方を追究し、高齢者の生活の質を向上させるためにはどうするべきかを明らかにすることにある。なお、研究方法としては、書籍・論文をもとに文献調査を行った。

③ 考察・結論

本論では高齢者にとってのより良い生活の追究という観点から、高齢者の住まいの現状や住宅改修の課題と対策について、それぞれ取り上げた。その際とくに注目したのは、高齢者の家庭内事故の件数がいまだなお増え続けているという点である。先述のとおり、高齢者のニーズは自宅で生活することの方が割合として高い。それを充足するためにも、住宅改修を活用して住環境を整備していくことは必要不可欠である。しかし、その住宅改修において、厚生労働省は次の課題点、「他のサービスと違い事業者の登録制ではないので、事業者に対する指導が難しい」、「事業者により技術・施工水準のバラツキが大きい」ことを指摘している。この課題に対して、住宅改修において建築事業者の福祉・介護の知識不足があることが明らかとなった。

そのための対策であるが、建築事業者が福祉や介護の知識も交えて住宅改修が行えるように、今後は資格の制定や資格を持った建築事業者のみが住宅改修を請け負える仕組みにすることが必要である。また、住宅改修にあたって、福祉専門職の関与を必須化することも不可欠であると結論づけた。このことから、住宅改修において高齢者のニーズに対応するためには、福祉・建築の双方の視点が重要となるといえる。

氏 名	朱詩麗	学籍番号	P015505	ゼミNo.	17
テーマ	中国人の訪日観光動向と受け入れ側の対応 —松山市の事例から—				

経済成長に伴い外国旅行の需要が急速に拡大している中国からの観光客は日本のインバウンド観光の主力になっている。観光客数の増加やニーズの多様化に伴い、地方への中国人観光客も増加している。本論文では、中国人の訪日観光動向と受け入れ側の対応について、松山市を事例に取り上げ、論じた。

第一章では中国における海外旅行の進展について論じた。中国における海外旅行は1980年代の改革開放政策が実施されて以来、大きな発展を遂げた。中国人の海外観光客数は1993年の370万人から2014年には、1億1660万人に増加した。

第二章では日本での中国人の訪日観光の促進策と観光立国の推進策について論じた。日本は観光立国推進戦略を立てて以来、外国人の訪日観光を積極的に促進してきた。なかでも、ビザ発給の緩和により、中国人観光客を積極的に受け入れてきた。中国人観光客の増加は日本に大きな経済波及効果ももたらした。

第三章では中国人の訪日観光の現状について論じた。近年、訪日中国人観光客は急増している。2010年は約210万人であったが、2017年には1146万人に達した。中国の経済成長と海外旅行の規制の緩和に伴い、団体観光だけでなく、個人観光も拡大し、リピーターも増加している。更に、大都市だけでなく、地方への訪問率も高くなっている。買い物等の「モノ消費」以外に、見聞、体験等の「コト消費」も重視するようになってきている。

第四章では松山市の中国人観光客誘致の取組みと受け入れ対応について論じた。松山市を訪れる中国人観光客数は増加している。中国人観光客は2010年には5800人しかいなかったが、2017年には9万8600人に達し、2010年の17倍になった。しかし、訪日中国人観光客の総人数と比べるとかなり少ない。松山市は中国人観光客を誘致するため、多言語対応、情報発信、交通の整備、既存の観光資源の整備、新たな観光体験の開発に努力している。しかし、まだ多くの課題が残されている。

ここでは、受け入れ環境の整備と観光資源の活性化の2つの側面から課題解決策を考えてみた。受け入れ環境の整備については、中国語対応の充実化、情報発信の強化、公共交通の整備、買い物環境の整備などの対策が考えられる。観光資源の活性化については、中国人観光客の観光ニーズの把握、中国人観光客のニーズに合わせたオーダーメイド観光コースの開発、観光ブランドの構築、中国人観光客の視点からの新たな観光資源の開発などの対策が考えられる。これらの対策によって、更に多くの中国人観光客を誘致することが期待できる。

氏 名	岡市 初枝	学籍番号	P015006	ゼミNo.	18
テーマ	女性のライフサイクル ～団塊世代の女性たち～				

序 現代社会において、多くの人は、定年を迎え仕事から解放されて自由になる。その多くの人は、それからの残りの人生は自分の好きなことを思う存分する、と思われる。だが、既婚女性の場合は事情が異なる。多くの女性は仕事からの解放はあっても、妻役割から解放されることは少ない。ここでは、現在老後期を迎えつつある世代に焦点を当てて、老後期における女性たちの生き方、妻役割についての考え方、今後のあり方などを考察した。

第1章 本稿で考察する世代の人々が生きてきた時代背景として、1960年代の半ばから始まった生活上の諸変化を、1. 寿命の延び、2. 家族形態の変化、3. 女性の高学歴化・就業者の増加、4. 家庭電化を含む技術革新、5. 情報化時代の5項目について述べた。

第2章 現在定年退職を迎えた団塊の世代について述べた。

団塊世代の性格に関する大きな特徴に、「封建性」と「革新性」が共存していることである。前の世代までの「封建性」と、新しい時代のものを積極的に取り入れていくという「革新性」の両面をもっている。

たとえば、私生活の面で、急速に普及したテレビの影響から欧米文化を自分のものとして、受け入れたのもその例である。また、マンガ誌やインベーダーゲームのような若者文化を始めた。見合い婚と恋愛婚が逆転し、友達夫婦・友達親子による「友達家族」の誕生があるなど、家族にも変化が起こる。

第3章 団塊世代の定年退職した後の夫婦生活に関する考察をした。

まず一つの事例として、アメリカの定年退職者夫婦の定年退職後の生活を、文献から考察した。次に、日本の現在の定年退職者夫婦の生活について聞き取り調査を行った。

聞き取り調査より、次のことがわかった。家族の形態では、一番多かったのは夫婦二人暮らしである。夫婦ともに年金収入があり、夫の収入は、主に生活費や冠婚葬祭に使われているのに対し、妻の収入は、主に自分の趣味や孫の小遣いに使われている。家事は、退職前後とも妻が主体であった。しかし、余暇活動が盛んに行われ、毎日充実した時間を過ごしている。家族と団らんしているときより、趣味や、娯楽をしている方が生きがいを感じるという結果であった。

今回の調査から、子育てが終わった（終わりつつある）妻は、今まで子育ても、家事も頑張ってきたこと、また定年後は、夫婦それぞれの楽しみを持ち、お互いに程よい距離を保ち、良い関係を持っていることが分かった。

結論 今回の調査は、趣味・文化活動など地域で活動している層を対象としたものであった。対象者に見る限り、「夫源病」のイメージとは異なり、定年後の「第二の人生」を「束縛を受けない自由な時期」と捉えている。家族を大切に思いつつ、自分も大切にする。何らかの疾病や障害を得る者が多い今後の時間に不安を覚えながらも、生きがいを実現させようとしている。自分らしい健康で自立した「老年期」を夫婦それぞれで実現させようとしていると思われた。

氏 名	奥本 萌香	学籍番号	P015008	ゼミNo.	18
テーマ	対面販売のこれから —販売業を取り巻く変容と、求められる役割—				
消費の形は文化的背景や時代によって変容し、販売やそれらを取り巻くサービスの形も大きく変容してきた。この変容の中で、これからの時代において対面販売はどのような意義を持つのか、また、消費の形が変わっても対面販売は求められていくのかということを考察した。 第1章では、国勢調査の結果から、「販売従事者」の割合が平成12年より年々減少し続けていることを明らかにした。また、通信販売が年々増加していることと、AIの販売業への台頭が販売従事者減少の要因であることを考察した。 第2章では、マーケティング論を参考に、マーケティング・コミュニケーションに関する考え方が、売り手側の視点が強い4P説から、買い手側の視点に立った考えである4C説へ移り変わったことを明らかにした。そして、それら踏まえたIMC(総合型マーケティング・コミュニケーション)へと、販売業の考え方が、販売側から消費者側へシフトしたことを考察した。また、消費者行動論における購買行動に関する知見を用いて、非計画購買の喚起など、販売員が、消費者の購買心理を喚起するアプローチを行うことも可能だということを確認した。 第3章では、対面販売が不必要だと思われる現状に対して、AIには出来ない対面販売にしか出来ない双方向のコミュニケーションについて考察し、消費者にとってもメリットがあることを明らかにした。また、顧客の購買心理に対する販売員のアプローチについて、井上(2018)の先行研究をもとに考察した。そして、顧客の購買心理に、適したアプローチをすることで、販売員と消費者の両者にメリットがあること、双方の間に「信頼」を生むことが出来ることを確認した。 結論として、消費の形が文化的背景や時代によって変容し、通信販売のような非対面販売の形も登場する中、依然として人と人との対面で行なわれる対面販売という販売の形が無くならないのは、対面販売がマニュアル以上の接客を行うことが出来ること、更に消費者の消費行動に訴える効果があるからだと考察した。対人販売と同じようなサービスはAIでも行えるが、それはマニュアル通りの接客であるため、顧客一人一人に対しての接客であるとは言えない。一方、顧客と販売員が1対1でコミュニケーションを取ることが出来る対面販売は、顧客からの情報を得た上で販売員がそれに対応出来れば、顧客が納得いく満足できる購買をすることが出来る。よって、対面販売の必要性は十分にあり、対面販売は無くないことを結論付けた。 販売員の接客を必要としない顧客の存在もあるが、その理由は販売員の接客内容が顧客の求めるものではないからだと考えられるため、顧客が求めているものを提供することが出来れば、対面販売の需要も高まるのではないと思われる。					

氏 名	玉井　タ紀子	学籍番号	P015020	ゼミNo.	18
テーマ	若者の孤独・孤立の現状の問題点と解決策				
近年、孤独・孤立に陥っている若者が増加してきている。本研究では、孤立している若者の推移やその状況を分析し、その課題と支援方法を考察した。 第1章では、フリーター・ニート・ひきこもりの三つについて、その推移を考察した。その結果、フリーター・ニートは、年々増加していた。特に若い年齢層に多かったが、高齢化も進んでいる。ひきこもりの状況は多様であるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する「準ひきこもり」が抜きんで多かった。そのことから、ひきこもりは趣味を持ち、社会との接点を持つことで減らせるのではないかと考えた。 また玄田（2013）が示した「孤立無業（SNEP）」の推移も考察した。その結果、孤立無業は年々増加していた。フリーター・ニート同様、若い年齢層に多かったが、高齢化も進んでいる。性別では女性よりも男性のほうが孤立無業になりやすい。そして、孤立無業に限らず、老後に経済的な不安を抱えた人々が多いことも明らかとなった。 第2章では、ひきこもりには「不登校の延長線上」「就労経験」のあるひきこもりの二つのタイプがあること、ひきこもりは家族関係が関わっており、「一家団らん」のない家庭で起こりやすいこと、近年、社会人のひきこもりが増加していること、さらにはホームレスの中にもひきこもりがいることなど、孤独・孤立の多様化とその背景を考察した。 第3章では、若者が職場でどのような立場に置かされているのかを見た。ひきこもる若者を周囲は否定的に捉えており、どんなに頑張っても報われない状況に直面していることが明らかとなった。斎藤（2017）がいう「生存の不安」と「実存の不安」の二つが、ひきこもり当事者を苦しめている。これらを防ぐには家族や周囲の理解やサポートが必要である。もし、これらの状況に陥っている若者が高齢者となれば、生活状況が悲惨なものとなる。 第4章では、孤立する若者への支援方策として、玄田（2013）の示す五原則をふまえて、池上（2013）の「ひきこもり回復支援プログラム」と藤田（2016）のアセスメントの二つを取り上げ、考察した。孤立している若者はこれらの支援を受けるべきだ。さらに、これらの支援に加えて、家族や専門家も協力して支援方法を探していく必要がある。 若者が孤独・孤立から脱出するための方法として、玄田（2013）は「友だちや知り合いをつくること」「仕事をする」「結婚をすること」の三つを挙げていた。しかし、これらは容易にできることではない。また、アウトリーチをすることも非常に重要であると玄田（2013）は指摘している。ただ、支援を積極的に受けようとする若者もいれば、そうでない若者もいる。そのため、支援を拒否する若者への支援は粘り強さが必要である。					

氏 名	山内 いのり	学籍番号	P015026	ゼミNo.	18
テーマ	体験活動におけるリーダーシップ				

序論

近年、教育活動の一環として外で体験的に学ぶ体験活動の重要性が注目されている。そこで重要となるのが、体験活動で指導する「大人」の役割である。本稿では、体験活動の指導者としての大人の課題を「リーダーシップ」の観点から考察した。

第1章 リーダーシップ

第1章では、リーダーシップの多様性やリーダーの役割について述べた。リーダーシップとは、本来全ての人を持っているものであり、またメンバー間で流動するものであるが、本稿では、特に他者に大きく影響を与える人をリーダーと呼び、考察する。リーダーには、計画立案者、成果分配者、関係調整者、成員代表者などの様々な役割があるが、メンバーを動機づけたり、不安を解消させたりするのも役割の一つである。

第2章 リーダーシップ論

第2章では、三隅（1981）のP型（目標達成へ志向した performance 機能）とM型（集団の自己保存を維持し強化する maintenance 機能）、の二つの観点で捉えるリーダーシップPM論について考察した。これは、それまでの類型概念とは異なり、リーダーシップにPとMが同時に含まれていることを前提として、単一次元でなく、二つの次元を使い、多次元的解析を可能とした新しい指導類型概念であった。

第3章 キャンプにおけるリーダーシップ

第3章では、第2章で述べたリーダーシップ論を用いて事例分析を行った。具体的な事例として筆者が関わってきた神戸YMCAの体験活動の事例を用いた。キャンプにおけるリーダーシップを考察するために三つのキャンプとそのキャンプで必要なリーダーシップを分析した。その結果、年齢や人数、経験、キャンプの期間によりそれぞれ適切なリーダーシップは異なっていたことが分かった。また、失敗した事例も取り上げて分析し、環境面、相手の状況、成熟度などに合わせたリーダーシップがその場に応じて対応する必要があることを考察した。

結論

考察の結果、対象に合わせて決まっているリーダーシップをただ遂行するのではなく、対象者の条件や成熟度、その場の環境に応じて適切なリーダーシップをその場の状況に応じて選択する必要があることが分かった。体験活動は、集団的現象であり、その場における過程であるため、あらかじめこれであるというリーダーシップは存在しない。本稿では、体験活動におけるリーダーシップを考察したが、一般にリーダーという役割に就く人たちは、メンバーの成熟度、直面している状況、環境条件などに応じて適切なリーダーシップを見極める必要がある。

氏 名	増田愛美	学籍番号	P015032	ゼミNo.	18
テーマ	社会的ジレンマ問題からみえる現代社会				

序論

現代社会には、改善したいと思っけていても人間によって引き起こされる様々な社会問題がある。例えば、地球温暖化やいじめなどである。これらには「社会的ジレンマ問題」が含まれている。では、「社会的ジレンマ問題」はなぜ解決できないのだろうか。本稿では、その答えを現代社会が抱えている問題と繋げ、考察した。

第1章 社会的ジレンマとは

第1章では、社会的ジレンマの定義や関連概念について述べたあと、身近にある具体的な問題を取り上げ、それらが人々のどのような考え方や行動において「社会的ジレンマ」といえるのかを考察した。自分の利益を追求し、合理的に行動したつもりが、非合理的な結果を生む。この点において多くの問題が社会的ジレンマ問題だといえる。

第2章 事例からみえる原因と解決策

第2章では、社会的ジレンマ問題の解決方策が提案されている事例を取り上げて考察した。社会的ジレンマ問題の解決方策は主に、構造的方略と心理的方略に分けられることを踏まえて、既に研究で示されている解決方策と照らし合わせ、この問題事例で示されている解決方策について考察した。その結果、提案された解決方策が心理的方略にあてはまるということが確認された。反対に構造的方略には、見張りをおくなど莫大の費用がかかる規模の大きい方策が多く、コストの問題があった。それがこの事例において、心理的方略のみに着目された理由のひとつであった。

第3章 身近な社会的ジレンマ「長時間練習などのブラック部活動」

第3章では、長時間練習に焦点を当てたブラック部活動問題の解決方策の考察を行った。スポーツ庁の実態調査から、改善すべき長時間練習の実態があることを確認した。さらに、ブラック部活動問題は、一人一人が合理的に行動した結果が非合理的な結果を生むという社会的ジレンマの概念に沿った問題であることも明らかになった。これを踏まえ、提案すべき解決方策を考察し、解決することを強制するのではなく、一人一人が自ら協力行動を行いたくなるような方向にもっていく方策を示した。つまり構造的方略ではないということである。これにより、その時その場だけの解決ではなく、長い目で見てブラック部活動問題を解決することができる方策であると考えた。

結論

社会的ジレンマの解決には、構造的方略の方が手っ取り早く、すぐに解決できるかもしれない。しかし構造的方略は、自発的に協力しようという気持ちが薄れ、他人に対する信頼感の低下も引き起こす。これが現代社会の問題であると考えた。構造的方略だけで解決しようとせず、人の内面から自然に協力行動が出る方法が必要である。この理由から、ここでは構造的方略に頼らない方策を考察し、提示した。

氏 名	横山 由佳	学籍番号	P015040	ゼミNo.	18
テーマ	日本における意識的親ペナルティ縮小の必要性				

第 1 章 日本における親ペナルティ

近年、親の幸福について注目が集まっている。本稿では、親の幸福に関する用語として「親ペナルティ」を使用した。これは、子どもを持つ夫婦と子どもを持たない夫婦の幸福度のギャップを指す。厚生労働省の「正社員転換・待遇改善実現プラン」や第一生命経済研究所(2010)の調査から、日本でも雇用・福祉の課題から生じる「働きにくさ」が大きな要因となり、経済的・社会的立場としての親ペナルティが存在することを明らかにした。これに応じた支援の充実化がより推進されれば、生活満足度と親である精神的な幸福度は比例上昇すると推察する。よって本稿では、親が親としての役割を担う一人の人間としての感情的な幸福と、それを向上させるために必要な周囲の支援について考察した。

第 2 章 役割としての母親業

親という存在は、多くの役割を担う存在でもある。ここでは清水ら(2010)の研究を基盤とし、子育てに主に従事することが予測される女性について、専業主婦・常勤・非常勤に分類し考察した。また、中島ら(2016)と熊野(2016)の研究から、常勤の母親は、専業主婦の母親や非常勤の母親より有意に“自己効力感”が高いことが明らかになった。この自己効力感の高さは、行動時のストレスの感じにくさと比例する。多重役割は、負担を負うことが予測されるが、その役割が多いほど、感情によって左右される幸福感への影響は、役割ごとに分散される。故に、多重役割による自己効力感、親役割へのストレス及び心のゆとりに有用であることが期待できる。

第 3 章 父親業参加意識とその支援

ここでは、“育児のサブ当事者”になりやすい父親の育児参加の状況と、参加から得られる影響について考察した。明野ら(2010)の研究から、夫の帰宅時間が早い妻から見た夫の育児サポート認知度が高く、親の幸福度にも比例していることが明らかになった。そのサポートが、周囲より肯定的な評価をされることで、配偶者である妻との関係を通して本人のアウトカムに影響するという因果関係が提起される。更に、父親の育児参加は、本人のウェルビーイングだけでなく、良好な夫婦関係や、子供の学業意欲の向上にも波及することが明らかになった。

第 4 章 結論

日本の子育てにおける現状をみて、親に関わる広い生活分野に影響を与える「親ペナルティ」の存在が明らかになった。親になることを選択する人にもそうでない人にもペナルティを感じさせない社会の仕組みが必要である。また、この分野の研究において多くの研究が進められているが、未だに一定の合意が見られていない。今後、親の主観的幸福度の向上を図るために、より広範囲の課題を詳細に区分した調査を進めることが必要である。

氏 名	吉金 愛美	学籍番号	P015041	ゼミ No.	18
テーマ	祭りの可能性と課題 愛媛県松山市久米地区の秋祭りを事例として				

序論

現代社会は、人と人のつながりが希薄化してきていると言われている。地域のつながりという面において、人のつながりはどのように変わってきているのか。また、地域のつながりを今後も続けていくにはどうすれば良いのか。本研究では、地域行事の中でも「祭り」に焦点をあてて、これらのことを考察していく。また地域行事において人のつながりが変容しているのか、祭りが地域を盛り上げるのにどのように寄与するかという観点のもと、愛媛県松山市の久米地区を具体例として取り上げ考察する。

本論

第 1 章では、地域社会とは、近代社会に入ってから都市や農村の在り方が変わり、社会学でも新しくできた地域の捉え方であることを述べている。また、奥田のコミュニティモデルを取り上げ、コミュニティの分析をしている。第 2 章では、祭りと地域活性化をめぐる先行研究を取り上げた。「地域のつながりの希薄化」を「人と地域のつながり」と「人と人とのつながり」の二つの観点から研究した磯部ら(2013)は、「市民まつり」が地域のつながりの希薄化を食い止め、再生していくことに効果的であると論じている。第 3 章では、来住町の秋祭りを取り上げるにあたり、松山市と久米地区の地域特性を考察した。人口や世帯数、産業別構成などを調査し、久米地区は、歴史は古いが地域のつながりは薄くなりやすい地域特性であると推測される。第 4 章では、来住町の祭りの概要を述べ、実際に 2018 年 10 月 7 日に行った住町の秋祭りの参与観察に基づき、祭りの一日の流れや人々の様子、課題等について考察を行った。また、来住町では神輿のかき手不足解消のため、青年団が立ち上げられ、その立ち上げにかかわった人に、参与観察とは別にインタビューを行った。インタビューでは、祭りを盛り上げようと立ち上がった青年団が、祭り以外の地域行事を盛り上げることに寄与していることが分かった。

結論

今回取り上げた久米地区は、地域住民が主体となって地域行事を行っている。第 2 章で述べた既存研究での分類でいえば、久米地区で行われている秋祭りは「伝統的祭り」だが、人と地域のつながり、人と人との繋がりに対し効果的だと言える。参与観察、インタビューをしてみて、地域行事が盛り上がることで、地域自体が盛り上がるのが分かった。ただし、第 2 章でみた既存研究と同様にここでも高齢化による参加者不足などが課題になっている。また、インタビューでもわかった通り、伝統を重要とするお年寄り、と、どうにか伝統を引き継ぎながら新しいものを取り入れようとする若者との間で軋轢が生じやすくなっていることも課題である。様々な調査から、久米地区における地域行事で人のつながりが行われていると結論付ける。

氏 名	向井綾香	学籍番号	P015044	ゼミNo.	18
テーマ	高齢化社会における観光地の現状				
はじめに 今日の社会では、高齢者の多くは長生きができるようになった。しかし、そのことが背景となり、高齢化が「問題」と言われるようにもなっている。その一つが「健康」である。長寿と健康は等しいとは言えないことも明らかになっている。そこで、この健康を維持・増進させる例として旅行に着目し、観光地が今後取り組むべき課題を明らかにすることを本稿の目的とする。 第1章 なぜ今旅行なのか QOL の問題と余暇の視点から高齢者の旅行について考えることの意義を考察した。高齢者は、ストレスになる要因と隣り合わせである。それが QOL を下げ、健康に影響を及ぼす。QOL を高め、健康を維持・増進するための一方策として、余暇に焦点を当てた。近年の研究において、身体の状態は関係なく旅行への関心は高い。まずは、高齢の旅行者にとってのニーズと、観光地の取り組みを調査することとした。 第2章 道後の現状 道後温泉は、次世代に誇れる道後を継承していく新たなまちづくりとして再スタートしようとしている。そこで、この計画のもとで、平成 27(2015)年に行政と民間が協働で取り組む「道後温泉活性化計画」を策定した。道後温泉は、道後特有の歴史的な風景や街並みを守る取り組みと、観光客を様々な方法で誘客する取り組みに尽力していることが現状である。 第3章 道後調査 観光地の事例として道後を取り上げて、観光客への聞き取り調査と道後温泉活性化担当者へのインタビューを行った。聞き取り調査では、高齢者ならではの視点から様々な意見を得た。それについて観光地側へのインタビューで状況を尋ねると、実際は高齢者のニーズを全て道後で実現させることは困難なことが明らかとなった。道後は、昔ながらの古い観光地である。さらに道後温泉本館に至っては、重要文化財に指定されていたり、坂が多かったりなど道後ならではの条件がある。「道後温泉活性化計画」には、本稿で指摘したバリアフリーについて記載されてあるが、まだ取り組みはされていなかった。道後ならではの条件があっても既存の資源を活用し、少しずつ改善はできるのではないと思われる。 おわりに 観光地には、立地の問題や各観光地の事情など特殊な条件がある。しかし、これからは高齢の観光客が増え、ニーズも複雑で多様になると考えられる。観光地ならではの条件がある中で高齢者のニーズを把握し、対応していくことで余暇を充実させ、QOL を高め、健康寿命を延ばすことに繋がるのではないのだろうか。					